

「生活科」の教育心理学的研究

－「生活科」の授業づくりと 評価を中心として－

(課題番号 05680192)

平成5～7年度科学研究費補助金(一般研究C) 研究成果報告書

1996(平成8)年 3月

研究代表者 藤岡 秀樹

(岩手大学教育学部学校教育講座助教授)

平成5～7年度科学研究費補助金（一般研究C） 研究成果報告書

1. 研究課題 「生活科」の教育心理学的研究 — 「生活科」の授業づくりと評価を中心として —
2. 課題番号 05680192
3. 研究組織 研究代表者 藤岡 秀樹（岩手大学教育学部助教授）
4. 研究経費

平成5年度	800千円
平成6年度	400千円
平成7年度	300千円
計	1500千円
5. 研究発表
 - (ア) 学会誌等
藤岡秀樹 『新しい学力観』を考える－教育心理学の視点から－ 心理科学 18巻1号（印刷中）
 - (イ) 口頭発表
藤岡秀樹 「生活科」の評価についての研究－「生活科」研究推進校の通知表の現状と担当教諭に対する調査結果を中心に－ 日本教育心理学会第36回総会
口頭発表 1994（平成6）年9月
藤岡秀樹 「生活科」と心理学－心理学研究者から見た「生活科」－ 日本教育心理学会第36回総会 自主シンポジウム（企画及び話題提供） 1994年9月
 - (ウ) 出版物
藤岡秀樹（単著） 学力・能力・適性の評価と指導－学校心理学の視点から－ 京都法政出版
1994（平成6）年12月

藤岡秀樹（分担執筆） 豊かな学力観にたつ評価のあり方
はどう変わるか 高階玲治（編） 変化の時代の学校
経営 教育開発研究所 1995（平成7）年8月

藤岡秀樹（分担執筆） 思考・判断のねらいと評価方法
北尾倫彦（編） 新しい学力観と学習評価 図書文化社
1996（平成8）年6月刊行予定

6. 研究成果

本研究は、「生活科」の授業づくりと評価のあり方について、小学校で行われている「生活科」の授業実践の分析や指導と評価のあり方についての調査を基に、教育心理学の視点から検討を行った。その結果、以下の5点の成果を得ることができた。

- ① 文部省の研究指定校等の「生活科」実践の先進校を対象にした調査では、通知表での評価のあり方、指導要録における「生活科」の観点の評価をめぐる問題点、授業における教科書の活用などが明らかにされた。
- ② 現行の「生活科」の教科書の内容分析を行った。
- ③ 本格的実施後、4年経過した時点での一般校の「生活科」担当教師に対する調査では、「生活科」の履修による児童の変容、指導に際しての問題点、評価方法等が明らかにされ、3年生担当教師に対する調査では、「生活科」の履修による児童の変容、「理科」「社会」の指導上の問題点と「生活科」の指導に対する要望等が明らかにされた。
- ④ 「生活科」や「総合学習」の年間指導計画の紹介を行った。
- ⑤ 上記の知見を踏まえて、最後に「生活科」の授業づくりについての提言を行った。

なお、調査によって得られたデータの一部は、まだ分析がなされていないので、後日改めて公表する予定である。

目次

〔研究 1〕 「生活科」の通知表における評価の現状と

評価についての教師の意識 — 研究先進校を対象として —

1. 目的	1
2. 方法	1
3. 結果と考察	
〔1〕 通知表の分析	1
〔2〕 指導要録の記載についての教師の意識の分析 — 『観点別学習状況』欄の評価を中心に —	6
〔3〕 「生活科」の評価全般について	8

〔研究 2〕 「生活科」の教科書の分析

1. 目的	10
2. 方法	10
3. 結果と考察	
〔1〕 教科書の活用度	10
〔2〕 教科書の問題点	11
〔3〕 現行教科書の内容の分析	11

[研究 3] 「生活科」の本格的実施に伴う児童の変容と
教師の「生活科」イメージについての研究

1. 目的	15
2. 方法	15
3. 結果と考察	
[1] 教師の「生活科」のイメージ	15
[2] 「生活科」を学習した児童の特徴	18

[研究 4] 「生活科」の指導と評価についての問題点と
評価のあり方

1. 目的	22
2. 方法	22
3. 結果と考察	
[1] 「生活科」の指導と評価についての問題点や悩み	22
[2] 「生活科」の授業の評価の方法 — 指導要録の3つの 観点の評価を取り上げる —	28
[3] 「生活科」の授業におけるチーム・ティーチングの 導入についての調査	30
[4] 「生活科」の校内研修体制について	32

[研究 5] 3年生担当教師からみた「生活科」「理科」「社会科」の指導のあり方と問題点

1. 目的	33
2. 方法	33
3. 結果と考察	
[1] 3年生の「理科」「社会科」の指導についての 問題点	33
[2] 「生活科」の学習で習得して欲しい事柄について	34
[3] 「総合学習」「合科学習」の実施状況について	36
[4] ポスト「生活科」としての新教科の中・高学年への 導入の賛否について	37

[研究 6] 「生活科」の指導計画の紹介

1. 目的	33
2. 方法	33
3. 各学校の「生活科」の年間指導計画	41

[研究 7] 「生活科」の授業づくり — 楽しくて学力のつく
「生活科」をめざして —

1. 目的	82
2. はじめに	82
3. 価値ある体験・活動することの重要性	82

4. 五感を大切にした授業	83
5. 認識形成を重視した授業	84
6. 「生活科」における指導とは	84
7. 合科・総合活動的視点にたった授業	86
8. 失敗から学ぶ	87
9. 3年での「理科」「社会科」との接続性を持った カリキュラム編成	87
10. 「生活科」の評価	87
11. おわりに	88
[全体的まとめ]	89
[補足資料]	90

〔研究1〕 「生活科」の通知表における 評価の現状と評価についての教師の意識 －研究先進校を対象として－

1. 目的

〔研究1〕では、①通知表における「生活科」の評価の現状－評価方法と評価基準、②教師の「生活科」の評価についての意識－指導要録の記載に際しての困難点、および「生活科」の評価観－の2点を取り上げ、「生活科」研究の推進校を対象に調査を行う。

2. 方法

(1) 調査対象校および被験者

1990年度(平成2年度)と1991年度(平成3年度)の文部省の「生活科」実施推進協力校(計64校)の中から無作為に抽出した55校、および都道府県教育委員会レベルでの研究指定校や「生活科」関連の教育雑誌[『四季の生活科』(東洋館出版社刊)『生活科授業研究』(明治図書刊)]などで紹介された特色のある実践を行っている学校の中から抽出した80校を対象校(計135校)とした。被験者は、対象校の「生活科」研究主任である。

(2) 手続き

1993年9月から10月にかけて、上記の調査対象校に対して、1992年度(平成4年度)または1993年度(平成5年度)の通知表の現物(もしくは通知表の「生活科」の評価欄の箇所を複写したもの)の送付と「生活科」の評価についての質問紙調査の回答を依頼した。なお、送付先は「生活科」研究主任とした。

1993年12月までに回答が寄せられた82校(内訳は、文部省の「生活科」実施推進協力校[以下、“文部省協力校”と呼ぶ]が36校(回収率65.5%)、都道府県教育委員会レベルでの研究指定校や特色のある実践を行っている学校[以下、“実践校”と呼ぶ]が46校(回収率57.5%))を分析の対象とした。ただし、9校は通知表の現物もしくは複写の送付はなく、質問紙の回答のみが寄せられた。

3. 結果と考察

〔1〕通知表の分析

(1) 通知表における「生活科」の評価方法

通知表における評価方法の集計結果をまとめたものを表1に示す。

「観点別評価のみ」の学校が最も多く、52.4%を占め、第2位は「観点別評価と自

由記述の併用」で23.2%を占めていた。実践校では、「観点別評価のみ」が最も多く、6割弱を占めているのに対して、「観点別評価と自由記述の併用」は13.0%と多くはない。一方、文部省の「生活科」推進協力校では、「観点別評価のみ」と「観点別評価と自由記述の併用」の間にそれほどの差が見られず(前者が44.4%,後者が36.1%),対照的な結果となっている。何らかの形で、観点別評価を採用している学校は、文部省協力校では86.1%,実践校では78.3%と、かなり多いことが見いだされる。「生活科」以外の教科では、観点別評価を行っている学校でも、「生活科」では自由記述のみであるという学校が散見する。「生活科」は子どもの“よさ”・変容の過程を評価すべきと考えている学校では、この評価方法を採用している傾向にある。

通知表なしの学校は、2校とも国立大学附属校である。また、総合評定を何らかの形で行っているのは4校にすぎないが、総合評定の評価基準は、「3段階絶対評価」が2校、「2段階絶対評価」が1校、「絶対評価を加味した3段階相対評価(相対評価の各段階の人数配分比率を緩和したもの)」が1校であった。

表1 通知表における「生活科」の評価方法

	文部省協力校 (N=36)	実践校 (N=46)	合計 (N=82)
総合評定のみ	1	0	1
観点別評価のみ	16	27	43
自由記述のみ	4	7	11
総合評定と観点別評価の併用	1	2	3
観点別評価と自由記述の併用	13	6	19
1年1学期のみ観点別評価	1	0	1
他は自由記述			
観点別評価+意欲欄	0	1	1
通知表を発行せず	0	2	2
不明	0	1	1

(2) 観点別評価の評価基準

観点別評価の評価基準をまとめたものを表2に示す。

最も多いのは「3段階絶対評価」で、当該評価を行っている総数の62.7%に該当し

ていた。第2位は「絶対評価を加味した3段階相対評価」で14.9%を占め、第3位は「2段階絶対評価」で13.4%を占めていた。「3段階絶対評価」が全体の6割を占めていることから、指導要録の観点別評価欄の評価基準を踏襲していることが見いだせる。学力の個人差が、1年生の方が2年生よりも小さいことを考慮して、評価段階を学年で変えている学校が2校（内1校は、1年2学期末が分界点）あった。

(3) 観点別評価の観点の共通性

観点別評価を採用している通知表でも、その観点の内容は学校によってかなり異なっている。評価観点の共通の程度をまとめたものを表3に示す。

全体の55.2%を占める通知表で、学年を通して共通の観点が用いられていることが分かる。少なくとも学期毎で異なる観点を採用している通知表は、文部省協力校では全体の45.2%だが、実践校では25.0%にすぎず、改善の余地があるだろう。また、第1学年の1学期のみ独自の観点を設けている通知表が散見することも特徴である。

表2 観点別評価の評価基準

	文部省協力校 (N=31)	実践校 (N=36)	合計 (N=67)
3段階絶対評価	23	19	42
2段階絶対評価	4	5	9
絶対評価を加味した3段階相対評価	1	9	10
絶対評価を加味した2段階相対評価	0	1	1
3段階相対評価	0	2	2
1年：2段階絶対評価， 2年：3段階絶対評価	1	0	1
1年1～2学期：2段階絶対評価， 1年3学期以降：3段階絶対評価	1	0	1
個人内評価を考慮した到達度評価	1	0	1

表3 観点別評価の観点の共通性

	文部省協力校 (N=31)	実践校 (N=36)	合計 (N=67)
学年を通して共通	13	24	37
学期毎に異なる	9	6	15
単元毎に異なる	5	3	8
1年：学期毎に異なる	1	0	1
2年：学年を通して共通			
1年1学期のみ異なる，他は共通	3	3	6

(4) 観点別評価の観点の内容について

観点の内容を分類したものを表4に示す。第1学年の1学期のみ独自の観点を設けて評価を行っている通知表の場合，他の学期・学年の観点の内容を分析の対象とした。

指導要録の「生活科」の3つの観点（「生活への関心・意欲・態度」「活動や体験についての思考・表現」「身近な環境や自分についての気付き」）をそのまま使用している学校は少ないが，指導要録の観点を微修正したり，説明を付加して具体化させたものは，全体の35.8%に達している。具体的な到達目標を提示した，いわゆる「到達度評価型」のものは，全体の35.8%を占めているが，文部省協力校の方がこの観点を採用している傾向が強い(文部省協力校；51.6%，実践校；22.2%)。観点の数も各学期で6項目以上から成り立っている通知表もある。児童にとっても，保護者にとっても具体的な到達目標を提示し，評価を行う到達度評価型の通知表が望ましいことはいうまでもないだろう。

表4 観点別評価の観点の内容

	文部省協力校 (N=31)	実践校 (N=36)	合計 (N=67)
① 指導要録に準拠したもの	5	8	13
② 指導要録の観点を修正・ 具体化したもの	9	15	24
③ 具体的な到達目標を提示			
A. 2～3項目の観点からなる	2	3	5
B. 4～5項目の観点からなる	9	3	12
C. 6項目以上の観点からなる	5	2	7
④ その他(独自のもの※)	1	0	1
⑤ 不明(現物なしのため)	0	5	5

※；学ぶすがた，表す力，生活に生かす力

ところで，谷川（1994）は，「生活科」の画一化を促した外的要因の1つに，指導要録の評価の観点の提示を挙げている。指導要録の観点の提示によって，それまでかなりユニークな観点で行われていた評価が，ほぼ全国的に画一化されるようになった事実は否めない，と述べている。谷川らの調査によれば，全国の71%の学校が，3つの観点によって通知表が構成されていた。指導要録の改訂の文部省通知でも，「その様式や記載方法を学校と保護者との連絡に用いるいわゆる通信簿等にそのまま転用することは必ずしも適切ではないこと。（中略）通信簿等の記載内容や方法，様式等について工夫改善すること。」と述べられている。確かに，通知表が指導要録に準拠していれば，学年末の指導要録記載は容易になるかもしれない。しかし，「生活科」の趣旨から考えると，やはりその学校らしさの現れた，地域に根ざした教育活動を反映した評価項目を設定するのが望ましいと言えよう。なお，末尾の補足資料に到達度評価型の通知表の例を紹介しておく。

注：谷川彰英 1994 生活科授業への要求・要望・改善への提言 指導案の立て方
改善点はどこか 『生活科授業研究』 No. 35 (1994年3月号) 42-43.

(5) 児童による自己評価と保護者による評価

通知表の「生活科」の評価欄で、児童による自己評価欄と保護者による評価欄の有無を調べた。児童による自己評価欄のあるものは6校で、「生活科」以外の教科でも3段階評価で自己評価させている学校や、「振り返りカード」を用いたり、「行動の様子」「がんばったこと」の欄に自由記述させるなど多様な試みが行われている。児童の自己評価の積極的な活用を期待したい。

一方、保護者による評価欄があるのは、4校にすぎなかった。

[2] 指導要録の記載についての教師の意識の分析 — 『観点別学習状況』欄の評価を中心に —

指導要録の3つの観点の内、評価に際して難しさを感じる項目を選択させた（複数選択可）。さらに、どういう点で困難であるのか、その理由も記していただいた。集計結果を表5に示す。

表5 指導要録の観点の評価の難しさ（難しさを感じると回答した人数）

	文部省協力校	実践校	合計
① 生活への関心・意欲・態度	12	18	30
② 活動や体験についての思考・表現	8	6	14
③ 身近な環境や自分についての気付き	18	20	38

3つの観点の内、「身近な環境や自分についての気付き」の評価に難しさを感じるという回答が最も多く（全体の46.3%）、次いで「生活への関心・意欲・態度」が多く（全体の36.6%）、「活動や体験についての思考・表現」が最も少なかった（全体の17.1%）。最も多かった「気付き」は、現行指導要録の「生活科」で初めて登場し、また、他の教科の観点には含まれないものである（一部の実技教科を除き、「知識・理解」がこれと部分的に対応関係にある）。「気付き」という概念の曖昧さが、教師にとって評価の困難さを感じさせたのではないかと思われる。

2番目に多かった「関心・意欲・態度」は、その評価のあり方をめぐって混乱や当

惑が見られたり、様々な議論を引き起こしているのが調査当時の状況であり、この結果もそれを反映したものであると言えよう。『新しい学力観（新学力観）』では「関心・意欲・態度」が重視され、指導要録の『観点別学習状況』欄でもこの観点が最初に位置づけられている。しかしながら、「関心・意欲・態度」といった情意的領域の評価は、教育心理学や教科教育学分野においては、認知的領域や技能的領域の評価の研究に比べて、遅れているのが現状である。「生活科」の評価研究の中でも、「関心・意欲・態度」は早急に取り組むべき課題であると言えよう。

次に、観点毎に記載された評価の難しさの理由を検討していくことにする。記載された詳しい内容は、末尾の補足資料を参照されたい。

(1) 「関心・意欲・態度」について

概括すれば、下記の様になる。

- ・評価が主観的になりやすい。
- ・子どもの内面をつかむことが難しい。
- ・表現力の乏しい子どもをどう評価するのか。
- ・「関心・意欲・態度」が単元によって変容し、まとめた評価をすることが困難。

(2) 「活動や体験についての思考・表現」について

回答数は他の2つの観点と比べると少ないが、概括すれば、下記の様になる。

- ・「思考・表現」と「気付き」をはっきりと区別できない時がある。
- ・思考の程度を把握することが困難。

(3) 「身近な環境や自分についての気付き」について

概括すれば、下記の様になる。

- ・子どもの内面の気付きの読み取り、見取りが困難である（表現力の乏しさ・個人差）。
- ・評価方法が困難。
- ・どの程度気付けばよいか。
- ・気付いていても表現に表れない子どもの場合、評価が困難。
- ・自分についての気付き（よさや成長）が低学年児にとっては難しい。

〔3〕 「生活科」の評価全般について

(1) 「生活科」の評価方法について

全国連合小学校校長会（以下，“全連小”と略す）が実施した「生活科」の評価に関わる課題の調査（1992）で使用された項目を微修正して，対象校の「生活科」研究主任に回答していただいた。「生活科」の評価についての6つの考え方を提示し，考えに最も近い（あるいは最も重視すべき）ものと2番目に近いものを選択していただいた。

反応をまとめたものを表6に示す。最も重視されている考え方（第1位反応）は，「④より確かな評価を行うためには…児童を捉えていかなければならない。」で，被験者の2/3が選択していた。2番目に重視されている考え方（第2位反応）は，「①目立たない児童の観察は…どう見取るかが，課題である。」と「②生活科の自己評価は…追究すべきである。」であり（いずれも20.5%の選択），僅差で「⑤観察カードをつけるのは…はっきりさせておく必要がある。」と「⑥目の前の児童の活動を…児童を捉えようとする安易さがある。」が続く（いずれも19.3%の選択）。この結果から，「生活科」の評価では，多様な評価方法を求めていることが明確に伺える。また，目立たぬ児童のあり方や自己評価のあり方についても，関心を持ち，重視していることが分かる。全連小の結果とほぼ合致したものとなっている。

(2) 「生活科」の評価全般に関しての問題点や意見について

「生活科」の評価全般に関しての問題点や意見について，自由記述で回答していただいた。きわめて多様な意見や問題点の指摘がなされており，「生活科」研究の先進校らしい豊富な実践に基づく意見が多く見られた。記載された詳しい内容は，末尾の補足資料を参照されたい。

記載内容の一例を挙げておく。

- ・従来の教科とは異なった評価観を教師が持つことの必要性（子どもの変容の過程の評価，“よさ”の評価）
- ・教師の指導力量の問題
- ・指導改善と結びついた評価のあり方
- ・指導要録における3段階絶対評価（観点別評価）と日常での評価・通知表での評価方法の矛盾の指摘

表6 教師の「生活科」の評価観の調査結果

	第1位 反応数	第2位 反応数	延べ 反応数
① 目立たない児童の観察はつい見落としがちになる。目立たない児童の活動をどう見取るかが、課題である。	5 (6.0)	17 (20.5)	22 (13.3)
② 生活科の自己評価は欠かせないが、どのような手だてで自己評価させるのか、それをどのように児童自身にフィードバックさせたらよいかなどを追求すべきである。	9 (10.8)	17 (20.5)	26 (15.7)
③ 活動が豊かであっても出来上がった作品や表現が豊かでない場合がある。そのように活動力と表現力に違いがある児童をどのように評価したらよいのかが、課題である。	7 (8.4)	5 (6.0)	12 (7.2)
④ より確かな評価を行うためには、活動中の児童のつぶやきや表情、活動の持続時間など多方面からの観察が求められる。また、作品や造形物、話し方等の表現を通して、児童を捉えていかなければならない。	55 (66.3)	12 (14.5)	67 (40.4)
⑤ 観察カードをつけるのは大切であるが、そのために時間をとり、児童の活動が低調になって意味がない。いつ、どの場面で、何を記録するのか、はっきりさせておく必要がある。	4 (4.8)	16 (19.3)	20 (12.0)
⑥ 目の前の児童の活動を確かな目で捉える工夫が必要である。日誌やカードは使いやすさや手軽さから、それを見て、児童を捉えようとする安易さがある。	3 (3.6)	16 (19.3)	19 (11.4)

註：第1位の項目に2ヶ所○を付けた回答者が1名と第2位の項目に2ヶ所○を付けた回答者が1名いたため、延べ数は166になる。()内は%

〔研究2〕 「生活科」の教科書の分析

1. 目的

〔研究2〕では、①「生活科」の教科書の活用度と現行教科書の問題点を調べることと、②現行教科書の内容の分析を行うことを目的とする。

2. 方法

目的の①を分析するために、〔研究1〕で行った質問紙調査の中で、授業での教科書の活用の程度を尋ね、併せて教科書の問題点を自由記述させた。被験者は、〔研究1〕と同一の対象校の「生活科」研究主任である。

3. 結果と考察

〔1〕教科書の活用度

教科書の活用度を調べた結果を表7に示す。

表7 「生活科」の教科書の活用度

	文部省協力校 (N=36)	実践校 (N=46)	合計 (N=82)
① 全く使用しない	9+2※	11	20+2※
② 参考書として使う	17+2※	21	17+2※
③ ときどき使用する	6	11#	17
④ 教科書を中心に授業を行う	0	0	0
⑤ その他	2	3	5

※：2校は①と②の両方に回答

#：1校は『副読本 なかよし』をときどき使用と回答

「参考書として使う」の回答が最も多く(全体では47.6%)、特に、文部省協力校ではその傾向が強い。次いで「全く使用しない」が多く、25.6%を占めていた。「教科書を中心に授業を行う」は皆無であり、概して、教科書の活用度が低いことが見いだされる。「その他」の記載内容としては、資料や意欲づけに利用、落ち葉・採集物を

はさんで保存する程度の利用，学習の振り返りに利用，おもちゃ作りなどに参考する時のみ — となっている。本研究の対象校は，移行期から積極的に「生活科」に取り組んできた先進校であるので，地域に根ざした教材を開発し，教科書に依存しない授業を行っているので，この様な結果になったものと思われる。「生活科」研究の先進校以外の一般校のデータも入手し，比較・検討することが必要である。

[2] 教科書の問題点

現行教科書の問題点を例示する（詳細は補足資料参照のこと）。

- ・学校独自のカリキュラムなので使用しない。
- ・活動のアイデアブックとして使用。子どもの夢や活動をふくらませる内容にやや欠ける。
- ・教科書を使用すると地域性が薄れる。
- ・指示や指定が多すぎる。
- ・単元（配列も含めて）が教科書と合わない。
- ・子どもたちの発想を教科書の内容が規定してしまうおそれ。
- ・絵のデザイン・色使いがきつく，柔らかさがない。
- ・資料が少なく，バリエーションが限定。
- ・活動内容の系統性が不明確で，まだ，理科的・社会的。
- ・「生活科」に教科書はなじまない。
- ・単元構成が画一的。
- ・活動の事例が少ない。

概括すれば，「生活科」教科書不要論，地域・学校の実体に合わない，発想・考え方・活動の制約性などが問題点として指摘できよう。これらは，表7の結果を裏付けるものである。さらに，[1]のところで述べたように，一般校のデータも入手し，比較・検討することが必要である。

[3] 現行教科書の内容の分析

現行の「生活科」教科書（1995年度）は12社から発行されている。「生活科」の教科書は画一的であるとの見方も一部にあるが，子細に見ると幾つかのタイプに分けることができ，決して画一的とは言えない。サイズはB5版であり，写真やイラストを多用し，カラフルな構成である。書式も縦書きが6社，横書きが6社と二分されている。かつて低学年「理科」「社会」の教科書を発行していた会社が参入している（た

だし、1996年度から内容が改訂され、若干の会社の撤退や著作権の別会社への譲渡が生じている)。

では、内容の検討に入っていこう。どの教科書も学習指導要領に概ね即した教材を取り上げている。例えば、1年1学期では「学校探検」、同3学期では「もうすぐ2年生」を挙げることができる。植物の栽培では、アサガオ・ミニトマト・サツマイモ・ヒマワリなどが、動物の飼育では、ザリガニ・ウサギ・オタマジャクシなどが多くの教科書で取り上げられている。全国一律で地域差を配慮していないという点では、「画一的」と捉えることができよう。しかし、教材の提示の仕方や体験のあり方、指導法(指導書での解説)を検討すれば、かなり多彩であることが見いだされる。

ところで、三石(1992)は、「生活科」の教科書のタイプ分けを行い、内容の分析を行っている。筆者も概ね、三石の見解を支持できるので、ここで紹介を行っておこう。まず、第1のタイプは「みる、しらべる、つくる」型で、「自分との関わり」で自然観察や社会事象を対象とした調査・見学、遊びを通しての製作が中核となっているものである。該当するものは、中教出版、現代美術社、信濃教育会の3社(三石の論文ではイニシャル表示)である。第2のタイプは「しらべる」を基本とした調査基本型であり、第1のタイプの3つの活動の内、「しらべる」に重点が置かれたもので、啓林館、大阪書籍、学校図書、学習研究社、教育出版、大日本図書、日本書籍の7社が該当する。第3のタイプは、「イメージ重視」型で、光村図書が該当する。対象をイメージで表現することを優先させ、劇化などの表現と感性を重視したものであり、イラストも多用し、描き方も他社とはかなり違っている。第4のタイプは「網羅型」と言えるものであり、東京書籍が該当する。学習指導要領や『指導資料』などで扱っている内容・教材をまんべんなく取り上げている。内容は盛りだくさんであるが、細切れになりすぎている。

次に、「生活科」の教科書の事例研究に入ろう。現行の12社の内、最もユニークであると言われ、採択率の最も低かった現代美術社の教科書を最初に取り上げる。書名は1年用は「どうしてそうなの」、2年用は「ほんとうはどうなの」というタイトルであり、文章表現が多く、ストーリー性が強い(“たろう”と“はなこ”が主人公)。1年1学期に扱う部分でも、文章量が多いため、入学当初の子どもにとっては難しさを感じるものが、採択率を下げたのではないかと思われる。自然認識・空間認識が他の教科書よりも重視されており、細切れの疑似体験よりも系統性を持った活動や体験を重視していることが窺われる。

1年の「学校探検」の発展として、学校の裏の丘から見た学校周辺、そしてもっと高いところから見た光景を取り上げ、さらに不思議な眼鏡をかけて町を見ると、「人が作った物だけ」「動く生き物だけ」「動かない生き物だけ」見えた、という風に視点を変えた物の見方を例示している点はユニークであろう。2年では、生ゴミや残飯

を腐敗させて土を作り、その温度の変化を調べたり、できた土でハツカダイコンを栽培し、普通の畑の土で栽培したものと成長の度合いを比較させたりしている。単に栽培をさせるに留まらず、肥料・土づくりの視点も導入している点は、他社にはほとんど見られないものである。社会認識に関する記述がやや弱く感じられるが、総じて深まりを感じさせるものであり、副読本・図鑑などにも活用することが可能であろう。

2番目に取り上げるのは、信濃教育会の教科書である。長野県での採用に限定して作成されたものであり、他県での採択はほとんどない。特に教師用指導書は、信濃教育（信州教育）の伝統が良い意味でも悪い意味でも強く感じさせられる。教科書の方は、長野という地域に根ざした視点で作成され、地域の実態に即したものであると言えよう。例えば、れんげ遠足、おな洗いなどの地域の行事を取り上げたり、ザリガニの代わりに、サワガニを教材にしている点などである。

系統性も見られ、ストーリー性もある。1年では、ヒヨコの“ピッピ”との関わりを通して1年間を振り返っている。2年では、大豆の栽培を土おこしから始め、発芽・成長の観察・世話（草とり・土よせ）、結実、収穫と豆打ちまでの約半年間を、他の単元をはさみながら連続して取り上げている。さらに、枯れ葉をウサギの餌に利用することや大豆から加工されるものの例示もなされている。収穫祝い、そして転校生に大豆や手紙を送ることへ発展させ、郵便の単元（郵便局への問い合わせ、郵便システムの理解、手紙を書く）へスムーズに接続させている。信濃教育（信州教育）の先進校で実践されている総合学習の成果を活かしたものとなっているのが特徴である。

3番目の教科書は、中教出版のものである。三石（1992）のタイプ分けでは、第1のタイプの「みる、しらべる、つくる」型に該当し、教科書のタイトルも「しょうがくせいのせいかつか みる しらべる つくる」となっている。自然観察や社会事象を対象とした調査や見学を重視し、植物の観察や栽培だけに留まらず、植物を用いて遊んだり、製作を行うことも含まれており、様々な活動・体験を通して探究することに焦点がおかれている。児童の学習意欲を喚起させるために、文章表現も発問型（「どのようにかわったのでしょうか」「どうしたらいいのでしょうか」）が随所で見られる。また、「比較する」こと（花と種子の形、野菜、水中生物など）を重視している点も特徴である。2年用では、5回にわたってタンポポを取り上げ、四季折々の変化を通してタンポポの成長の変化を追っており、継続性・系統性のある展開を試みている。

4番目の教科書は、光村図書のものである。「児童の豊かな感性を刺激し、夢を膨らませる」（同書指導書）ことを編集の基本方針としており、視覚に訴える「イメージ重視」型である。紙面一杯の絵や写真、独特なタッチの描き方・色使いなどは他社のものとは大きく異なっている。前述の教科書の問題点についての調査結果で、「絵のデザイン・色使いがきつく、柔らかさがない」との回答は、光村図書を採択した学校

のものである。劇化を積極的に取り入れ、表現を重視している。例えば、1年用でヒマワリやアサガオの開花を身体動作で表現させたり、2年用では「生き物のげきをつくろう」という単元を設けている。文章表現は少なく、現代美術社とは対照的である。継続性・系統性のある栽培・飼育・観察や十分な事実認識がないと、劇化するにしても、身体表現をするにしても困難をきたすことは言うまでもない。擬人化の強調も、他社と比べて多く、低学年児童の思考の未分化を意識しすぎているきらいがある。総じて、社会認識に関する記述が少ないことも特徴である。この教科書の活用は、教師の指導力量に大きく依存するであろう。

以上、4社の教科書の分析を試みたが、前述の調査のように、教科書はそれ程活用されているわけではない。資料や学習の振り返りに利用したり、ものづくりの参考にする程度である。自然認識に関する記述が良いものもあれば、社会認識に関する記述が良いものもあり、教師が教科書を利用する際には、数社のものを使い分けたり、副読本として活用することが望まれる。

[文 献]

三石初雄 1992 生活科教科書は画一的？ 教育科学研究会・白井嘉一・三石初雄
(編) 生活科を創りかえる 国土社 Pp. 93-111.

〔研究3〕 「生活科」の本格的実施に伴う児童の変容と教師の「生活科」イメージについての研究

1. 目的

「生活科」が本格的実施になって、1995年度で4年目を迎えた。当初の混乱や戸惑いを乗り越え、学校現場では「生活科」は定着しつつある。しかし、その一方で、教材の精選化や指導・評価のあり方の見直しなどが行われるようになってきている。そこで、定着しつつあると言われる「生活科」のイメージを教師はどの様に捉えているのか、また、「生活科」を学んだ低学年児童は、「生活科」がなかった時の低学年児童と比べてどの様な違いがあるのかを調べることを目的とする。

2. 方法

(1) 被験者

岩手県（盛岡市，二戸市），宮城県（田尻町），東京都（中野区，足立区，昭島市），神奈川県（横浜市，川崎市，平塚市，大和市，厚木市，座間市，藤沢市，相模原市），愛知県（名古屋市），長崎県（長崎市）の1都5県の公立・国立小学校（約25校）1～3年の担当教師を被験者とした。

(2) 手続き

上記の被験者に対して、「生活科」に関する質問紙調査（1・2年生担当教師用と3年生担当教師用の2種類。〔研究4〕〔研究5〕の設問も含む）の回答を依頼した。岩手県内の一部は留置法で、それ以外は郵送法で実施した。実施時期は、1996年1月中旬から2月上旬であった。回答は無記名とした。

2月中旬までに回答が寄せられたのは、1・2年生担当教師が96名、3年生担当教師が56名であった。

3. 結果と考察

〔1〕 教師の「生活科」のイメージ

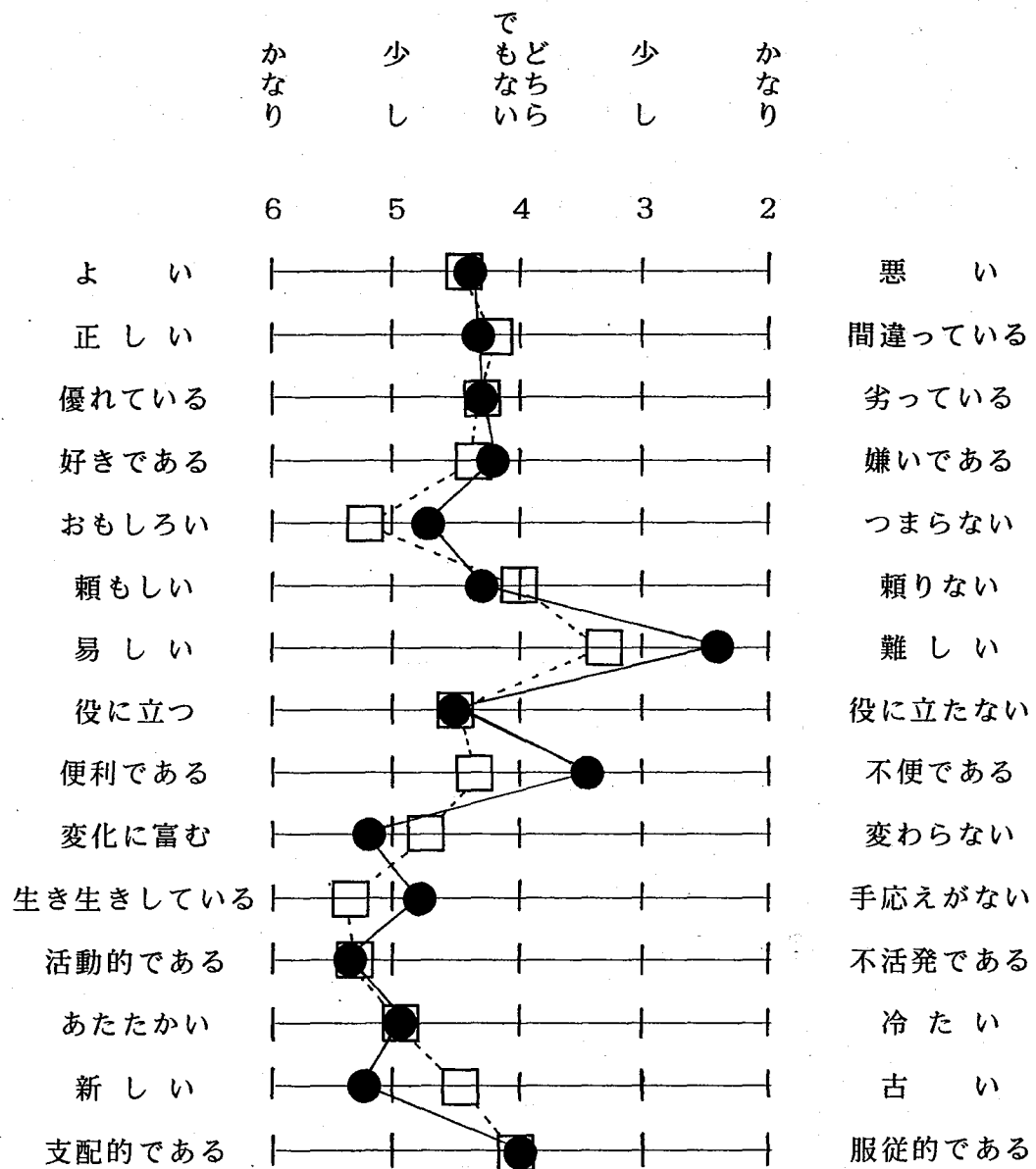
SD法を用いて、「生活科」のイメージを調べた。使用した形容詞対は、図1に示す15対で、井上（1979，1981，1982）の一連の研究で用いられたものをそのまま採用した。評定段階は7段階で、形容詞対の方向性はカウンターバランスした。

筆者は、「生活科」が本格的実施になる前の1991年2～3月に、岩手県内の小学校教師162名と小学校校長101名を対象に、同じ調査を行っている（藤岡，1994）。図1には、その調査の小学校教師（担当学年は全学年にわたる）の結果も併せて示した。

本調査の結果から、「生活科」のイメージは、“かなり生き生きしていて、活動的でおもしろいが、少し難しい”と捉えられていることが分かる。1991年の調査結果と比べると、今回の調査結果の方が、“おもしろい”と“生き生きしている”の評定値が増加し、“難しさ”と“新しさ”の程度が弱まっている。また、“やや不便である”から“やや便利である”に変化している。被験者が同一地域・同一学年ではないので、結果の解釈には慎重さが必要であるが、実施になって4年経過した時点で行った調査結果は、移行期のそれと比べると、プロフィールは平準化していることが見いだせる。3年担当教師の内、「生活科」の指導経験のない者は20名（1・2年担当教師を含む全被験者の13%）であったが、校内研究会などを通して「生活科」のイメージが明瞭になってきているからだと言えよう。「よい－わるい」「正しい－間違っている」「優れている－劣っている」といった価値的評価の形容詞対の評定値の分散は、他の形容詞対のそれと比べるとやや大きく、個人差が大きいこと、換言すれば、「生活科」についての価値的評価が分かれていることが窺える。

[文 献]

- 藤岡秀樹 1994 学力・能力・適性の評価と指導－学校心理学の視点から－ 第13章 評価論からみた「生活科」 京都法政出版 Pp.162-175.
- 井上正明 1979 教師の教育評価に対する意識構造(1)－SD法による年代差の分析－ 福岡教育大学紀要, 第4分冊 29, 105-121.
- 井上正明 1981 教師の教育評価に対する意識構造(2)－管理職教師群と一般教師群との比較－ 福岡教育大学紀要, 第4分冊 31, 133-148.
- 井上正明 1982 教師の教育評価に対する意識構造(3)－福岡県における中学校教師の世代差と専攻差－ 福岡教育大学紀要, 第4分冊 32, 133-151.



● — ● ; 1991年の岩手県内教師のデータ (162名)

□ ··· ··· □ ; 本調査の結果 (154名)

図1 教師の「生活科」のイメージ

[2] 「生活科」を学習した児童の特徴

(1) 1・2年生担当教師の捉えた「生活科」履修児童の特徴

まず、1・2年生担当教師を対象者として、小学校低学年に「生活科」がなかった時の低学年児童と比べて、現在の「生活科」を学習している児童はどのような違いがあるのかを10項目を取り上げて調べた（有効回答数89）。その結果を図2に示す。

未履修者と比べて、それ程差が見られなかったのは、「集中力」「判断力」「観察力」である。平均評定値が4に近く“少し優れている”と捉えられているのが、「表現力」「行動力」であり、「創造力」が次に続く。“やや劣る”と捉えられたのは、「落ち着き」だけであった。

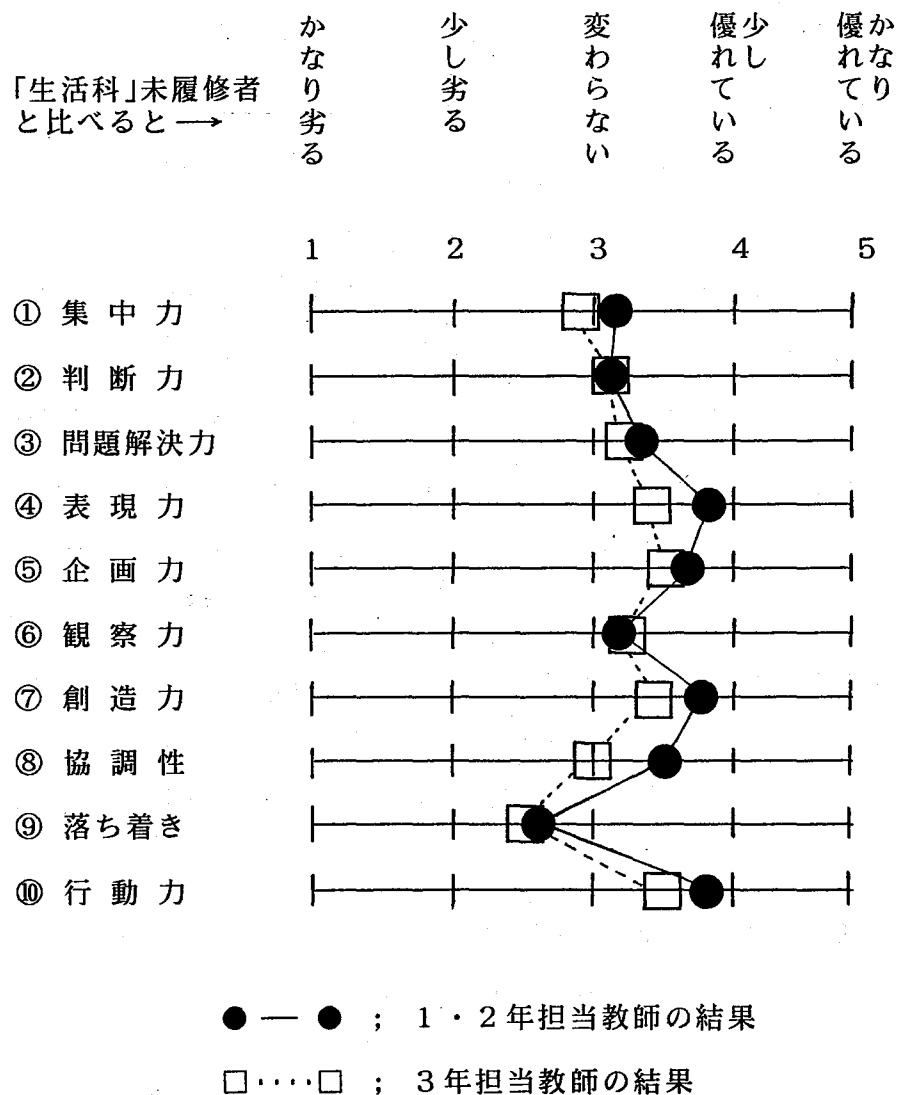


図2 「生活科」を学習した児童の特徴－未履修者との比較－

次に、その他の観点で、「生活科」を履修した児童が優れている点や良くなった点を自由記述で尋ねた。その結果を列挙してみよう。

- ・家庭生活で実践に生かされている。
- ・自分達で町を調べようと子どもが放課後、町探検に出かけたり、植物・動物の観察をしている。
- ・畑で栽培している大根の芽を踏まれてしまった時、自分達から全校朝会でやめて欲しいというお願いをしようと考え、文案も考え発表できた。
- ・家族調べで、おうちの仕事を生き生き調べたり、仕事をやってみたりした。
- ・チームワーク、試行錯誤のゆとり、楽しげ。
- ・意欲的で生き生きし、明るい。
- ・活動の立案計画に慣れてきて上手になってきた。
- ・グループ活動が活発になった。
- ・生活の中の気づきが向上してきた。
- ・自然の物に少しだけ目がいくようになったような気がする。
- ・自分の願いを実現しながら学習していいんだという安心感がある。

(2) 3年生担当教師の捉えた「生活科」履修児童の特徴

次に、3年生担当教師を対象者として、小学校低学年に「生活科」がなかった時の3年生と比べて、「生活科」を学習してきた現在の3年生はどのような違いがあるのかを10項目を取り上げて調べた(有効回答数56)。その結果は図2に示されている。

未履修者と比べて、それ程差が見られなかったのは、「集中力」「判断力」「問題解決力」「観察力」「協調性」である。“やや劣る”と捉えられたのは、「落ち着き」だけであった。“やや優れている”と捉えられているのは、「表現力」「行動力」であるが、1・2年生担当教師の結果と比べると、評定値は0.3～0.4程度減少しており、「生活科」履修のプラスの面が低減していることが見いだせる。

そこで、その他の観点で、「生活科」履修児童が優れている点や良くなった点と、劣っている点や悪くなった点を自由記述で記載を求めた。その結果を列挙しよう。

(A) 優れている点や良くなった点

- ・グループ学習が活発になっている。
- ・造形活動が好きでいつまでも楽しんでいる。
- ・児童同士が協力する姿が多くなる。

- ・日常生活の中からの応用力がついてきた。
- ・分からない児童はよく行動できる児童を見て世界を拓けることができている。
- ・グループ活動を好む。
- ・一斉学習というよりも個別学習的なので、個人の良い所を伸ばすことができる。
- ・はめ込んでいく学習ではないので、どの子も自分の力から考え始めることができる。
- ・自由に考えてどんどんやってみる。
- ・のびのび学習できる。
- ・課題に対して自ら解決しようとする気持ちがある。
- ・計画する力がついてきた。
- ・グループ作りが上手になってきた。
- ・クラスのレクリエーション大会の企画や運営などリーダー的に活動できる子が多い。
- ・意見を多く発表する。
- ・「実際に確かめてみよう。見に行こう。」「自分達で考えたい」という姿は多くみられる。
- ・物事に取り組む意欲（持続しないが）、活動の活発さはこれまで以上。
- ・いろいろな事に体を動かして意欲的に活動する姿が見られる。
- ・自立性が多少培われた。
- ・企画力に優れ、個人やグループの判断力を駆使して創造的に行う。

(B) 劣っている点や悪くなった点

- ・知識・理解面がやや劣る。
- ・理科において観察力が劣る。とにかく簡単に済ませようとする（絵）。
- ・自分の興味のある分野は進んで行すが、興味がない点がおろそかになっているように思う。 （2件）
- ・理科や社会の基本的な力が身につけていない。
- ・生活科から理科・社会への移行が難しく、知識を覚えるのに抵抗があるように思う。
- ・理科で観察などをする時も、例えば生き物の特徴に気づくより、自分の気持ちを書いてしまっただけで観察にならないこともあった。
- ・科学的なものの見方、論理的な思考、社会認識。 （3件）
- ・一斉授業についていこうとしない点。
- ・興味のないことには耳も傾けない。
- ・授業中出歩く。
- ・キリの使い方、ナイフの使い方など一斉に教えるのではないので、定着しない。
- ・科学認識力や社会科学的な基礎能力が落ちたように思われる（地図の見方－土地の高低、東西南北など）。 （2件）

- ・体験したことで確かめるのはいいが、不十分な実験・観察で、それを自分のものとして覚えてしまうことがある。
- ・地道に努力することを嫌がる。
- ・活動が拡散し、視点を持って広げたり、深めたりする力は劣っている。
- ・一斉授業における聞く態度が悪い。
- ・1つの事を根気よく観察していくことなどが続かない面が見られる。
- ・活動に乗ることができない子どもを十分支援しないと興味・関心は著しく低下して学習に参加できなくなっていく。
- ・一斉学習と個別学習との区別ができない。

1・2年でどのような内容の「生活科」を学習してきたかにより、その影響は異なるが、優れている点や良くなった点としては、行動力や表現力、グループ活動に関連する内容が多いように思われる。一方、劣っている点や悪くなった点としては、自然認識や社会認識の習得の不十分さ、一斉授業に関わる問題、興味・関心の限定などに関連する内容が多いように思われる。

〔研究4〕 「生活科」の指導と評価についての問題点と評価のあり方

1. 目的

「生活科」の授業づくりや指導，評価についての問題点や悩みを調べ，併せて「生活科」の評価の方法や研修体制，指導法についても調べることを目的とする。

2. 方法

(1) 被験者

〔研究3〕の被験者の内，1・2年生担当教師を対象とした。

(2) 手続き

前述の質問紙調査を用いた。調査時期・調査方法などは前述の記載参照のこと。

3. 結果と考察

〔1〕 「生活科」の指導と評価についての問題点や悩み

「生活科」の指導と評価に関する13の事項について，問題点を感じているものを指摘してもらい（幾つでも可），さらに特に問題点を感じている事項を2つまで指摘してもらった。また，問題点の具体的理由も自由記述してもらった。有効回答数は96名で，平均指摘数は4.87(SD=2.33)であった。その結果を表8に示す。

多くの教師が指摘した問題点としては，「⑩通知表・指導要録での評価」が最も多く，次いで「⑬教材研究・授業準備の時間不足」であり，第3位は「⑧個に応じた指導の仕方」であった。特に問題点を感じると指摘した数も上記の3項目が多かった。指導要録の3つの観点の評価の難しさは，〔研究1〕の「生活科」研究の先進校の調査結果でも見いだされていたが，学校現場では指導要録の記載で苦悩していることが本結果からも窺われる。「教材研究・授業準備の時間不足」も，「生活科」は体験・活動が重視されるので，学習環境の設定準備のために時間がかかり，教師の多忙化と相伴って，大きな悩みであると言えよう。反対に，指摘数が最も少なかったのは「④指導案の立て方」である。「生活科」が本格的実施になって4年経過したので，ある程度軌道に乗り，指導方法や内容を熟知できるようになったからではないだろうか。

表8 「生活科」の指導と評価についての問題点

事 項	指摘総数	特に問題点を感じると 指摘した数（内数）
① 地域・学校に根ざした教材開発	36	14
② 「生活科」に関する学校の予算	20	3
③ 学習環境づくり	38	6
④ 指導案の立て方	14	2
⑤ 教科書の活用	27	6
⑥ 表現活動のさせ方	21	4
⑦ 教材の精選	28	6
⑧ 個に応じた指導の仕方	47	18
⑨ 授業での子どもの観察・見取り	42	13
⑩ 通知表・指導要録での評価	68	36
⑪ 植物の栽培	33	11
⑫ 動物の飼育	44	11
⑬ 教材研究・授業準備の時間不足	58	20

次に、問題点の理由を列挙してみよう(紙幅の都合上、代表的なものを取り上げる)。

① 地域・学校に根ざした教材開発

- ・転勤があり、分からなくなる。
- ・地域の実状に合わせた教材ばかりだと不足する環境があるのではないか（町の子には自然が不足）
- ・年間計画を地域に合わせて作ることの難しさ。
- ・ねらいに即した教材が地域にない。
- ・きちんと教材化しないと新任の教員が困る。
- ・都市部なので畑が少なく、雑草がないので観察できない。
- ・どうしても一般的な流れになってしまう。
- ・あまりにも自然環境が周りに少なすぎる。
- ・マンネリ化しやすい。

② 「生活科」に関する学校の予算

- ・菜園・飼育小屋等の環境整備に充てる予算の不足。
- ・極めて少ない。
- ・児童個人に還る物品は基本的に保護者負担の原則をとっており、教材によっては負担を考えて断念することもある。

③ 学習環境づくり

- ・「生活科ルーム」がない。 (多数回答)
- ・オープンスペースが欲しい。
- ・作業スペース・活動場所がない。 (多数回答)
- ・施設・設備が整っていない。
- ・自然が少ないので、創意工夫して教材を見つけるのが難しい。

④ 指導案の立て方

- ・どの様に書けばよいのか。難しい。
- ・科学的社会的なもの見方も育てたいが、生活科的な考え方でどのように取り入れ、どのように指導してよいか分からない。
- ・一斉指導でない場合、子どもの立案計画による場合など時間の設定が難しい。
- ・子どもたちのやりたいことの中から方向(計画)を決めようとしたが、教科書の計画にとらわれることが多かった。
- ・児童の思いを充分に生かせる内容及びきっかけづくり。

⑤ 教科書の活用

- ・教科書そのものがあまり良いとは言えない。
- ・ほとんど使わない。 (多数回答)
- ・全く使わない。 (多数回答)
- ・教科書ははたして必要か？
- ・地域に合わないものもある。
- ・学校独自のカリキュラムに合わない。 (多数回答)
- ・子ども達に気付きを持たせるためにも副読本を活用したいが、学年の年間計画に合わず使わない部分が多い。また、考えさせたいと思うところで、教科書を見てしまい、思考する場面を失ってしまうことも多い。
- ・必ずしも全部実行しなければならないというのではないと思うが、内容が充実しており、プレッシャーに感じる時もある。

⑥ 表現活動のさせ方

- ・ 限度・方向性をどう定めるのが難しい。
- ・ 子ども一人一人のレベルに合わせるために、教えるというよりは支援という形になり、常に中途半端な形で終わってしまいがち。
- ・ 各自の自由な発想をどこまで実現させてやるか、どう発想を全員から引き出すか、どこまでまかせられるか。
- ・ 表現のパターンが限られてきている。それを打ち破りたいと思っているが、時数が不足してしまう。
- ・ 製作活動が多く、時間が足りない。

⑦ 教材の精選

- ・ 2年生ではとてもやる事が多く、二つの教材を組み合わせる等の工夫をした。
- ・ じっくりやりたいもの省いていいもの どう考えたらいいか…
- ・ 学年集団で取り組もうとするといろいろ支障あり。自由にやろうと思っても、親との関わりや同僚との関わりで難しい。
- ・ 直接体験を多くしたいと思うと時間がかかりすぎ、合科を常に考え、やりくりしている。
- ・ どれを取り入れるか判断に迷う。

⑧ 個に応じた指導の仕方

- ・ 同じ行動をしていても思いが違うので、支援の仕方が難しい。
- ・ 担任の視点が少ないため、どうしても同じ方向に向けさせようとしてしまった。
- ・ 40人の児童に対し、個に応じた指導は物理的に無理。せいぜいそのように心がけてやる程度である。
- ・ 子どもの自発性の導き方が難しい。
- ・ 感覚的な授業内容も多く、指導する者の特徴がそのまま反映する気がする。
- ・ T.T. (ティーム・ティーチング) のような形でやりたいが人員が足りない。
- ・ 個人差がとても激しく、家庭の協力が得にくい場合もある。
- ・ 一人一人の活動量の差が大きく、少ない子への助言と自主性の尊重との兼ね合いが難しい。
- ・ 集団の力も育てたいし、その中の個の力も育てたいが、そのバランスが難しい。
- ・ 活動によって個人の能力に差がある。特に能力の高い子たちにどのように指導し高めていけばよいか問題である。
- ・ 子どもにまかせた方がよいのか、教師の助言を加えた方がよいのか判断が難しい。

⑨ 授業での子どもの観察・見取り

- ・行動範囲が広がったり，グループで分けられたりするとどうしても観察できない子が出てくる。
- ・集団の中から，特に集中している，いないの判断は主観しかない。
- ・全員に目が行き届かないことがある。（多数回答）
- ・イベントなどをするとその会の運営だけで手一杯で，児童の観察までなかなか一人では目が届かない。
- ・なかなか見取りができない。子どもと接している時間が少ない。
- ・1クラスの人数が多すぎる。
- ・動きが多種多様なので観察が十分にできないことがあり，形成的評価が難しい。
- ・多くの子どもの気付きや変化を把握する仕方が難しいため。

⑩ 通知表・指導要録での評価

- ・表現，関心・態度など目に見えるものと子どもの内面的なものが一致しているかどうか迷ってしまう。表現には他の性格，技能面が多く影響を与えることがある。
- ・優劣のつくようなことをしていないのに評価は難しい。
- ・評価は不要（すぐわない）。（多数回答）
- ・場面によって意欲は大きく変わる。それを意欲的かどうか決めつけてよいか。
- ・子どもの様子を観察すればする程，気付きや思考・表現等の評価は難しいものに思われてくる。
- ・授業には評価はつきもの。しかし，通知表で親に知らせる必要があるのかという点では，職員の間で分かれる。
- ・到達目標が各児童によって違うということを前提にしてやっている教師が多く，評価が成立していない。
- ・個々の活動内容を評価するのは難しい。形として見える部分だけで評価していいのか。
- ・表現が活発な子は評価しやすいが，不活発な子は評価しにくい。
- ・様々な体験をさせることで児童に何が育つのか。その育ちは即効的なものではないゆえに評価は難しい。通知表などで評定する必要はないと思う。
- ・できる，できないの評価では，児童を十分に評価したことにはならない。
- ・思考・表現，気付きは切り離せない場合が多く，評価が難しい。
- ・通知表を文章表現にしているが，それでも何らかの基準に基づいているわけであり，その基準の設定が難しい。
- ・通知表を文章表現で評価しているが，書くのが大変。
- ・全く担任に任されている部分のような気がする。

- ・一人一人の活動状況を把握しにくい。
- ・どの子も一生懸命に取り組んでいるので、評価はしにくい。
- ・日常の観察や観察カードなどの表現方法によるが、主観的な評価になってしまうので不安。
- ・個に応じて得意、不得意があり、それを考慮しての評価は非常に難しい。
- ・評価規準等評価に関する研究不足。
- ・絵や文で表現してもらおうが、表現力が劣る児童を紙面で判断・評価しにくい。
- ・どこまで、どの位という観点がよく分からない。

⑩ 植物の栽培

- ・一人一鉢という指導だといいが、畑を利用する教材だと畑がないので困る。
- ・勉強不足で植物栽培の適期をのがしてしまう。
- ・麦づくり・大豆づくり・キャベツづくり等をしてきたが、畑のうねづくりなどの労力的負担が大きい。
- ・住宅地の中の学校として場所が少なく、畑もないので植物を育てる場所に苦労する。
- ・土作りや場所の確保。
- ・子どもの興味が長い栽培期間の間持続していかない。草むしり、水やりなどの管理が教職員の片手間では十分に行えない。
- ・年間計画を立て準備が必要なので、こちらがルールを敷いてしまうことになる。
- ・教師が経験不足で上手く育たないことが多い。
- ・一人一人の思いのものを育てさせることはできない。

⑪ 動物の飼育

- ・都会の学校では無理。
- ・長期休暇中の世話。 (多数回答)
- ・生き物を飼うということは、その授業が終わったら終わりということではない。
- ・学校全体の動物(魚も含む)飼育は、委員会活動で行っているが、学級単位では予算は全くつかず、担任の判断で飼育している。
- ・小動物の世話が大変で子ども達にやらせきれず、教室内では飼育できなかった。飼育する必要があるか疑問。
- ・児童がなかなか世話をしきれない(委員会に依頼)。
- ・年間計画を立て準備が必要なので、こちらがルールを敷いてしまうことになる。
- ・動物を放し飼いできる場所があり、常に触れられるような状態にしたいのだが…
- ・数が少なく、全員がふれあう機会が少ない。
- ・喘息等、子どもの健康面で心配がある。

- ・身近に接することができない。小屋があっても入れない。
- ・生あるものは試行錯誤ではいけないのでは。死んだ時の処置。

⑩ 教材研究・授業準備の時間不足

- ・校務が多すぎる上に、生活科の授業準備にはとても下調べが必要であるのに、できないままに子どもと一緒に手探りで組み立てていき授業時間不足になることが多い。
- ・行事・出張が多く、学校にいる間での教材研究の時間はほとんどない。
- ・準備に時間がかかる教材は敬遠されがち。
- ・下見、人材交渉、場の設定等、事前の準備が大変である。
- ・学校外に出かける活動が多く、危険箇所の確認や親への協力依頼など、準備の時間がかかる。また、作品例も多様に準備しなければいけない。
- ・単元導入時の準備が大変。
- ・校内研の研究教科に力を入れていると、授業の準備の時間がほとんどとれないのが現状で、生活科が犠牲になりがち。
- ・実際に地域を歩いたりする時間はない。

〔2〕 「生活科」の授業の評価の方法－指導要録の3つの観点の評価を取り上げる－
 指導要録の3つの観点で授業を評価する際、どのような指標を重視しているかを調べた。評定段階は4段階とし、非常に重視している場合は「4」、やや重視している場合は「3」、あまり重視していない場合は「2」、まったく重視していない場合は「1」とした。各指標の平均評定値を表9に示す。

表9から、「関心・意欲・態度」の評価では、“教師の観察”が最も重視され、次いで“子どもの発言”が続く。「気付き」の評価では、“子どもの発言”が最も重視され、次いで“作文”と“教師の観察”がほぼ同程度に重視されていた。「思考・表現」の評価では、“子どもの発言”が最も重視され、僅差で“教師の観察”“作文”“絵・造型作品”と続く。どの観点も“市販のペーパーテスト”はほとんど重視されておらず、用いていない学校も散見した。“市販のペーパーテスト”よりも若干評定値は高いが、“教師作成のペーパーテスト”もあまり重視されていないことが見いだせる。

表9 指導要録の3つの観点を評価するための指標の重視度（平均評定値）

	生活への関心 ・意欲・態度	身近な環境や自分 についての気付き	活動や体験につい ての思考・表現
① 子どもの発言	3.43	3.60	3.53
② 絵・造型作品	3.10	3.13	3.41
③ 作文	3.15	3.37	3.45
④ 子どもの自己評価	2.80	2.94	2.89
⑤ 教師の観察	3.54	3.35	3.47
⑥ 市販のペーパーテスト*	1.21	1.28	1.28
⑦ 教師作成のペーパーテスト	1.59	1.58	1.56

* “市販のペーパーテストは未使用”との回答は、⑥をN.A.として処理した(約10名程度)

“自己評価”は、①～⑤の内では評定値が少し低いですが、やや重視されていることも注目に値する。「生活科」は「算数」や「国語」と比べると、ペーパーテストの活用度が低く、多様な評価方法を用いて評価を試みていることが見いだされる。

上記の7つの指標以外に用いている評価方法も自由記述してもらったところ、「関心・意欲・態度」の評価では、“児童の相互評価”“認め合い”“教師作成ワークブック”“他教師の評価”“事前アンケート”“準備・片付けの様子”“写真の表情”“言葉かけ”“子どもの活動”などが、「気付き」の評価では、“周りの人(父母・教師)からの情報”などが、「思考・表現」の評価では、“相互評価”“作品の工夫”などが挙げられていた。

[3] 「生活科」の授業におけるチーム・ティーチングの導入についての調査

「生活科」の授業にチーム・ティーチング (Team Teaching: 以下T. T.と略す) を導入しているかどうかを尋ね、導入している場合は、その時間数ならびに指導形態を尋ねた。

有効回答数は96で、その内T. T.を導入しているとの回答は20名であった。回答総数に占める導入していると回答した人数の割合を求めると、20.8%であった。本調査に対して、同一校で複数名回答している場合がかなりあるので、この数値は導入率にはならない。しかし、「生活科」の授業にT. T.を導入している割合は2割程度と低く、まだ積極的には導入されてはいないと読み取ることができよう。

T. T.を導入していると回答した者に対して、T. T.の授業時間数について尋ねたところ(記載者数14)、最も時間数が多かった回答は「全時数の2/3」(1名)であり、「10時間」という回答が最も多く、7名であった。他の回答では、「15時間」の2名を除いて、「20時間」「6時間」「3時間」「数時間」が各1名であった。

T. T.の形態についての回答は極めて多様で、複数回答が見られたのは「同学年2学級合同(2C2T)」タイプが4名、「同学年3学級合同(3C3T)」タイプが3名、「同学年2学級合同(2C2T)・異学年2学級合同(2C2T)併用[配当時間数は前者の方が多い]」タイプが3名、「同学年2学級合同(2C2T)・同学年2学級合同教師加配(2C3T)併用」タイプが2名であった。何らかの形で教師加配タイプのT. T.を行っているとの回答は5名であり、教師加配タイプのT. T.は定着していないことが見いだせる。「生活科」以外の教科でも積極的にT. T.を導入しない限り、T. T.のための教師の定員増(それも1名のみ)はないこととも関係しているであろう。

そこで、「生活科」の授業にT. T.を導入することの長所と短所(問題点)を自由記述してもらった。回答者数は22名である。

(A) 長 所

- ・担任以外の教師の評価が参考になる。
- ・多人数の教師の目で評価していくことができる。(多数回答)
- ・違う視点で児童を見られる。(多数回答)
- ・グループ分けが多様になる。
- ・準備が早くなる。
- ・活動の幅が広がり、ダイナミックな活動を設定できる。
- ・役割分担をきちんとすることによって、大きな企画ができる(昔あそびの発表会、お祭りなど)。
- ・大根を栽培し豚汁パーティをしたが、学担2人に栄養職員を加えて行った。包丁を使う時、安全面で助かり1人のケガもなかった。

- ・個に応じた取り組みが多いため、児童の活動を見取るためには必要。
- ・一人一人の動きや発言に対応できる。
- ・安全面の把握ができてよい。
- ・他のクラスからもいろいろな面で刺激を受けて、活性化がはかれる。
- ・活動場所が2箇所以上になったり、校外学習になったりした時、二人以上教師がいると子どもを掌握しやすい。
- ・子どもの多様な思いや願いに対応できる。
- ・野外観察の時、安全面でよい。（複数回答）
- ・担任では気付かない児童の長所・様子etc. 分かる。
- ・教師がそれぞれ仕事を分担して子どもを指導できる。
- ・得意な面（教師の）の支援ができる。グループが多くできて子どもの意欲も強く、協調性もでる。

(B) 短所（問題点）

- ・教師のチームワークが大切。
- ・子どもの実態を知らずに観るために、なぜこの様な行動をしているのかという個の活動のつながりが見づらい。
- ・いろいろなクラスの子どもを同時にみるので、その子の特性にあった助言をするのが難しい。
- ・活動場所が限られる。
- ・他教師との時間がうまく合わない。
- ・統一した評価観を持つのが難しい。
- ・低学年児童の特性から、二人以上の教師がいて混乱するおそれがある。
- ・生活科の時間は時間割通りに出来ず、T.T.の協力が難しい。
- ・必要に応じてのT.T.方式のため児童の顔と名前が一致しない。
- ・T.T.を常に組めるとよいが、加配があるわけではないのでなかなか難しい。
- ・事前の打ち合わせ等の時間がとりにくい。
- ・教師間の意見・考え・思いを合わせることが相当難しい。
- ・人員不足。（多数回答）
- ・無理に時間を合わせることの不自然さ（十分準備できていない段階で実施等）。
- ・自分が担当する（接する）子しか学習の様子が分からないので、評価の時困ることがある。
- ・T.T.は必要ない。加配分は他教科にまわした方が子どものためになると思う。

[4] 「生活科」の校内研修体制について

「生活科」の研究部会（研修部会）はどのような形態をとっているのかを尋ねた。有効回答数は96であった。その結果を表10に示す。

表10 「生活科」の校内研修体制

研 修 形 態	回答数
① 低学年教師だけで研究部会を構成	53
② 理科部会と合同で構成	4
③ 社会科部会と合同で構成	5
④ 理科および社会科部会と合同で構成	2
⑤ その他	13
⑥ 「生活科」の研究部会はない	13
⑦ N. A.	6

「⑤その他」の回答の内訳は、「学年毎に設けている」が4、「生活科部会を設けている」が2、「全教職員で構成」が2、「校内研究のテーマとして全校で取り組んでいる」が2、「低学年担当教師＋3年担当教師で構成」が1、「低学年担当教師＋担任外教師」が1、「低学年担当教師＋生活科を研究している教師」が1であった。

同一校で複数名の回答者がいるので、回答数が回答校数と同一とはみなされない。結果を解釈する際には、この点を留意する必要がある。「生活科」の校内研修体制は、かなりの学校で、低学年担当教師だけで行われていることが表10から窺える。全ての学年担当の教師で、「生活科」の研究を推進している学校は極めて少数であることが分かる。「生活科」の授業を改善していくためにも、低学年担当教師だけでなく、理科や社会科の研究部会のメンバーを核として、全校体制で取り組む必要性があらう。

〔研究5〕 3年生担当教師からみた「生活科」「理科」「社会科」の指導のあり方と問題点

1. 目的

「生活科」を学んできた児童は、3年生になって初めて「理科」と「社会科」を学習するようになった。3年生担当教師を被験者とし、低学年に「生活科」が導入されるようになって、3年生の「理科」と「社会科」の指導にどのような問題が生じ、困っているのか、併せて低学年の「生活科」でどんなことを習得してもらいたいのか調べることを目的とする。さらに、総合学習・合科学習の実施の状況やポスト「生活科」としての新教科の中・高学年への導入についての賛否や意見も調べることも目的とする。

2. 方法

(1) 被験者

〔研究3〕の被験者の内、3年生担当教師を対象とした。

(2) 手続き

前述の質問紙調査を用いた。調査時期・調査方法などは前述の記載参照のこと。

3. 結果と考察

〔1〕 3年生の「理科」「社会科」の指導についての問題点

3年生担当教師を対象に、3年生の「理科」「社会科」の指導についての問題点について、各々5つの観点を取り上げ、評定法を用いて調べた。評定段階は4段階とし、非常に強く感じる場合は「4」、少し感じる場合は「3」、あまり感じない場合は「2」、全く感じない場合は「1」とした。平均評定値を表11に示す。

「②教える内容が難しすぎること」の平均評定値が、「理科」「社会科」共に2.50前後であるのに対して、他の4つの観点の平均評定値は3.00前後であり、3年生担当教師は当該の観点に関して、問題点を「少し感じている」ことが見いだされる。「理科」では、自然認識の基礎が身につけていないことや系統性の欠如が相対的に強く認識されており、「社会科」では観察や資料の読み取り能力が十分に身につけていないことが強く指摘され、次いで、社会認識の基礎が身につけていないことが続いている。

「生活科」は「理科」と「社会科」の単なる合科ではないものの、自然認識や社会認識の習得を欠如した授業であれば、3年生での「理科」や「社会科」の学習に支障をきたすと言えよう。

表11 3年生の「理科」「社会科」の指導における問題点

観 点	平均評定値	有効回答数
A. 「理 科」		
① 教える内容が多すぎる	2.82	N=55
② 教える内容が難しすぎる	2.47	N=55
③ 自然認識の基礎が身に ついていない	2.95	N=55
④ 観察・実験する力が十分に 身につけていない	2.89	N=53
⑤ 系統性に欠けている	2.94	N=55
B. 「社会科」		
① 教える内容が多すぎる	2.91	N=56
② 教える内容が難しすぎる	2.66	N=56
③ 社会認識の基礎が身に ついていない	2.91	N=56
④ 観察・資料を読み取る力が十分に 身につけていない	3.11	N=56
⑤ 系統性に欠けている	2.84	N=56

[2] 「生活科」の学習で習得して欲しい事柄について

3年生担当教師は、低学年の「生活科」の学習に何を期待しているのだろうか。「生活科」で習得して欲しい事柄について、自由記述で回答を求めた。回答者数は26名である。その結果を列挙してみよう。

- ・進んで行動できる力
- ・事象に対して疑問を持つとする態度
- ・観察力・表現力 (多数回答)
- ・問題解決力
- ・見通しを持った行動力
- ・経験を重視させたい

- ・いろいろな経験をする中で発見する力
- ・気付いたことに感動する心など情緒面の伸び
- ・生活する力
- ・科学的なものの見方・考え方 (2件)
- ・自然をありのままに見つめる目
- ・科学の楽しさ・面白さを味わう
- ・特別活動・理科・社会で3年生の学習につなげることのできる基本的な知識力
- ・友達や仲間を十分に意志を通じあえるようにする
- ・一人一人の存在感をしっかりとらせてやれるようにする
- ・友達の良いところを見て取れること
- ・自分で考える力, 特に系統的に物事を観察し, 実験する力
- ・相手の立場に立って考える力
- ・身の回りの様々な事への「なぜかな」「どうすればいいのかな」といった興味・関心を高め, 行動しながら解決していこう作り出そうという姿勢・気持ち・実行力
- ・協力しながら何かをやりとげたという喜び・充実感
- ・友達と一緒に学習する楽しさ
- ・自分の考え方以外の意見を取り入れる柔軟さ
- ・学習に主体的に係わる姿勢
- ・身近なところからの発見が学びのもとであること
- ・自分の気持ちや意見を人に伝えられるようにする
- ・学校生活の上で自分ことは自分でできるようにする (自立)
- ・自然と親しむ
- ・何を体験させ, 活動を通して学ばせていくかが大事。社会や理科を学習する上での土台となるもの。
- ・自然認識の基礎 (4件)
- ・社会認識の基礎 (3件)
- ・問題追求の基礎
- ・観察・実験等の基礎
- ・体の感覚がいろいろな意味で呼び起こされるような体験
- ・身近にある問題を捉えて, 社会的な内容 (学校生活・わが家の暮らし・生産労働等を具体的事象で考えていく), 理科的内容 (植物・動物を育てながら観察することにより事物を客観的につかませたい), 手仕事 (手指・体を使ってもの作り), 表現できることの習得
- ・自然にたくさん接したり, 作物を育てて人間の生活との関係を身につけさせる
- ・体験を通して今の家庭, 地域でやりきれないものを取り上げる

- ・人として生きる力（生命を保つこと、人生を楽しむことetc.）
- ・体験学習
- ・系統的な学問の基礎（今までの理科・社会の内容でよい）
- ・豊かな発想
- ・行動力・実行力
- ・決断力
- ・学ぶ意欲
- ・自分のめあてを持って取り組む態度
- ・配慮を要する子も含めた共生
- ・活動させっぱなしで終わることなく、そのことから自分で発見し、発見したことから有用感や効力感が得られるようにすべき。そのことが自立の基礎となる。
- ・一人で生きる力

上述の様に、従来の「理科」「社会科」に関係する自然認識・社会認識の基礎の習得を求める考えもあれば、活動や体験と係わった「生活科」固有の特性（例えば、自立）を求める考えもあり、回答は多岐にわたっていることが見いだされる。

〔3〕 「総合学習」「合科学習」の実施状況について

「総合学習」または「合科学習」の実施の有無並びに学年毎の週あたりの時間数を尋ねた。「総合学習」または「合科学習」を実施していると回答は3名（3校）のみで、一般的に公立小学校では「総合学習」または「合科学習」は取り組まれていないことが分かった。

では、3校の内容について紹介しよう。A校では各学年で「総合学習」と「合科学習」が取り組まれてはいるが、時間数は不定で、年間を通してできるところで、それぞれの学年が工夫して採り入れている。B校では4年生で「総合学習」が取り組まれており、名称は『地域活動を通して感性をみがき「発見する目」を持つ子—引地川を中心にすえて—』であった。年間で約20時間で1学期から3学期までにわたっている（学習の中心は2学期後半）。C校では『いちょうこども祭り』という名称で取り組まれているが、その年の活動によって時間数は流動的との回答であった。

「総合学習」や「合科学習」は、これからの豊かな学力を目指す授業としては、重要な位置を占めるであろう。本調査の結果では、「総合学習」や「合科学習」を導入している学校は極めて少数であったが、クロスカリキュラムの視点を積極的に活用していくことが望まれる。例えば、環境教育・国際理解教育・人権教育・性教育・消費

者教育といったものを挙げることができよう。

[4] ポスト「生活科」としての新教科の中・高学年への導入の賛否について

文部省の教育研究開発学校（学校教育法施行規則第26条の2の規定に基づく）で現在研究・実践が進められている新教科としては、『記号科』『人間科』『表現科』『生活体験科』『環境科』『国際科』『地球科』などの名称がある。これらの新教科の中には、「生活科」的なものを中・高学年にも導入しようとのねらいで研究されている学校もある。そこで本調査では、「生活科」的なもの（教科）を中学年以降にも設ける構想についての意見を尋ねた。賛否や意見などを列挙してみよう（一部割愛。文体は常体に統一し、できるだけ原文のまま紹介する）。

(A) 「導入に賛成もしくは必要」の立場の意見・理由 [回答数9]

- ・小学校では全ての教科学習において生活科的発想が基にあり、次第に系統学習に発展するように思う。多くの子が勉強体験の楽しさを実感してから、理科・社会科へとつながって欲しい。
- ・総合学習的に進める必要があると思うので、3年以降も設けるという構想に賛成。
- ・中・高学年にこそ必要な科目ではないかと思う。しかし、学力の低下をまねかないよう基礎・基本の定着が図られた上で行わなければならないと思う。
- ・賛成だが、現在の指導要領、高校・大学入試の現状を見ると、先生・子どもたち・親全てに戸惑いが起こると思う。基礎知識としてどこまでのものを考えるのか、個人差が出た時、どこまで教師が対応していくか、よく話し合う必要がある。
- ・児童に与えられた時間の中から児童達の自由に発想されるもの思考されたものをしっかりと認めてやれることが大切である。個々それぞれの能力差がある中で自己実現されていくことは、これから考えられてよいことだと思う。
- ・生活経験の乏しい今日、良いことだと思う。また子どもたちは具体的なもので考えられても抽象的な事柄になると急に苦手になるようなので、いろいろな経験の中でこういう力も伸びるのではないかと思う。ただ現在のように時間数不足の折、どのように時間を確保していくのか、何を削除していつこの時間を確保していくのかを知りたいところだ。
- ・現在の理科・社会科では知識として身につけさせるべきものがたくさんある。中学校での学習を考えた場合(受験を想定して)、小学校低学年、中学年、高学年、ひいては中学校、高校までの学習の系統性を考えるべきではなかろうか。その様な点にも配慮されるならば賛成だ。

- ・現在の社会・理科においても生活科的な考え方で学習内容を進められるものがあるため、できるだけ時間を計画的・有効的に使用し、内容を充実させるようにはしているが、はっきり「生活科」的なものという位置づけがあれば、そのねらいに沿った指導が行われると思うのでよい。
- ・現在の各教科の内容に取り入れる方向で考えてみてはどうかと思う。

(B) 「導入に反対もしくは不要」の立場の意見・理由 [回答数17]

- ・学力形成の系統性のない生活科を中学年以降にも設けるということは、全ての児童に学力保障を願う立場からは賛成できない。
- ・今の教科の枠内でも十分やっていけるので、これ以上生活科的にはなってほしくない。
- ・「生活科的なもの」は今まである教科の中で取り組んでいけると思う。
- ・「発展学習」の名の下に経験させればよいということで、教科書などにも入ってきているが、理科・社会の系統性をくずすものなのでおかしいと思う。
- ・生活科は時間がかかるので中学年以降にも設けることは反対。知識として身につけることがたくさんある。五日制で時間が少なくなっている現状では無理。
- ・現在の「生活科」の内容を引きずるのであれば反対。生活科学として生活の中から課題を見つけ考えさせていくような「科学」「社会学」の要素を盛り込んでいくなら、小学校の授業を時間的に減らすという意味では考えていくべき。
- ・学校五日制で時間が足りないので、今のような教科では難しいと思う。そこで、教科の枠をある程度はずすことは賛成であるが、生活科的なものになるのは反対。
- ・活動させるだけで社会認識や自然認識が育つはずはない。認識の中身を吟味していくことが大事。
- ・学習内容、学習環境の十分な整備が必要。それは文部省の責任だと思う。今の仕組みで教科内容をいじくっても実りは期待できない。
- ・今の理科・社会科とのからみのことが気になる。生活科的なことは学校のミニ行事や集会活動、たてわり活動の中で行っているので、生活科としては1・2年生だけでいいのではないか。
- ・他教科との関連はどうなっていくのか。疑問だ。
- ・とんでもないことだと思う。家庭でしつけるべきことが学校教育に持ち込まれているのではないか。最近強く感じる。以前の理科・社会という名目でも生活科的な学習の取扱いをしていたので、理科・社会に戻してもらいたい位である。
- ・社会科的知識・理科的知識に欠けるのではないか。知識偏重ではないが、高学年や中学校にどのように結びついていくのか。

- ・様々な体験の中で一部の子だけが気づくというのではなく、全員にどんな力をつけていくのかという点が学校教育の中では大切だと思う。生活科はその点が曖昧である。それを中学年まで広げていくことには反対。児童に系統的な知識が身につかないと思う。
- ・生活科の学習内容は家庭生活で体験すべきものとする。特に週五日制に向けた流れの中で、生活科を三年生以上でも続けるのはおかしいと思う。そういった場合、授業時間数と他教科の学力はどうなってしまうのか。疑問だ。

(C) その他の意見 [回答数11]

- ・生活科で支援といっても、基本は教えないと子どもたちにはできないので、中学年以降でやるといっても大変になると思う。
- ・研究としては面白い視点であると思う。
- ・五日制が進む中でどこをけずるのか。社会・理科の内容を減らすならばよいが、現状以上に時数を増やすことは無理ではないか。
- ・1・2年と同様、(中学年で-引用者註)理科・社会をなくし、充分の時間を与えて自分の興味・関心を満たしてあげたい。ただ、5年で今まで押さえるべき事というものを置くのであるならば、構想に対しては反対。
- ・生活科そのものが悪いとは思わないが、担当した先生の力量にかかると多い。受験勉強をスーっとくぐりぬけてきたような人が担当するとやせ細った生活科になってしまう気がする。
- ・結局、中学生の進路・受験の問題が変革されない限り、よけいに塾などへの移行が増長されると思う。生活科そのものは良いと思うのだが。
- ・新しい教育課程が今までの問題点をどの様に解決するために考え出されたものかをしっかり伝える必要があると思う。“授業時数を減らすために教科を統合した”と思われてしまうと、本来の目的を達成することができなくなってしまう。現場の先生方の賛同が得られて初めて新しい教育課程が子どもの力となると思う。
- ・3年位までは理科+生活科のような教科があってもよいと思う。4年ではどうだろうか……。

上述の意見から、「生活科」的な新教科の導入に「反対もしくは不要」の回答数は、「賛成もしくは必要」の回答数の約2倍を占めていた。しかしながら、一定の条件を基に賛成という意見もあり、賛否についての考え方は多様である。それは、現在実施されている低学年の「生活科」の学習内容に大きく依存している。賛成・必要派は主として体験重視の必要性から、反対・不要派は自然認識・社会認識の欠如・希薄化の

おそれと結び付けて論じられているように思われる。また、ポスト「生活科」としての新教科のイメージが湧いてこず、賛否の見解を保留せざるを得ない回答も散見した。文部省の指定を受けた教育研究開発学校の実践も、まだ緒についたばかりである。今後、どのような実践が産み出されるのか注視しながら、検討を続けていくことが必要であろう。

〔研究6〕 「生活科」の指導計画の紹介

1. 目的

筆者が学校公開に参加したり、定期的に授業を参観してきた小学校の「生活科」の年間指導計画を紹介し、内容を検討する。

2. 方法

各学校の「生活科」の年間指導計画や研究紀要、書物などを入手し、それをもとに分析する。

3. 各学校の「生活科」の年間指導計画

(A) 岩手県九戸村立伊保内小学校

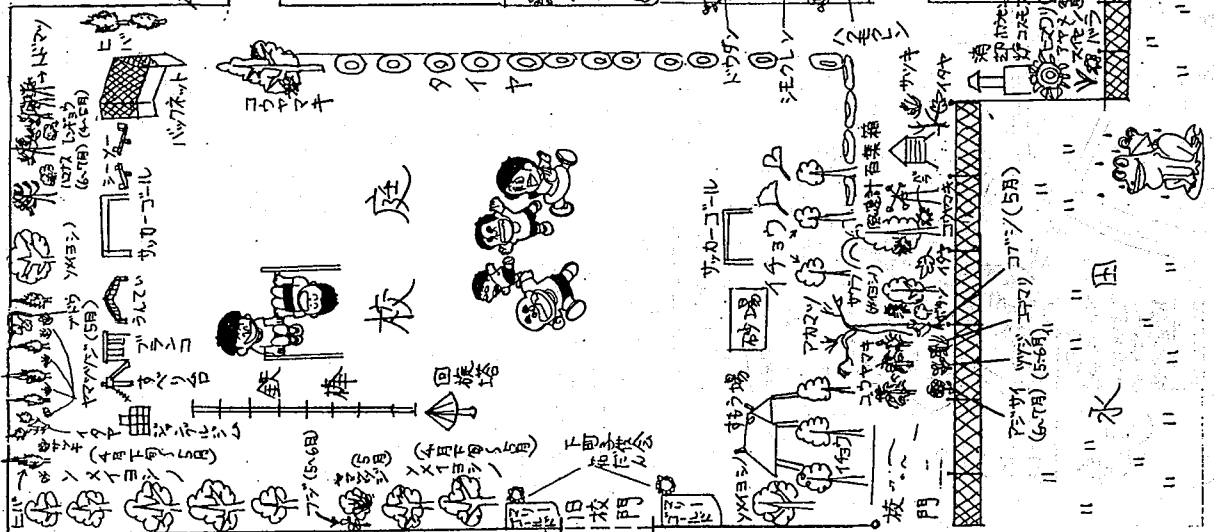
伊保内小学校は、岩手県北部に位置する九戸村の中心部の学校である。伊保内小学校は、東北本線二戸から約20km、バスで45分程度のところにあり、村内6校の小学校の内、最も規模が大きい。1995年5月現在の児童数は197名、学級数は7、教職員数は16である。伊保内地区には、村役場・病院・商店街などがあり、村のコアとなっている。他の学区では、農業従事者が多いのに対して、伊保内地区は、公務員・商業従事者など多岐にわたっている。

1993年度の「生活科暦」、「生活科マップ」をまず紹介しよう。農村地域であるので自然には恵まれており、伝統行事も多く、冬には体育の授業でスキーが行われている。「生活科マップ」を見れば分かるように、学校の近くには、村役場・郵便局などの公共施設や商店街がある一方、瀬月内川が流れており、カモが飛来したりする。

「地域探検」にとっても「自然観察」にとっても、かなり恵まれている条件にあると思われる。九戸村は鉄道が通っていないため、2年の「乗り物に乗ってみたいな」の単元では、バスを取り上げている（伊保内に岩手県北バスの営業所があり、村内各地や隣接市町へバスが出ている）。

年間授業計画（1992年度）は、ほぼ学習指導要領に添っており、その中で伊保内小学校らしい地域性を出すように工夫されている。1・2年担任と中・高学年担任から各1名・校長・教頭・教務主任からなる「生活科研究推進委員会」を設けて、全校体制で研究に取り組んでいることは特筆されよう。全教職員が足を使い、調査したものを「生活科マップ」に具体的に記すように努め、「生活科ビデオ」も作成している。「生活科暦」「生活科マップ」「生活科ビデオ」の充実は、新任教師にとっても役立っている。また、積極的に地域の人材を生かせるように、人材リストも作成している。これを用いて、1年「冬のたのしみ」（老人クラブとの交流）や2年「野菜を育てよう」（農家との交流）では、地域の方との結びつきを深めている。

生活科マップ 校内編



生活科ビデオマップ

1. 町のようす (南田へ下町へ上町)
 - ・馬場在所
 - ・勤労体育センター
 - ・B&Gカナル
 - ・給食センター
 - ・村役場 (保健センター・公民館)
 - ・消防署
 - ・弟手県北バス
 - ・商店街
 - ・伊保内営業所
 - ・郵便局
2. 瀬月内川 周辺 (カモ)
3. 熊野神社
 - ・春のようす
 - ・秋のようす
4. 特別養護老人ホーム「折爪荘」
5. 八幡神社
 - ・春のようす
 - ・秋のようす
6. 森林公園・運動公園
 - ・春のようす
 - ・秋のようす
7. 荒谷地区のようす (農業)
 - ・ハウス・セリ、シシバ・水無輪栽培
 - ・ハウス・ミニトマト栽培
 - ・お稲足文化館「桂蔵」
8. 丸アスキナー場
 - ・春のようす
 - ・秋のようす
9. 市日のようす
10. 丸ア祭りのおようす (40分)

校内で見つけた動物
 コオロギ、バッタ
 カエル、ミズ、アリ
 ケラ、カゲロウ

生活科マップ 校外編



氏名	住所	TEL
下村 穂子 (高倉)	高倉 穂子 (高倉)	3809
岩本 幸子 (高倉)	高倉 幸子 (高倉)	3845
栗谷川 裕子 (高倉)	高倉 裕子 (高倉)	3017
小野 裕子 (高倉)	高倉 裕子 (高倉)	2725
小野 裕子 (高倉)	高倉 裕子 (高倉)	2755
岩本 幸子 (高倉)	高倉 幸子 (高倉)	2765
栗谷川 裕子 (高倉)	高倉 裕子 (高倉)	2101
小野 裕子 (高倉)	高倉 裕子 (高倉)	2350
岩本 幸子 (高倉)	高倉 幸子 (高倉)	2358
栗谷川 裕子 (高倉)	高倉 裕子 (高倉)	2318

平成4年度 第1学年 生活科年間指導計画十面
九戸村立伊保内小学校

月	単元名	ねらい	小単元名・主な活動	活動の場
4	ぼくの学校	○学校の施設及び先生など、学校生活を支えている人や友達のことや友達がわがわり、楽しく遊びや生活ができる。	①ともだちいっぱい (4) ・友達の名前を覚える。 ・仲よく遊ぶ。 ②がっこうをたんけんしよう (7) ・学校探険の計画を立てる。 ・探険をする。 ・学校を作る。	・教室 ・校舎内
5	わたしの学校		③はるをさがそう (4) ・学級園に種をまく。 ・鉢植えの植物の種をまく。 ④いえから学校までのみち (4) ・通学路について話し合う。 ・通学路を歩く。 ・通学路で見つけたことをまとめる。	・校庭 ・学級園 ・通学路 ・教室
6	しぜんとなかよしになろう I	○動植物を飼育 栽培し、それらも自分たちと同じように生命を持つて いることに気づき、生きものに対して親しみを持ち、大切にすることができようにする。	①いきものとおともだち (9) ・虫や小さい生きものを探す。 ・教室で飼ってみる。 ・すきな生きものを粘土で作る。 ・チャボとあそぼう。 ②おおきくなあれ (6) ・育てている植物のようすを観察する。 ・成長のようすを絵や文でかく。	・校地 ・教室 ・学級園
7		○身のまわりの自然の変化に気づき、自然に対する親しみを持つて、みつけたことを表現することができよう。	③くまのじんじやへいこう (9) ・活動計画を立てる。 ・なつをみつげよう。 ・熊野神社でのあそびをくふうしよう。 ・みつけた草花であそぼう。	・熊野神社 ・プレイルーム
8		○動植物を飼育 栽培し、それらも自分たちと同じように生命を持つて いることに気づき、生きものに対して親しみを持ち、大切にすることができようにする。	④おおきくなつたね (3) ・あさがおの花を観察する。 ・花や笑の汁を調べる。 ・花を使っていろいろの作品を作る。 ⑤たねとりをししよう (5) ・種をとってプレゼントを作る。 ・ひまわりの種で作品を作る。 ⑥たのしいゆかくさい (6) ・野菜を収穫する。 ・とった野菜を使ってかんたんな調理をする。 ・収穫を祝う会をする。	・教室 ・プレイルーム ・学級園 ・家庭科室 ・教室
9		○近くの神社は みんなのものであることがわかり、大切に利用することができよう。	①あきのじんじやへいこう (4) ・神社で遊ぶ。 ・落ち葉や木の実を集める。 ②おちばやきのみでつくろう (6) ・落ち葉や木の葉で作る。 ・作ったもので遊ぶ。	・熊野神社 ・プレイルーム
10				
11				
12				
13				

平成4年度 第2学年 生活科年間指導計画
九戸村立伊保内小学校

月	単元名	ねらい	小単元名・主な活動	活動の場
4 (8)	探検隊出発だ (11)	○学区内の社会の様子について関心もち、それらを調べたり、まとめたりできる。 ○新たなものを発見したり、多くの人々と関わりをもったりする喜びを味わうことができる。	①伊保内の町を探検しよう(6) ・探検の計画を立てる。 ・探検に行く。 ・探検マップを作る。 ②町で買い物をする(6) ・買物の計画を立てる。 ・買い物をする。 ・気がついたことをまとめる。	・教室 ・商店街 ・教室 ・教室 ・商店街、市日 ・教室
5	自然となかよし I (2)	○季節によって自然や自分達の生活の様子が変わること、に気づくことができる。	①春をみつけよう(2) ・春探しをする。 ・見つけたことを記録する。	・校地、学区 (熊野神社等) ・教室
6 (12)	野菜を育てよう I (15)	○植物を上手に育てることができ、植物の成長の様子に気づくことができる。 ○植物を上手に育てることができ、	①野菜ランドを作ろう(8) ・野菜作りの計画を立てる。 ・畑作りをする。 ②野菜をうえよう(4) ・やさしいの苗を植える。 (ミニトマト、サツマイモ等) ③大きく育てよう(3) ・植えた野菜の世話の仕方を考える。 (以後、世話を継続する。)	・畑 ・畑

6 (12)	自然となかよし II (8)	○生き物を上手に育て成長の変化に気づき生命を大切にすることができる。	②生き物を探しにいこう(3) ・生き物探しの計画を立てる。 ・生き物を探しに行く。 ③生き物を育ててみよう(6) ・生き物の世話をする。 (メダカ、ザリガニ等)	・教室 ・校地 ・学区 (熊野神社等) ・プレイルーム
7	野菜を育てよう II (3)	○植物の成長の様子に気づくことができる。	④大きくなっただね(3) ・成長の様子を記録する。 ・畑の手入れをする。	・畑
(9)	自然となかよし III (2)	○季節によって自然や自分達の生活の様子が変わること、に気づくことができる。	④あつくなっただね(2) ・夏探しをする。 ・見つけたことを記録する。	・校地、学区 (熊野神社等) ・教室
8 (4)	乗り物に乗ってみたい (15)	○学区内の社会の様子などについて気づいたことを計画を立て、見学したり調べたりして、バスの営業所や駅の公共施設の働きや働いている人々の様子がわかる。	①乗り物ごっこをしよう(8) ・計画を立てる。 ・準備をする。 ・乗り物ごっこをする。 ②バス営業所に行ってみよう(7) ・見学の計画を立てる。(7) ・バスに乗って見学に行く。 ・気がついたことをまとめる。	・教室 ・体育館 ・教室 ・村内路線 ・営業所
9 (12)				

10	野菜を育てよう Ⅲ (6)	○収穫した野菜を食べ、収穫の喜びを味わうことができる。 ○季節によって自然や自分達の生活の様子が変わること、ことに気づくことができる。	⑤野菜の取り入れをしよう(2) ・取り入れをする。 ⑥サラダパーティーをしよう(4) ・作り方を考える。 ・調理する。 ・会食をする。	・畑 ・家庭科室
(12)	自然となかよし Ⅳ (3)	○子ども郵便局を開き、楽しく手紙のやりとりをして、手紙がまぢが、いなく届けられる工夫に気づくことができる。 ○相手や用件に合った手紙を書いて出すことができる。	⑤小さな秋みつけた(3) ・秋探しをする。 ・見つけたことを記録する。	・校地、学区(熊野神社等) ・教室
11	こちらがビッグ郵便局 (12)	○手紙を書く楽しさ、手紙の書き方を話し合う。 ・郵便のしくみを調べる。 ②郵便局を見学しよう(4) ・計画を立てる。 ・郵便局を見学する。 ・見たことをまとめる。 ③年賀状を書こう(3) ・友達に年賀状を書く。 ④電話をかけよう(2) ・電話のかけ方を話し合う。 ・電話ごっこをする。	①手紙を書く楽しさ、手紙の書き方を話し合う。 ・郵便のしくみを調べる。 ②郵便局を見学しよう(4) ・計画を立てる。 ・郵便局を見学する。 ・見たことをまとめる。 ③年賀状を書こう(3) ・友達に年賀状を書く。 ④電話をかけよう(2) ・電話のかけ方を話し合う。 ・電話ごっこをする。	・教室 ・教室 ・伊保内郵便局 ・教室 ・教室 ・教室 ・プレイルーム
(12)	わくわくもちやランド (13)	○身近にある材料を使っておもちゃを作ることができる。 ○おもちゃを使った遊びを工夫して、みんなが楽しめる。	①いろいろなおもちゃを作ろう(9) ・材料を集める。 ・設計する。 ・作る。 ・遊んでみる。 ②みんなで作ぼう(4) ・計画を立てる。 ・おもちゃ大会をする。	・教室 ・プレイルーム ・教室 ・プレイルーム
12				

1	(4)	○誕生から現在の成長の様子を振り返り、その成長を喜ぶことができる。 ○自分の成長を支えてくれた家族や周囲の人々に感謝の気持ちをもち、これからの生活への意欲をもつことができる。	①どのくらい大きくなったのかな ・自分の成長の様子を調べる。 ②わたしの絵本を作ろう(12) ・自分の成長の様子を絵本にし感謝の手紙を書く。 ③もうすぐ3年生(5) ・3年生に向けての希望を話し合う。 ・作文を書く。	・教室 ・教室 ・教室
わたしの絵本をつくろう (20)				
2	(11)			
3	(5)			

(B) 岩手県盛岡市立仙北小学校

仙北小学校は、岩手県中央部に位置する盛岡市の学校である。市内中心部から約2 km程離れたところにあり、市内40校の小学校の内、最も規模が大きい。1995年5月現在の児童数は1009名、学級数は28、教職員数は48である。学区内は住宅地域であり、保護者の職業も、会社員・公務員・商業従事者・農業従事者など多岐にわたっている。

仙北小学校は1965年度から、協力指導組織を取り入れ、学年協働経営を根底に据えながら教科担任制を中核とした指導実践を行ってきた。そして、1991年度からは教科担任制にチーム・ティーチング（以下T. T.と略す）を取り入れた指導を行ってきた。幾つかの成果が得られたが、教科担任制とT. T.を組み込んだ時間割と指導者の組織が難しく、日常実践化ができないなどの課題が生じ、現在ではT. T.を主にした指導体制に移行している(盛岡市立仙北小学校, 1995a)。岩手県内では、協力指導組織やT. T.研究の先進校に位置づく。

まず、低学年のT. T.について紹介しよう。1年・2年共に4学級で構成され、「1組と2組」で一つのペア、「3組と4組」で一つのペアを構成している。加配には、研究主任が各学級に週1時間程度の割合で入り、2学級合同加配型(2C3Tタイプ)の場合は、ペアに研究主任が入る。1年では「算数」「国語」「生活科」「体育」で重点的にT. T.を取り上げ、2年では「算数」「生活科」「体育」「図工」「音楽」で重点的にT. T.を取り上げている。1995年1学期に実施された「生活科」のT. T.の総時数(1・2年併せて)は、2C3Tタイプが3回、2C2Tタイプが39回であった。

では、1995年度の1年生の年間授業計画を紹介しよう。T. T.を導入している単元は、「学校探検をしよう(9H)」「あそびにいこうよ(9H:3つの中単元で構成)」「生き物の絵本を作ろう(3H)」「おちばや木のみで作ろう(6H)」「おもちゃであそぼう(12H:2つの中単元で構成)」「かぞくっていいな(9H:2つの中単元で構成)」「お正月あそびをしよう(3H)」「私の記録を作ろう(3H)」「1年生をむかえるしたくをしよう(2H)」である。教室から外へ出て活動する単元や遊び、制作に係わる単元で、T. T.が導入されていると言えよう。単元のT. T.計画書を2例挙げておく。なお、仙北小学校では指導形態を4つのタイプに分けている。Aタイプとは「自ら学ぶ意欲」「主体的に対応する力」の育成をねらった学習システムであり、興味・関心、生活経験、学習適性等の個の特性に対応し、個別・コース別学習のよさを生かしたシステムであり、Dタイプは担任による普通の指導を指している。他にBタイプ(「基礎的・基本的知識・理解、技能」「主体的に対応する力」の育成をねらい、学習時間、適性、達成度等の個の特性に対応した学習システム)やCタイプ(「基礎的・基本的知識・理解、技能」の習得をねらったもので、担任による普通の一斉指導の中に加配教師が入った学習システム)がある。

生活科 年間指導計画 第1学年

期	月	単 元	時数	指 導 内 容	備考
1	4	ともだちいっぱいほしいな 1 ともだちとあそぼう (自己紹介しよう)	(18) 3	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と自己紹介しあう。名刺を各自、自由に作り、名刺交換をする。 ・2年生に学校を案内してもらい、探検の動機付けとする。 	
		(6) 2 学校探検をしよう	9		
	5	T.T.を示す→ 	(9) 3	<ul style="list-style-type: none"> ・探検隊をつくり、学校の中の不思議や新しい発見を探し、発表し合う。多くの先生方や、上級生などとふれあい、名前を聞いたり、握手したりする。 ・2年生からアサガオやヒマワリの種をもらい、その種を観察したり、植えたりする。 	
		3 きれいな花をさかせよう			
	6	4 学校の回りをあるこう	3	<ul style="list-style-type: none"> ・通学路を歩き、安全施設について調べたり、安全な等下校の仕方をする。 ・公園や河川敷の施設を上手に使い、仲良く遊んだり、春、夏の植物や動物を見たり、調べたりしながら、公共物を大切に、自然に親しむ。 	
		あそびにいこうよ 1 公園や川岸であそぼう 2 遊びを工夫しよう (12) 3 草花や虫であそぼう	(9) 3 3 3		
	7	おおきくなったね 1 おはなのせわをしよう (9) 2 どうぶつさんとなかよくなるう	(21) 3 6	<ul style="list-style-type: none"> ・アサガオの支柱をたてたり、蕾の様子などを観察する。 ・校内にいる動物や見つけてきた小さな動物と遊んだり、餌を与えたりする。 ・アサガオやその他の葉や花、果汁などで汁遊びをする。 	
		3 しるあそびをしよう	3		
	8	(6) 4 たねとりをしよう	6	<ul style="list-style-type: none"> ・アサガオやその他の花の種とりをし、それをプレゼントする先を決めたり、来年の1年生へのプレゼントにする。 ・今まで育てたアサガオや小動物についての生き物絵本を作る。 	
		9 5 生き物の絵本を作ろう 	3		
	9	はっぱのいろがかわたね 1 おちばであそぼう (12) 2 おちばや木のみでつくろう 	(12) 3 6	<ul style="list-style-type: none"> ・落ち葉を集めたり、落ち葉を使って遊ぶ。 ・落ち葉や木の実を使って、コマや、やじろべえ、飾りなど様々工夫して作ったり遊んだりする。 ・木の葉や木の実以外の観点での秋みつけをする。 	
		3 おきをみつけよう	3		
10	おもちゃであそぼう (12) 1 おもちゃを作ってみよう 	(12) 6	<ul style="list-style-type: none"> ・昔からある遊びや知っている遊びもので、遊んでみて、自分でも作れそうなおもちゃを作ってみよう。 ・2年生の子供祭りに出店を開くこととし、おもちゃを作ったり、売ったりする。 		
	2 おまつりにさんかしよう 	6			
11	かぞくっていいな (12) 1 家族を紹介しよう 	(9) 6	<ul style="list-style-type: none"> ・家族や家での出来ごとを絵や文で表す。 ・家族の仕事や役割を調べ、自分の家族を紹介する発表会をする。 ・家で自分のできる仕事を決めて実行し、その時の体験発表会をする。 		
	2 じぶんでできることをしよう 	3			
12	冬をたのしくすごそう (9) 1 年賀状をつくらう	(12) 3	<ul style="list-style-type: none"> ・お正月の様子を思い出し、お正月にしてみたいことなどを話し合い、年賀状を作ってみよう。 ・季節の変化による生活の変化から冬見付けをする 		
	2 冬のくらしをみつけよう	3			
1	(3) 3 お正月遊びをしよう 	3	<ul style="list-style-type: none"> ・古くからあるお正月の遊びをして遊んだり、福笑いやすごろくなどをつくって遊ぶ。 ・北上川に飛来する白鳥に餌づけをしたり、様子を観察して自然に親しむとともに、大切にすることを育てる。 		
	2 4 白鳥さんこんにちは	3			
3	もうすぐ2ねんせいだね 1 どんなことがあったかな	(12) 4	<ul style="list-style-type: none"> ・入学してから1年間を振り返り、どんなことがあったか、1年間に自分自身がどのように変化したか(体の大きさ、できるようになったこと)を話し合う。 ・1の学習をもとに、自分の1年の記録を、できるようになったことを中心に絵本やカレンダー、アルバムなどにまとめる。 		
	(9) 2 私の記録を作ろう 	3			
3	3 お楽しみ会をしよう	3	<ul style="list-style-type: none"> ・1年間を振り返る子とをテーマとし、お楽しみ会をする。 ・新一年生のために、教室を清掃したり、飾りつけをしたりする。 		
	(6) 4 1年生をむかえるしたくをしよう 	2			
合 計			102		

1年生	7月	夏と遊ぼう	くさばなであそぼう	開発年度 H, 7
-----	----	-------	-----------	-----------

次	順分	学習内容 「学びとる力」	TT	指導の要点 コース・教師・個の対応	学習環境 (場, 学習材)	反省 (改善点)
1	1 (45分)	<ul style="list-style-type: none"> ・季節の植物に目を向けて、それを使った遊びを考えて話し合う。 (1) 意欲 アイキク 	D	<ul style="list-style-type: none"> ・季節の変化を感じとらせ、夏のイメージを持たせる。 ・自分の身の回りには、どんな季節の草花があるか考えさせ、それを使って作ってみたいもの、遊んでみたいことを考えさせる。 ・子供達のアンケートや父母からのアンケートをもとに、これからの活動への動機付けを図る。 	教室 ●父母アンケート ●こんなことしたいなカード	<ul style="list-style-type: none"> ・草花遊びに興味を持たせることに重点をおいたため季節の変化については十分に感じとらせられなかった。 ・父母のアンケートは、意欲化に役立った。
2	3 (45分)	<ul style="list-style-type: none"> ・近くの野原に行き、身の回りの植物に関心を持ち、草花や木の葉を集めたり、遊んだりする。 (1) 意欲 アイウコ (2) 仕方 オキ 学習態度 アイエケコ (3) 基礎基本 	A 2C2T	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思いや願いを大切にさせ、草花へ目を向けさせる。また、新たな発見、気付きも認め、多様な活動ができるよう支援する。 ・自然愛護の関わりから、活動に必要な分だけ草花を取ることを考えさせたい。 ・学習を進める際、子供の体質に配慮する。 ・友達との関わりから、遊ぶ内容を広げられるように、支援する。 	野原, 河原 ◎ビニル袋 ◎救急箱 ●ふりかえりカード	<ul style="list-style-type: none"> ・除草の時期と重なったため、草花が十分に集められず、活動の幅が狭まってしまった。 ・子供たちは、草花遊びに没頭してしまい、次時の活動に使う草花の収集が、できなかった。教師の声がけがもっと必要であった。
3	4・5 (90分) 本時	<ul style="list-style-type: none"> ・草花や木の葉を使って、楽しく遊んだり、作ったりする。 ・自分の遊びや作品に工夫を加えたり、友達との活動に興味を持ったりする。 ・作品を紹介したり、遊んだ様子を話したりして、活動をふりかえる。 (1) 意欲 アイウエカキクコ (2) 仕方 エオカキクコ 学習態度 アイエオケコサシ (3) 基礎基本 	A 2C2T	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しい雰囲気の中で、子供達が活動できるように支援する。 ・T₁はつくってみようコーナー、T₂はあそんでみようコーナーを中心に支援する。 ・なかなか活動に取り組めない子、友達と関われない子に声かけをしたり、一緒に遊んだりして、活動の意欲を促す。 ・自分の思いや願いを大切にさせ、草花へ目を向けさせる。また、新たな発見、気付きも認め、多様な活動ができるよう支援する。 ・自分の遊びや、作品に工夫した子供達の活動に興味を持って活動した子を賞賛し、意欲付けを図ったり、活動を広げたりできるようにする。 ・最後まできちんと後始末ができるように、支援する。 ・今日の学習での自分の活動や友達のよさをふりかえさせる。 	若草ホール ◎草花や木の葉 ◎画用紙 ◎ホチキス ◎ひも ◎輪ゴム ◎作品サンプル ◎セロテープ ◎色鉛筆 ◎クレヨン ◎はさみ ◎のり ●ヒントカード ◎ふりかえりカード	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒントコーナーを十分に活用できなかった。教師の声がけが必要であった。 ・教師がもっと子供たちの中に入り一緒に作品を作ったり、遊んだりする中で支援するべきであった。 ・せんぱくはらっぱなどの学習環境を整えたことによって、子供たちの活動に広がりが見られ、意欲化が図られた。 ・後片付けや、話し方聞き方など、TTの学習を成立させて行く上で、日常的に指導が必要である。
4	6 (45分)	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの活動を振り返り、絵や文に表す (1) 意欲 カケクコ (2) 仕方 ケコシ 学習態度 エサシ 	D	<ul style="list-style-type: none"> ・草花で遊んだり作ったりの活動を通して楽しかったことを、絵や文に表し、次への活動の動機づけとなるようにする。 ・なかなか作業に入れない子にたいして、前時の活動を想起させるなどの支援を行い、その子なりの表現ができるようにする。 	教室 ◎筆記用具 ◎画用紙 ◎色鉛筆 ◎クレヨン ◎あのねカード	<ul style="list-style-type: none"> ・前時を思い出しながら、一人一人絵日記にまとめることができた。 ・まとめをもっと子供の自由な発想で多様にするにより、いっそうの意欲化が図れるように思う。

1年生 11月	単元名 おもちゃであそぼうよ	開発年度 H7
---------	----------------	---------

次	時 (分)	学習内容 「学びとる力」	対 応	指導の要点 コース・教師・個への対応	学習環境 (場・器)	反省 (改善点)
一	1 (45)	<p>・昔から親しまれている伝承玩具に目を向けさせ、昔の遊びにはどんなものがあるか話し合う。</p> <p>(1) 歌 アイエキコ (2) 習の仕方 オコシ 習の躰 サシ</p>	D 一斉	<p>○昔から伝わる遊びにはどんなものがあるか話し合う</p> <p>○自分でも遊んだことのある遊びや玩具について話し合う。</p> <p>○昔のおもちゃを集めたりどんな遊びがあったのか、身近な人々などから、聞き出すように促し、その場合の作法なども指導する。</p>	<p>教室</p> <p>◎昔の玩具 ◎お手玉 ◎こま ◎けんだま等</p>	
	2 (45)	<p>・昔の遊び道具と今の遊び道具の違いに気付く。</p> <p>(1) 歌 アイエキコ (2) 習の仕方 オコシ 習の躰 サシ (3) 習の躰</p>	D 一斉	<p>○今の遊びや遊び道具と昔のおもちゃの違いを話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・素材・仕組み、動力 ・遊ぶためにはどんな技能が必要か ・こわれたときの、対応 <p>○老人大学の皆さんに、遊び方を教えてもらえるように、お願いのお手紙を書く</p>	<p>教室</p> <p>◎昔の玩具 ◎お手玉 ◎こま ◎けんだま等</p> <p>◎便箋</p>	
	3 (45)	<p>・昔の遊びに関心を持ち、昔のおもちゃで遊ぶ。</p> <p>(1) 歌 アイエキコ (2) 習の仕方 オコシ 習の躰 アイエキコ サシ</p>	A 2C2T	<p>○老人大学の皆さんに、遊び方を教えてもらう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな遊びに挑戦する。 ・遊びのこつを覚える。 ・工夫して、楽しく遊ぶ ・お年寄りや、友達と仲良く遊ぶ。 	<p>若草ホール</p> <p>◎昔の玩具 ◎お手玉 ◎こま ◎けんだま等</p> <p>●ふりかえりカード</p>	
二	4 5 (90)	<p>・昔のおもちゃをヒントに身の回りにある素材を使って、自分のおもちゃを作る</p> <p>(1) 歌 アイエキコ (2) 習の仕方 オコシ 習の躰 アイエキコ サシ (3) 習の躰</p>	A 2C2T	<p>○昔のおもちゃの仕組みや教師の試作品などを参考に、自分の集めた材料から、どんなおもちゃを作るか考える。</p> <p>○作ろうとするおもちゃ毎にグループを作り、協力しながら、おもちゃ作りをする。</p> <p>○作っては遊び、改良工夫を繰り返すようにする。</p>	<p>若草ホール</p> <p>◎昔の玩具 ●教師の試作品 ●子供の集めてきた材料</p> <p>◎テープ ◎のり ◎割り箸 ◎わごむ等</p>	
	6 7 (90)	<p>・作ったおもちゃでルールなどを工夫して、友達と協力して遊ぶ。</p> <p>(1) 歌 アイエキコ (2) 習の仕方 オコシ 習の躰 アイエキコ サシ</p>	A 2C2T	<p>○同じ種類のおもちゃでグループを作り、ルールを作ったり遊び方の工夫をする</p> <p>○遊ぶ中でおもちゃの改良をしたり、友達のおもちゃの良さにも気付く。</p>	<p>若草ホール</p> <p>◎子供の作ったおもちゃ</p> <p>◎改良用の道具、材料等</p>	

(C) 神奈川県横浜市立星川小学校

星川小学校は、横浜市保土ヶ谷区を中心部の住宅街にある児童数約700名の中規模校である（児童数増加のため、これまで2つの分校が独立）。校区には大規模な団地やマンションが多く、保土ヶ谷区役所や保土ヶ谷公園・スポーツ施設（野球場や体育館）もあり、相模鉄道や横浜新道が学校の側を通っている。校庭がやや狭く、プールも屋上に設けられているといった、典型的な大都市型の小学校と言えよう。

自然環境が乏しい都市型の学校であるが故に、植物の栽培や動物の飼育などでは、いろいろな悩みがあるように思われる。保土ヶ谷公園で虫の採集や季節の変化を感じとらせたりしている。鉄道が近くを通っているので、「駅へ行って電車に乗ろう」という単元を設けている。駅や電車の乗り方についての学級での話し合いを踏まえ、実際に駅へ出向いて駅員に話を聞き、各自が切符を購入して1駅間乗車し、商店街を探索して学校に戻るといった授業展開である。首都圏の大都市の住宅街にある学校のため、三世代同居の家庭は少なく、「生活科」の授業での祖父・祖母やお年寄りの協力は得られにくい状況にある。星川小学校の年間指導計画（1992年度）も、概ね学習指導要領に添っている。

学期	月	単元名	ねらい
一 学 期 (35)	4	たのしいがっこう (15) ・名刺交換をしよう ・みんなで遊ぼう ・学校探検をしよう	○自己紹介や遊具遊び、学校探検などの活動を通して、新しい友だち・先生・学校で働く人・校舎などについて知り、学校生活に慣れて、楽しい生活ができる。
	5	きれいなはなをさかせよう (13) ・観察をしよう ・はくや紙の花も植えよう	○身近な草花に興味を持ち、自分の花を決め、継続して育てることを通して、それらも自分たちと同じ生命を持っていることに気付き、大切にすることができる。
	6	こうえんへいこう (10) ・公園に行く計画をたてよう ・公園で遊ぼう ・公園発表会を開こう	○公園で遊んだり、樹木や草花・虫などに親しんだりしながら、公共物を上手に使う楽しく遊ぶことができると同時に、公園の行き帰りの道で安全な歩き方ができる。
	7	公園さんごんにち ・観察をしよう	
二 学 期 (40)	9	がっこうのまわり (10) ・公園までの道 ・広場園を作る ・観察をしよう	○私たちの近くにある駅や公園までの道を知り途中の施設や建物・道路の安全施設の働きに気付き、安全に道を歩くことができる。
	10	あきをさがそう (12) ・小さい収量付法 ・秋と遊ぼう	○1学期の時と比べて、季節が変わったことの証拠を集めたり、秋の草花・木の葉や、木の実、虫などと遊んだりすることができる。
	11	いえのことを しょうかいしよう (15) ・家族を紹介しよう	○家族の紹介をしたり、家庭の仕事を観察したりすることを通して、家庭での仕事に関心を持ち、自分が手伝うことのできる仕事を見つけ、積極的に行動することができる。
	12	できること発表会 ・チュウリップを植えよう ・お手伝いをしよう	
三 学 期 (27)	1	しんねんおたのしみ しゅうかいをひらこう (12) ・お正月の遊びをしよう ・遊び道具を作る	○季節の変化に伴う冬の暮らしに関心を持ち正月の遊びなどを工夫して作り、友達と一緒に遊びの計画をたて、きまりを守り、楽しく遊ぶことができる。
	2	もうすぐ2年生 (15) ・大きくなったよ	○入学後できるようになったことや、楽しかったことなどを表現することにより、成長の喜びを味わうとともに、2年生に進級する喜びや希望を持つことができる。
	3	楽しかったよ ・チュウリップが咲いたよ ・1年生を迎えよう ・僕のプレゼントを作る	

生活科 単元一覧表 (2学年)

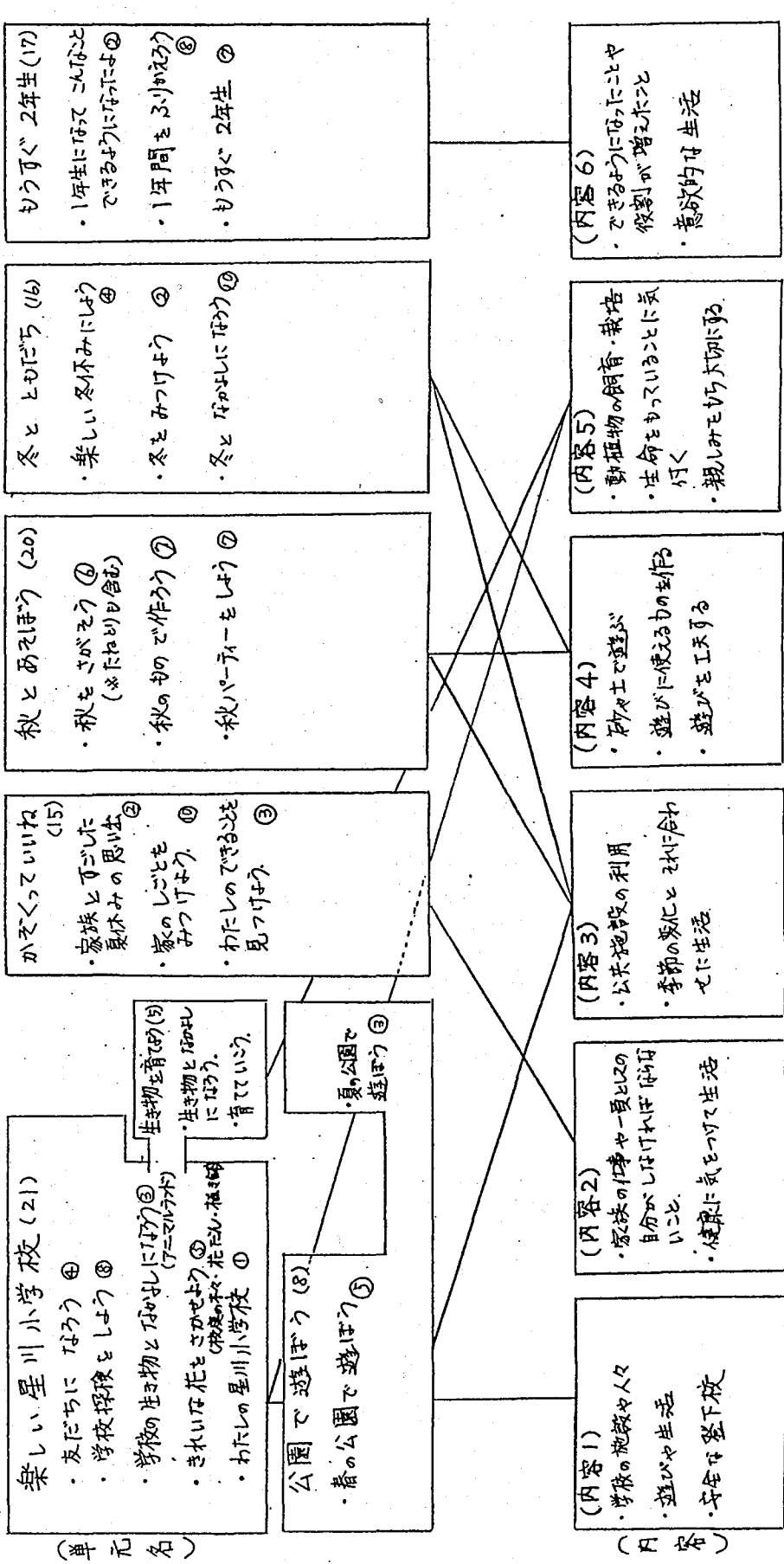
学期	月	単元名	ねらい
一 学 期 (40)	4	ぼくらは町の探検隊 (15) ・探検したい所を発表しよう ・探検の計画を立てよう ・探検に出かけよう ミニトマトを育てよう (3)	○自分たちの町の探検ごっこをすることにより、新たなものを発見したり、見直したりできる。 ○地域の人々と進んで触合い、町のようすに関心をもつことができる。
	5	駅へ行って電車に乗ろう (9) ・駅の様子を発表しよう ・星川駅に行って電車に乗ろう ・電車ごっこをしよう	○乗り物や駅などの公共施設を正しく利用することができる。
	6 ∩ 7	雨とともにだち (8) ・雨の日の校庭の探検をしよう ・雨と遊ぼう ・雨の日の楽しい遊びをしよう ミニトマトを育てよう (5)	○自然のようすや、生活のようすを季節の移り変わりや天候の違いからとらえ自分たちの生活とのかかわりに関心を持ち、楽しく過ごせるように工夫できる。
二 学 期 (38)	9	虫を飼ってみよう (8) ・虫の住んでる所はどこかな ・虫探しに行こう ・虫を飼ってみよう ・虫さん元気でね	○小動物を飼ったり、植物を育てたりして、それらが自分たちと同じように成長したり命を持っていることに気づき、自然や生きものに親しみを持ち、大切にすることができる。
	10	種をまいて育てよう (8) ・どんな草花を植えようか ・アブラナを植えよう ・成長のようすを観察しよう 手作りのお店を開こう (12) ・秋を見つけに行こう ・手作りのお店を開こう ・お店ごっこをしよう	○手作りの店を開く計画をし、友達や先生と協力して、お店に必要なものを作ったり飾ったりして一つの行事に取り組む楽しさを味わうことができる。
	11 ∩ 12	子供ゆうびんきょく (10) ・〇〇さんにおてがみを書こう ・てがみの旅を届けよう ・子供ゆうびんきょくを開こう	○手紙で遠くの人に必要なことや自分の気持ちを伝えることが分かるとともに、手紙を出すには必要なきまりがあることに気づき、自分で簡単な手紙を書いて出すことができる。
三 学 期 (28)	1	おもちゃ大会をしよう (14) ・お正月にした楽しい遊びをしよう ・楽しいおもちゃを持ち寄り遊ぼう ・おもちゃ作りをしよう ・おもちゃ大会を開こう	○身近にある自然の材料や道具を使って、それを生かしながらおもちゃを工夫して作ったり、協力し合って、楽しく遊ぶことができる。
	2	わたしの物語を作ろう (14) ・どれぐらい身体が大きくなったかな ・わたしの物語を作ろう ・発表会を開こう ・お世話になった人たちへお手紙を書こう	○自分を支えてくれた家族や周囲の人々に感謝の気持ちを持ち、これからもがんばろうとする意欲を持つことができる。

第1学年 (H6年度)

単元の配列 及び 教科内容との関連

4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
<ul style="list-style-type: none"> 入学式 計 划 1年生を始める会 交通安全教室 	<ul style="list-style-type: none"> 学年集会 遠足 	<ul style="list-style-type: none"> オリエンテERING アール開き 	<ul style="list-style-type: none"> 大掃除 夏休み開始 	<ul style="list-style-type: none"> 始業式 縦断合練 計 划 運動会 	<ul style="list-style-type: none"> 社会科見学 	<ul style="list-style-type: none"> 星の子文化祭 なかむねわらわ会 	<ul style="list-style-type: none"> 大掃除 冬休み開始 	<ul style="list-style-type: none"> 始業式 計 划 制作遊び集会 	<ul style="list-style-type: none"> 1年生がたのびのび 	<ul style="list-style-type: none"> 卒業生を送る会 お別れ式 大掃除 修了式

(関連する行事)



単元の配列及び教科内容との関連

4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
入学式 計測 1年生理編成 1年生勉強会 交通教室	学年集会 遠足	オリエンテERING フェル開き	大掃除 夏休み開始	始業式 総務委員会 計測 運動会	社会科見学	星の子文化祭 ながはわ集會	大掃除 冬休み開始	始業式 計測 手作り遊び集會	1年生理編成 1年生勉強会	卒業式 別れ式 大掃除 修了式

(関連する行事)

(単元名)	(内容)
わたしのまちなをたんけんしよう(20) ・まちなしょうかいをしよう。① ・まちな探検をしよう。② ・電車で来て出かけよう。③ ・まちなパンフレットをつくろう。④ ・生き物を探して飼おう。 ・生き物観察会をしよう。	(内容1) ・近所の人や店の人のかかわり ・買い物や使い、手紙や電話で伝える。 ・適切に対応する。
雨の日を楽しくすごそう(5) ・雨の日標本をしよう。① ・室内遊びを工夫しよう。② やさしいをそだてよう(3) ・野菜を作ろう⑤ 畑作り(草取り) 世話③ 世話④ 世話⑥ 追肥、土寄せ	(内容2) ・公共物の働きや人々の様子 ・安全に気をつけて正しく利用
さつまいもまきをしよう(15) ・さつまいもを収穫しよう。① ・さつまいもまきの計画をしよう。② ・さつまいもまきをしよう。④	(内容3) ・季節や地域の特徴にかかわる活動 ・季節や天候の変化と生活の様子の变化 ・生活を工夫し楽しむ。
手紙を出そう(15) ・お礼の手紙を書こう。① ・星川郵便局をひらこう。② ・書く準備をしよう ・郵便局を開こう	(内容4) ・自然の材料を用いて遊びや生活に使うものを作る。 ・遊びを工夫する。
おもちゃランドをひらこう(15) ・おもちゃで遊ぶ。① ・おもちゃを作ろう。② ・おもちゃランドをひらこう。④	(内容5) ・動植物や飼育や栽培 ・変化や成長の様子 ・親しみをもち大切に扱う
わたしの物語をつくろう(15) ・8年間の歩みをふりかえろう。① ・わたしの物語をつくろう。② ・わたしの物語を紹介しよう。③	(内容6) ・生活や成長に伴う変化 ・感謝の気持ちと意欲 ・自立な生活をする

(単元名)

(内容)

(D) 福岡教育大学附属小倉小学校

福岡教育大学附属小倉小学校は教育大学の附属学校としての役割を果たしつつ、先導的な実践に取り組んでいる。ここで取り上げるのは、1991年度の年間指導計画である。1991年は「生活科」が本格的実施になる前年であり、1988年に発表した「生活科」の年間指導計画の見直しと改善を図ったものである。福岡教育大学附属小倉小学校の「生活科」の特徴としては、独自の学習領域を設定していることである。1年では「わたしの道」「わたしの遊び」「育てよう」の3領域であり、2年では「わたしの道」「わたしの祭り」「育てよう」の3領域である。両学年共に「道」という言葉が「生活科」のキーワードとなっている。それは、大単元の名称に表れている。1年では「学校の道(35H)」「わたしの家から公園までの道(43H)」「わたしのあゆんだ1年間の道(24H)」, 2年では「家のまわりの道(40H)」「わたしと遠くをむすぶ道(40H)」「わたしのあゆんだ道(25H)」となっている。

(2) 新しい第一学年生活科単元年間計画表 (総時数102時間)

6月(00)	5月(01)	4月(5)	月
学校の道(08)			
大単元			
中単元			
わたしの道			
わたしの遊び			
育てよう			
<p>I ①、③、⑤、II ③ わたしの道(08)</p> <p>3 学校の中の道 ① 学校の道を自由に歩いて、みつけたことを出し合おう。 ②、③ 学校の中の道を調べ、絵地図にかいて友達と教え合おう。 ④、⑤ 学校探検をし、みつけたものを使い方や出会った人の仕事や願いを調べよう。 ⑥、⑦ ウサギやニワトリと遊ぼう。</p> <p>4 家から学校までの道(5) ① 家から学校までの道を友達に話そう。 ② 道を絵地図にかいて、友達と教え合おう。 ③ 道の危ないところを調べ、安全な通学のし方を考えよう。</p>			
<p>1 友だちとなかよし(5) ① ② 学年のお友達に自己紹介しよう。 ③ ④ お友達となかよく遊ぼう。 ⑤ 年生と楽しくすごそう。</p>			
<p>2 もらったアサガオを育てよう(6) ① だねをまくよう。 ②、③ アサガオのお世話をし、アサガオ日記をかこう。 ※7月まで継続</p>			

10月(02)	9月(9)	7月(9)
わたしの家から公園までの道(08)		
I ④、II ①、② わたしたちの公園(08)		
II ②、④、⑤ 夏とあそぼう(9)		
<p>1 秋みつけしよう(5) ① 学校の行きかえりで見つけた秋を紹介しよう。 ②、③ 秋の木の葉や落ち葉を集めよう。</p>		
<p>1 家から公園までの道(6) ① 家から公園までの道を友達に話そう。 ② 家から公園までの道を絵地図にかこう。 ③ 公園の紹介しよう。 ④ 公園で遊ぶ計画を立てよう。</p>		
<p>1 生きものの暮らし地をつくろう(5) ① 生き物の暮らし地について調べよう。 ②、③ 生き物が住む地をつくろう。 ④、⑤ もれないように地をつくりかえよう。</p>		
<p>2 公園で遊ぼう(8) ①、② 公園で遊ぼう。 ③、④ 公園で遊ぶ計画を立てよう。 ⑤、⑥ 公園で遊ぶ計画を立てよう。</p>		
<p>3 アサガオの種をまこう(2) ① アサガオの種をまくよう。 ② アサガオを育てたらこぼれ種をまこう。</p>		
<p>3 自分の池で生き物をかこう(2) ① 生き物が暮らす池を上手にかこう。</p>		

3月(6)	
わたしのあゆみ	
II①④④もうすぐ2年生(100) ①②人学したらしく、今の自分を比べてみよう。 ③二年間にできるよつになつたことを見つけてよう。 ④①でまだよカードをまとめて、「でまだよブック」をつくろう。 ⑤⑥わたしのでまだよ発表会をしよう。 ⑦⑧二年生になつてがんばることを考えよう。	⑨友達の家で気をつけることを考えよう。 ⑩⑪友達の家で遊んだことを紹介しよう。
4 もうすぐ2年生 (100)	

2月(9) 1月(9) 12月(8) 11月(12)	
だ 1年間の道(24)	
II④、⑤ 冬のあそび(100) 1 冬のくらし (3) ①②冬休みのくらしを紹介しよう。 ③冬の遊びを出し合おう。 3 わたしの家から友だちの家へ (4) ①自分の家から友達の家までの道を教え合おう。	I①④、II①④ わたしのかぞく(12) 1 わたしの家族 (12) ①②家族紹介の準備をしよう。 ③④家族を紹介しよう。 ⑤⑥⑦家族の仕事を調べよう。 ⑧自分の仕事を決め、家で見せよう。 ⑨⑩お仕事を発表会をしよう。 ⑪お正月の準備について話し合おう。
2 冬の遊び (7) ①冬の遊びをしごきよう。 ②③冬の遊びに使うものをこくろう。 ④⑤つくったものを遊ぼう。 ⑥⑦近くの友達とできる遊びについて話し合おう。	2 秋と遊ぼう (6) ①②木の葉や落ち葉を使っておもちゃをつくろう。 ③④つくったおもちゃで遊ぼう。 ⑤⑥茶室の人にアヒルをいよう。
	3 遊程をきこう (4) ①②マールリスなどの遊程をきこう。 ③④お母さんと日記をこけよう。

(2) 新しい第二学年生活科単元年間計画表 (総時数105時間)

5月(2)		4月(9)		月
家のまわりの様子(4)		家のまわりの道(4)		大単元
わたしのまわりの様子(4)		I②⑤ II①④		中単元
わたしの道		わたしの祭り		育てよう
<p>3 野菜の種や苗を買いに行こう。(4)</p> <p>①買いたい野菜について話し合い、買い物 の計画を立てよう。</p> <p>②③野菜の種や苗を買いに行こう。</p> <p>④しよらずな買い物の仕方について話し合 おう。</p>		<p>1 一年生を迎える会をしよう。(5)</p> <p>①一年生にしてあげたいことを話し合おう。</p> <p>②③一年生を迎える会をしよう。</p>		<p>2 草花を育てよう</p> <p>①しよずな草花を育てるが話し合おう。</p> <p>②③草花の種をまこう。</p> <p>④草花のお世話をしよう。</p>
				<p>4 野菜をまこう</p> <p>①買ってきた種や苗を農園に植えよう。</p> <p>②③野菜の育て方について話し合い、お 世話をしよう。</p>

7月(7)		6月(2)		月
家のまわりの様子(4)		家のまわりの道(4)		大単元
わたしたちの夏祭り(4)		I③④ II②⑤		中単元
秋祭り(4)		I④ II④		大単元
わたしたちの夏祭り(4)		I③④ II②⑤		中単元
わたしたちの道		わたしたちの祭り		育てよう
<p>5 近所の様子を調べよう。(5)</p> <p>①②家のまわりで変わったことを見つけよ う。</p> <p>③④緑地図にかいて、見つけたことを紹 介しよう。</p>		<p>1 わたしたちの夏祭り (11)</p> <p>①②③夏祭りについて調べよう。</p> <p>④ わたしたちの夏祭りの計画を立てよう。</p> <p>⑤⑥夏祭りに使う道具をつくろう。</p> <p>⑦⑧力を合わせて、夏祭りをしよう。</p>		<p>6 虫を育てよう (5)</p> <p>①②虫をまかしに行こう。</p> <p>③④⑤虫を育てよう。</p>
				<p>2 作物を育てよう (3)</p> <p>①買いたい作物について話し合おう。</p> <p>②③作物の種をまこう。</p>
				<p>1 虫を育てよう (4)</p> <p>①虫をまかしに行こう。</p> <p>②③虫の姿をつくろう。</p> <p>④虫をかおらう。</p>
				<p>2 草花や野菜を育てよう (6)</p> <p>①②草花や野菜の成長をふり返らう。</p> <p>③④草花や野菜の取り入れをしよう。</p>

12月(7)	11月(2)	10月(1)	9月(10)
わたしたしと遠くをむすぶ道(4)			
わたしたしを伝える道(9) I①II②III③		わたしたちの	
<p>1 電話で知らせよう ①秋祭りのことを早く知らせる方法を考えよう。 ②電話で、秋祭りのことを知らせよう。 ③電話のかけ方でよかったことを出し合おう。</p> <p>2 わたしの手紙の道 ①秋祭りのことをくわしく知らせる方法を考えよう。 ②③④みんなに手紙をかこう。 ⑤①郵便局に手紙を出しに行こう。 ⑥②③④の封筒を準備しよう。</p> <p>3 冬のくらし ①冬のくらしを楽しめることについて出し合おう。 ②冬のくらしの計画を立てよう。</p>	<p>3 わたしたちの秋祭り ①秋祭りの計画を立てよう。 ②③秋祭りの準備をしよう。 ④⑤秋祭りをしよう。</p>	<p>4 草花を育てよう ①どんな草花を育てるか話し合おう。 ②草花の種をまこう。 ③草花や作物の成長をまもろう。</p>	

3月(8)	2月(9)	1月(8)
わたしたしのおゆんだい		
わたしたちのあしあし(4) II①②		
<p>1 わたしたちのあしあし ①一年間をふり返って、楽しかったことを出し合おう。 ②一年間のできごとを年表に表そう。 ③④自分が小さいころのようまを調べよう。 ⑤⑥「わたしの絵本」を作ろう。 ⑦⑧絵本の発表会をしよう。 ⑨「三年生になったら…」のページを作ろう。 ⑩次の二年生にプレゼントを渡そう。</p>	<p>1 わたしたちのせつぶん祭りをしよう(9) ①②冬休みのくらしの発表会をしよう。 ③④せつぶんのことについて調べよう。 ⑤⑥せつぶん祭りの準備をしよう。 ⑦⑧せつぶん祭りをしよう。</p>	<p>2 草花を育てよう ①草花の観察をしよう。 ②草花のお世話をしよう。</p>

(E) 東京学芸大学附属大泉小学校

東京学芸大学附属大泉小学校は、文部省の教育研究開発学校の指定を受け、『豊かな学力の育成』をテーマに、1995年度から『国際』『環境』『人間』という名称の総合単元の開発を行っている。東京学芸大学附属大泉小学校の「生活科」に対応する教科名称は「広め学習」であり、授業時数は、総合単元を含めて、1年は136時間、2年は140時間である。「広め学習」は、3年生以降の総合単元、「深め学習」（子ども自らが選択・設定した個性的な課題について、自分の特性を生かして、自分らしい方法で自ら働きかける体験的・作業的な活動。テーマ学習、フリータイム学習、マイプラン学習の3つのタイプがある）、「つみあげ学習」（各教科の基礎的・基本的な内容の定着をめざす、いわゆる各教科の学習で構成されている。学び合いと振り返りを通して学び方を培う）の基礎となるものとして位置づけられている。

「広め学習」のねらいは、1年では、①学校の中、家、近所の人たちや物に親しみ、進んで働きかけようとする。②自分の身の周りの動植物や自然に触れ、親しみながら進んで関わりを持とうとする。③やってみたいことや感じたこと、見たり聞いたりして発見したことなどを、自分の言葉や方法で進んで表現しようとする — の3つである。2年では、①学校の中や周りの物の施設、そこの人たちの様子に関心を持ち、進んで働きかけようとする。②友達と一緒に楽しみながら、動植物を工夫して育てたり、物を作ったりして、進んで関わりを持とうとする。③発見したり、自分で工夫したことを、友達や他の人に言うために、自分の考えた方法で表現しようとする — の3つである。

上述のように、「広め学習」の中に現在研究開発中の総合単元が入っているが、その概要は以下のようなものとなっている。

*1年：①「アンニョン！ なかよくしてね」（『国際』総合単元） — 韓国学校との交流（12H）

②「笑顔がいっぱい」（『人間』総合単元） — 自分の手、お面をつくろう（12H）

*2年：①「アンニョン！ おたがいの国の遊びを楽しもう」（『国際』総合単元） — 韓国学校との交流（12H）

②「お年寄りといっしょに」（『人間』総合単元）（12H）

なお、『環境』に関する学習は、「広め学習」の単元の中でより総合的に扱われている。

「生活科」に見られる体験重視という特色が、中学年以降にも総合単元として採り入れられようとしていることが見いだせる。1995年度は研究の初年次であったため、まだ教材化や評価については十分に検討されていない。今後の研究の進展を期待したい。

図1-1 年間指導計画 (～1994年度)
第1学年

4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
きくのそのたんけんたい			あきのむしを みつけよう		ぼくたち・わたしたちの おまつりをたのしもう			たのしかった1ねんかん		
ぼくたち・わたしたちのどうぶつをそだてよう										
どうぶつをみんなでそだてよう → いきものひろばをつくろう → ふゆじたくをしよう → どうぶつとおわかれしよう → → →										

第2学年

4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
新入生こんにちは			町たんけん いこう		あそびオリンピッ クをしよう			ぼく・わたしの 思い出をのこそう		
だいずをそだてよう										
はたけづくりをしよう → みんなのだいずをまもろう → 実りのようすをしらべよう → → →										
小さいきものと なかよくなろう										

1995年度

年間指導計画

(※試行予定の活動である。また、活動内容の重なりは実践を通して検討していく)

[第1学年] (136時間)

4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月																																																																																																			
<table border="1"> <tr> <td>16</td> <td colspan="10">花をさかせよう(13)</td> </tr> <tr> <td>12</td> <td colspan="10">花をさかせよう(17)</td> </tr> <tr> <td>20</td> <td colspan="10">きくのこたんけんたい (がっこうたんけん, シャくじいこうえんたんけん) (35)</td> </tr> <tr> <td>16</td> <td colspan="10">つくってたべよう(16)</td> </tr> <tr> <td>18</td> <td colspan="10">心をつなごう(26)</td> </tr> <tr> <td>10</td> <td colspan="10">小單元例「アンニョン!なかよくしてね」 「笑顔がいっぱい」</td> </tr> <tr> <td>52</td> <td colspan="10">つくってあそぼう(8)</td> </tr> <tr> <td>48</td> <td colspan="10"></td> </tr> <tr> <td>36</td> <td colspan="10"></td> </tr> </table>											16	花をさかせよう(13)										12	花をさかせよう(17)										20	きくのこたんけんたい (がっこうたんけん, シャくじいこうえんたんけん) (35)										16	つくってたべよう(16)										18	心をつなごう(26)										10	小單元例「アンニョン!なかよくしてね」 「笑顔がいっぱい」										52	つくってあそぼう(8)										48											36										
16	花をさかせよう(13)																																																																																																												
12	花をさかせよう(17)																																																																																																												
20	きくのこたんけんたい (がっこうたんけん, シャくじいこうえんたんけん) (35)																																																																																																												
16	つくってたべよう(16)																																																																																																												
18	心をつなごう(26)																																																																																																												
10	小單元例「アンニョン!なかよくしてね」 「笑顔がいっぱい」																																																																																																												
52	つくってあそぼう(8)																																																																																																												
48																																																																																																													
36																																																																																																													

[第2学年] (140時間)

4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月																																																																																																																																															
<table border="1"> <tr> <td>16</td> <td colspan="10">さがしにいこう(24)</td> </tr> <tr> <td>20</td> <td colspan="10">さがしにいこう(24)</td> </tr> <tr> <td>16</td> <td colspan="10">つくってたべよう(20)</td> </tr> <tr> <td>14</td> <td colspan="10">つくってたべようII (20)</td> </tr> <tr> <td>10</td> <td colspan="10">つくってたべようII (20)</td> </tr> <tr> <td>14</td> <td colspan="10">さがしにいこう(24)</td> </tr> <tr> <td>16</td> <td colspan="10">つくってたべようII (20)</td> </tr> <tr> <td>10</td> <td colspan="10">つくってたべようII (20)</td> </tr> <tr> <td>52</td> <td colspan="10">学校の外に出よう(10)</td> </tr> <tr> <td>14</td> <td colspan="10">小單元例「アンニョン!お互いの国の遊びを楽しもう」</td> </tr> <tr> <td>10</td> <td colspan="10">「お年寄りといっしょに」</td> </tr> <tr> <td>52</td> <td colspan="10">「思い出をのこそう」</td> </tr> <tr> <td>36</td> <td colspan="10"></td> </tr> </table>											16	さがしにいこう(24)										20	さがしにいこう(24)										16	つくってたべよう(20)										14	つくってたべようII (20)										10	つくってたべようII (20)										14	さがしにいこう(24)										16	つくってたべようII (20)										10	つくってたべようII (20)										52	学校の外に出よう(10)										14	小單元例「アンニョン!お互いの国の遊びを楽しもう」										10	「お年寄りといっしょに」										52	「思い出をのこそう」										36										
16	さがしにいこう(24)																																																																																																																																																								
20	さがしにいこう(24)																																																																																																																																																								
16	つくってたべよう(20)																																																																																																																																																								
14	つくってたべようII (20)																																																																																																																																																								
10	つくってたべようII (20)																																																																																																																																																								
14	さがしにいこう(24)																																																																																																																																																								
16	つくってたべようII (20)																																																																																																																																																								
10	つくってたべようII (20)																																																																																																																																																								
52	学校の外に出よう(10)																																																																																																																																																								
14	小單元例「アンニョン!お互いの国の遊びを楽しもう」																																																																																																																																																								
10	「お年寄りといっしょに」																																																																																																																																																								
52	「思い出をのこそう」																																																																																																																																																								
36																																																																																																																																																									

	自分の願いや考えをもつ	自分と友だち、動物等とのちがいに気付く	人やもののよさから学ぶ	ヒトとしての自分に気付く	自分の成長に気付く	自然を身近に感じる	力を合わせて活動する	ものを大切に使う	動物や植物を大切に育てる	生活や活動の場を広げる
ふれ	<p>どうぶつをそだてよう!</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分もかかわりたい、元気に育てたいという願いをもつて世話をする。 ・生き物の世話を通して、それ以外の生き物の様子を知り、世話をする。 									
	<p>はなをさかせよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・きれいな花を咲かせたいという願いをもつて世話をする。 ・植物の世話を通して、成長の様子に気付く。 ・互いの世話を比べながら、成長の様子を学ぶ。 									
か	<p>つくってたべよう!</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食えない、育てたいという願いをもつて活動する。 ・植物の世話を通して、成長の様子に気付く。 ・互いに協力しながら世話を続け、成長の様子を学ぶ。 									
	<p>きくのこたんけんたい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校や石神井公園のことを知り、興味をもつ。 ・学校にはいろいろな人が活動していることに気付く。 ・石神井公園と学校では動物の様子を学ぶことに気付く。 									
した	<p>心をつなごう!</p> <ul style="list-style-type: none"> ・通う学校のことを知り、友だちになりにたいという願いをもつ。 ・みんなで楽しく遊びたいという願いをもつ。 									
	<p>つくってあそ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分なりの方針で自分の作りたいものを作る。 ・友だちの作品のよさに気付く。 									

自分の願いや考えをもつ	自分と友達、動物等とのちがいに気付く	人やもののよさから学ぶ	ヒトとしての自分に気付く	自分の成長に気付く	自然を身近に感じる	力を合わせて活動する	ものを大切にす	動物や植物を大切に育てる	生活や活動の場を広げる
さがしにいこう									
<ul style="list-style-type: none"> 自分からさがし出したものを大切にしようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 人間としての自分から学ぶ。 先に手紙を書こう。 	<ul style="list-style-type: none"> 水まで汲まう。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちからさがし出したものを卒業全体のものにする。 学校の中の水さがし。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちと掛け合い、選んで関わろうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ペットボトルで植木鉢を作る。 1日、水を飲まない生活をしてみよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 虫探しに行こう。 木の葉を貼って大きく育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> どんくろパーティーを開こう。 グリーンアブドベントナーをしよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 動物の世話を専門家にたずねる。 	
どうぶつをそだてようII									
<ul style="list-style-type: none"> 元氣を買ってほしい、自分もかわりたいという願いをもつて世話をす。 	<ul style="list-style-type: none"> 動物の世話をしながら自分の週日に気付く。 					<ul style="list-style-type: none"> 友だちと協力して動物の世話をす。 	<ul style="list-style-type: none"> 動物のことを考えて、えさやすかか工夫をしながら世話をす。 		
つくってたべようII									
<ul style="list-style-type: none"> 食べたい、育てたいという願いをもつて活動する。 	<ul style="list-style-type: none"> 育てている植物の成長の様子を観察する。 	<ul style="list-style-type: none"> 人と関わりながら、豆腐作りのお話を聞き取る。 			<ul style="list-style-type: none"> 季節の変化とともに、大豆の成長を観察する。 	<ul style="list-style-type: none"> 友だちと協力して大豆の世話をしたり、豆腐作りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 大豆などの材料を無駄なく使う。 	<ul style="list-style-type: none"> 豆腐以外にも大豆からできるものを作り、育て、食べ、楽しむ。 	
学校の外にでよう									
<ul style="list-style-type: none"> 学校のまわりを散策して、進んで学校のまわりの様子を知ろうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校のまわりには、自分の家のまわりと違うことがあることに気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校のまわりでいろいろな人や場所があることに気付く。 			<ul style="list-style-type: none"> 学校のまわりにはいろいろな自然があることに気付く、そこで遊んだり、触れたりする。 		<ul style="list-style-type: none"> 学校のまわりにある自然を大切にしようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校のまわりでいろいろな自然を体験する。 学校のまわりでいろいろな自然があることに気付く、そこで遊んだり、触れたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校のまわりでいろいろな自然を体験する。 学校のまわりでいろいろな自然があることに気付く、そこで遊んだり、触れたりする。
心をつなごうII									
<ul style="list-style-type: none"> 自分の成長の思い出を大切にしようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 00学校や00学校のまわりとはどこか違うところがあるのか。 お年寄りの手と自分の手を比べる。 	<ul style="list-style-type: none"> 00学校のまわりには集まらう。 お年寄りからいろいろな遊びを覚えてもらおう。 	<ul style="list-style-type: none"> 小さいころからの思い出を集める中で、大きくなった自分には気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> 00学校に自分たちの学校を教えよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 2年生の写真をタイムカプセルに入れて大切にしようとする。 		<ul style="list-style-type: none"> 00学校に行くよう。 		<ul style="list-style-type: none"> お年寄りといっしょに遊ぶ。
思い出をのこそう									
<ul style="list-style-type: none"> 自分のやりたいことや思い出を表現しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 友だちのやっている活動の中へからよいかを学ぶ。 		<ul style="list-style-type: none"> 入學してからの自分の生活を振り返り、できるよくなることに気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> 友だちと協力して思い出の品を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校で使っていたものなどを思い出の品として残そうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 育てていた動物や植物のことを思い出して残す。 	<ul style="list-style-type: none"> 育てていた動物や植物のことを思い出して残す。 	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな人にも自分の思い出を伝えようとする。 	

(F) 長野県伊那市立伊那小学校

伊那小学校は、長野県南部伊那地方の中核都市である伊那市の中央部の学校である。伊那小学校の総合学習の取り組みは20年近くに及んでいる。低学年の授業は総合学習が基本であり、「生活科」という科目は存在しない(「国語」「算数」なども同様)。6か月から1年間にわたって、1つのテーマを総合活動として追いつけ、その中に「自然」「社会」「言語」「数」「表現・運動」などの領域を組み入れている。

では具体例を紹介してみよう。1995年度の2年忠組の実践『ヤギさんはみんなの友達ー忠組と白ちゃんー』を最初に取り上げる。1年生の2月に雌ヤギを学級に迎え、子どもたちは“白ちゃん”と命名する。餌やり・掃除などの世話，“白ちゃん”の遊び場作りや飼料作り(畑作り・ニンジンや豆の栽培)に取り組んだり、餌代を集めるために廃品回収に取り組む。栽培を通して植物の成長を学び、アルミ缶集めを通して数の計算を学び，“白ちゃん”の餌の量を調べることを重さの学習に結び付けている。“白ちゃん”に赤ちゃんを産んで欲しいとの子どもの願いを生かし、獣医と相談させたり、雄ヤギを借りるお願いの手紙や発情させる注射をするかしないかの作文を書かせて、言語表現の学習に結び付けている。妊娠したかどうかを調べるために、子どもたちは継続的に観察を行い、体重の変化・乳量の変化を通して容積の単位(l, dl 等)の学習を行っている。また，“白ちゃん”の絵を描いたり、鍵盤ハーモニカを用いて“白ちゃん”の歌づくりに取り組むといった表現活動もなされる。1年間の学習は“白ちゃん”との関わりを基礎に据え、様々な領域と結ばれて行われるのである。

もう1つの例として、1994年度の2年泉組の実践『大きくなってね メロンくんー泉組ビニルハウスでのメロン作りー』を取り上げてみよう。2年の前半をビニルハウスでのメロン作り、後半をイチゴ作りとして、植物の栽培を中核に据えて授業を展開している。メロンの大きさの計測を通して、「長さ」を学習し、授粉の時間を調べることから時計の見方を学ぶ。メロンが採れたことを知らせる手紙やイチゴの世話を教えてもらう手紙を書くことを通して、言語表現の学習と結び付けている。メロンの歌作りやメロンの版画、イチゴ畑の絵の作成を通して、表現活動を行う。ここでは、メロンやイチゴの栽培を通して、様々な領域の学習が行われているのである。

伊那小学校の総合学習は、文字通りの総合学習と言えよう。それは、細切れの疑似体験とは無縁のものである。他の学級の総合学習の概要も紹介しておくので参考にされたい。3年以降は、「総合学習」は「総合活動」に替わる。そして、新たに「算数」「国語」などの教科学習が登場するが、総合活動と教科学習が様々な形態で(それは、学習材と子どもたちの材の捉え方により変動する)絡み合いながら展開していく。3・4年の総合活動の事例も紹介しておく。

伊那小学校の実践は、学力を「知識・理解」などの認知的領域に限定せず、生きる力・感性・意欲などの情意的側面まで拡張して捉える信濃教育(信州教育)のプラス

の面が反映したものであるとみなすことができよう。

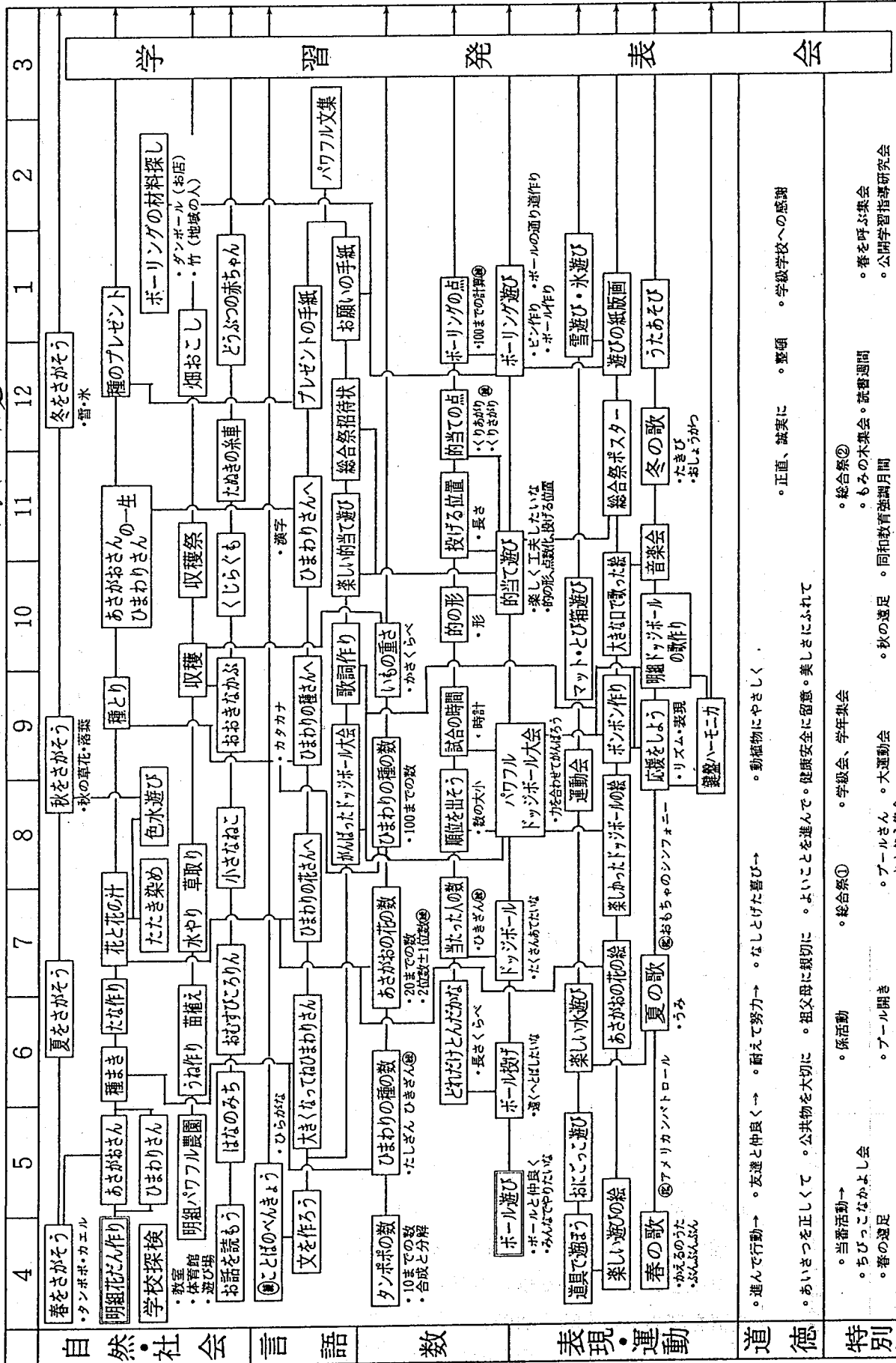
最後に、伊那小学校の総合学習の持つ問題点に触れておく。動物のみならず植物までも擬人化している点である（例えば、泉組の実践でメロンを“メロンくん”と呼び、枯れてしまうとメロンのお墓を作ったことを挙げることができよう）。また、栽培した植物や飼育した動物のための歌を創るという点も、定式化されつつある。これらの点は改善の必要性があるだろう。

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
自然・社会	白ちゃんの好きな物を作ろう ・ニンジン・トマト・モロコシ・マイ	種まき ・草取り ・水やり	田畑先生のお話 ・農まりの薬 ・配合飼料の量 ・はんすう	自分たちで干し草を作ろう ・草刈り、草干し ・一回にあげる量	夏休みの白ちゃんの世話 ・おまけの世話	白ちゃんに赤ちゃん産んでほしい ・赤ちゃんの様子 ・産ませる場所	田畑先生のお話 ・赤ちゃんの様子 ・産ませる場所	発情調べ ・嗅いだ数 ・頭突きの数 ・お尻の色 ・種付け、妊娠 ・交尾の観察	おなかの周りを調べ ・体重計 ・メジャー	赤ちゃんのできた白ちゃんの様子を調べ ・ふんのかたち ・食べた量	お乳で作れる物調べ ・ヨーグルト ・チーズ	変わってきた白ちゃんの体 ・おなかの周り ・体種	出産の準備
言語	白ちゃんの世話をしっかりしよう ・ヤギの習性 ・毎日の世話 ・白ちゃんへの思い	ヤギの病気を調べ ・ヤギの病気を調べ ・治療法	田畑先生のお話 ・農まりの薬 ・配合飼料の量 ・はんすう	自分たちで干し草を作ろう ・草刈り、草干し ・一回にあげる量	夏休みの白ちゃんの世話 ・おまけの世話	白ちゃんに赤ちゃん産んでほしい ・赤ちゃんの様子 ・産ませる場所	田畑先生のお話 ・赤ちゃんの様子 ・産ませる場所	発情調べ ・嗅いだ数 ・頭突きの数 ・お尻の色 ・種付け、妊娠 ・交尾の観察	おなかの周りを調べ ・体重計 ・メジャー	赤ちゃんのできた白ちゃんの様子を調べ ・ふんのかたち ・食べた量	お乳で作れる物調べ ・ヨーグルト ・チーズ	変わってきた白ちゃんの体 ・おなかの周り ・体種	出産の準備
算数	白ちゃん当番の発表 お話をきこう	アルミ缶集め 白ちゃんノート 白ちゃん当番の発表 お話をきこう	白ちゃんお手紙 ・遊び場で遊んでね	白ちゃんお手紙 ・遊び場で遊んでね	夏休みの白ちゃんの世話 ・おまけの世話	白ちゃんに赤ちゃん産んでほしい ・赤ちゃんの様子 ・産ませる場所	田畑先生のお話 ・赤ちゃんの様子 ・産ませる場所	発情調べ ・嗅いだ数 ・頭突きの数 ・お尻の色 ・種付け、妊娠 ・交尾の観察	おなかの周りを調べ ・体重計 ・メジャー	赤ちゃんのできた白ちゃんの様子を調べ ・ふんのかたち ・食べた量	お乳で作れる物調べ ・ヨーグルト ・チーズ	変わってきた白ちゃんの体 ・おなかの周り ・体種	出産の準備
表現・運動	白ちゃんの好きな物を作ろう ・ニンジン・トマト・モロコシ・マイ	種まき ・草取り ・水やり	田畑先生のお話 ・農まりの薬 ・配合飼料の量 ・はんすう	自分たちで干し草を作ろう ・草刈り、草干し ・一回にあげる量	夏休みの白ちゃんの世話 ・おまけの世話	白ちゃんに赤ちゃん産んでほしい ・赤ちゃんの様子 ・産ませる場所	田畑先生のお話 ・赤ちゃんの様子 ・産ませる場所	発情調べ ・嗅いだ数 ・頭突きの数 ・お尻の色 ・種付け、妊娠 ・交尾の観察	おなかの周りを調べ ・体重計 ・メジャー	赤ちゃんのできた白ちゃんの様子を調べ ・ふんのかたち ・食べた量	お乳で作れる物調べ ・ヨーグルト ・チーズ	変わってきた白ちゃんの体 ・おなかの周り ・体種	出産の準備
道徳	白ちゃんの好きな物を作ろう ・ニンジン・トマト・モロコシ・マイ	種まき ・草取り ・水やり	田畑先生のお話 ・農まりの薬 ・配合飼料の量 ・はんすう	自分たちで干し草を作ろう ・草刈り、草干し ・一回にあげる量	夏休みの白ちゃんの世話 ・おまけの世話	白ちゃんに赤ちゃん産んでほしい ・赤ちゃんの様子 ・産ませる場所	田畑先生のお話 ・赤ちゃんの様子 ・産ませる場所	発情調べ ・嗅いだ数 ・頭突きの数 ・お尻の色 ・種付け、妊娠 ・交尾の観察	おなかの周りを調べ ・体重計 ・メジャー	赤ちゃんのできた白ちゃんの様子を調べ ・ふんのかたち ・食べた量	お乳で作れる物調べ ・ヨーグルト ・チーズ	変わってきた白ちゃんの体 ・おなかの周り ・体種	出産の準備
特別活動	白ちゃんの好きな物を作ろう ・ニンジン・トマト・モロコシ・マイ	種まき ・草取り ・水やり	田畑先生のお話 ・農まりの薬 ・配合飼料の量 ・はんすう	自分たちで干し草を作ろう ・草刈り、草干し ・一回にあげる量	夏休みの白ちゃんの世話 ・おまけの世話	白ちゃんに赤ちゃん産んでほしい ・赤ちゃんの様子 ・産ませる場所	田畑先生のお話 ・赤ちゃんの様子 ・産ませる場所	発情調べ ・嗅いだ数 ・頭突きの数 ・お尻の色 ・種付け、妊娠 ・交尾の観察	おなかの周りを調べ ・体重計 ・メジャー	赤ちゃんのできた白ちゃんの様子を調べ ・ふんのかたち ・食べた量	お乳で作れる物調べ ・ヨーグルト ・チーズ	変わってきた白ちゃんの体 ・おなかの周り ・体種	出産の準備

学級の年間学習計画 (当初の計画に実践の歩みを加えたもの) 1994年度 2年 泉組

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
自然・社会	メロン	メロン	メロン	メロン	メロン	メロン	メロン	メロン	メロン	メロン	メロン	メロン
言語	メロンの育て方	メロンの観察記録	メロンを作っている小池さん	メロンがとれたことを小池さんに知らせる手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙
数	メロンの大きさ	メロンの大きさ	メロンの大きさ	メロンの大きさ	メロンの大きさ	メロンの大きさ	メロンの大きさ	メロンの大きさ	メロンの大きさ	メロンの大きさ	メロンの大きさ	メロンの大きさ
表現・運動	メロンの育て方	メロンの観察記録	メロンを作っている小池さん	メロンがとれたことを小池さんに知らせる手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙
道徳	メロンの育て方	メロンの観察記録	メロンを作っている小池さん	メロンがとれたことを小池さんに知らせる手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙
特別活動	メロンの育て方	メロンの観察記録	メロンを作っている小池さん	メロンがとれたことを小池さんに知らせる手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙	メロンのお礼の手紙

学級の年間学習計画 (当初の計画に実践の歩みを加えたもの) 1994年度 1年 明組



- 特別活動**
- ・当番活動→
 - ・ちびっこなごよし会
 - ・春の遠足
 - ・安全指導→
 - ・給食指導→
 - ・保健指導→
 - ・図書利用指導
 - ・あいさつ指導→
 - ・清掃指導
 - ・園の衛生週間
- 道徳**
- ・進んで行動→
 - ・友達と仲良く→
 - ・耐えて努力→
 - ・なしたげた喜び→
 - ・動植物にやさしく
 - ・健康安全に留意。美しさにふれて
 - ・あいさつを正しくて
 - ・公共物を大切に
 - ・祖父母に親切に
 - ・よいことを進んで
 - ・健康安全に留意。美しさにふれて
- 表現・運動**
- ・総合活動①
 - ・係活動
 - ・プール開き
 - ・安全指導→
 - ・給食指導→
 - ・保健指導→
 - ・図書利用指導
 - ・あいさつ指導→
 - ・清掃指導
 - ・園の衛生週間
- 数**
- ・総合活動②
 - ・もみの木集会
 - ・読書週間
 - ・公開学習指導研究会
- 自然・社会**
- ・総合活動②
 - ・もみの木集会
 - ・読書週間
 - ・公開学習指導研究会

各学級の本年度の実践例の要約 (1995年)

1 学 年

月	題 材 名 ()は組名	ね ら い	内 容	核となる学力 意欲にかかわる学力
9 月 3	廃品で遊ぼう(智)	身近にある廃品を工夫して使い、遊ぶものを作り上げていく喜びや、みんなで遊ぶ楽しさを味わう。	(1)わき水の森の探検 (2)わき水の森ごみ拾い作戦(毎日わき水の森へごみ拾いに行く) (3)空き缶を使って、魚つりゲーム (4)ダンボールを使って、巨大迷路 (5)廃品を使って、おぼけ屋敷	○「これをやったらおもしろそうだ」と気づく力。 ○それをどういう手順でやったらよいか考え出す力。 ○自分の着想を友だちに教えたり、友だちのよいところを取り入れたりしながら、みんなと一緒に終わりまでやりとげていく力。 ◎やっていることや、やったことを見返して感想がもてたり、「こうやればもつとおもしろくなりそうだ」と考え出したりする力。
9 月 3	ちゃぼさん(仁)	ちゃぼとのかかわりを通し、ちゃぼの身になって世話のし方を考え、愛情を深めていく。	(1)ちゃぼとの出会い (2)ちゃぼの世話①(小屋作り、当番活動等) (3)ちゃぼと仲よし(ちゃぼ日記、歌、絵等) 創作「仁組にちゃぼがきた」 (4)ちゃぼの世話②(ちゃぼさんの身になって) (5)さよなら、ちゃぼさん	
7 月 3	牛乳パックで作ろう(勇)	牛乳パックを使い工作をしたり再生紙を作ったりして、身近なものを使って作る楽しさを味わう。	(1)牛乳パック集め (2)牛乳パックで学校模型作り (3)牛乳パックで自分たちで遊ぶ物作り (4)紙づくり ・はがき作り ・しおり作り ・賞状作り	
9 月 3	学組のちゃぼと烏骨鶏(学)	ちゃぼと烏骨鶏を育て、一緒に遊びながら、絵に描いたり、歌を作ったりして、愛情を深めていく。	(1)小屋・遊び場作りと名前決め (2)毎日の世話(当番活動) (3)歌作り(「ちゃぼとうこっけいがやってきた」) (4)5羽の絵、落ち葉を使っての絵、小屋の壁画 (5)冬越しの準備 (6)5羽のお話とカルタ作り (7)5羽とのお別れ	

2 学 年 (1995年度)

月	題材名 ()は組名	ねらい	内 容	核となる学力 意欲にかかわる学力
4 3	孝組のチャボさん(孝)	卵からひながかえり元気に育つことを願いながら、チャボやひよこを飼育し、チャボへの愛情を深めていく。	(1)毎日の世話(当番活動) (2)たまごがひよこになるまで(成長過程調べ) (3)えさ作り(畑作り、パン集め、大根葉集め) (4)チャボさんの歌作り (5)冬にむかって(ビニール張り、すき間直し) (6)牛乳パックのチャボさん作り (7)チャボさんの思い出作り(お話、絵、劇等)	○「これをやったらおもしろくなりそうだ」と気づく力 ○それを自分なりに受けとめて、「こうすればよさそうだ」と考え出す力 ○自分の着想を友に教えたり、友のよいところを取り入れたりしながら、友だちと一緒にやっていく力 ○やっつけていることや、やりとげたことの喜びを味わい、さらによりおもしろい方法を考え出す力。
4 3	文組の小麦でパン作り(文)	自分たちで育てた小麦を使い、パンやクッキーを作るなかで、楽しい体験や作る喜びを味わう。	(1)小麦の観察(背丈・色) (2)麦かり(かまの使い方・ひものしぼり方) (3)脱穀 (4)石うすさがし(チラシ作り) (5)粉ひき(歌作り・絵) (6)パン作り(作り方調べ) (7)麦わら細工	
5 3	明組のひまわりさん(明)	ひまわりが成長する喜びを知り、歌や絵などの表現やひまわりを生かした遊びの楽しさを味わう。	(1)土作り、種まき、水やり、草取り (2)ひまわりさんの観察(ふた葉、本葉、高さ) (3)ひまわりさんの歌作り (4)ひまわりさんの絵、はり絵 (5)ひまわりさんの種遊び(ゲーム作り、料理) (6)ひまわりさんの思い出(カレンダー、お話)	
4 3	いなほ節組伊那の名物作り(節)	伊那の名物作りに携わる人々との交流を深め、地元の名物を自分たちで作る喜びを味わう。	(1)千葉県の名物ピーナッツ(種まき、世話、収穫) (2)伊那の名物調べ、お店探検 (3)伊那の名物作り(五平もち、はっかあめ、いなご、ざざ虫) (4)名物に使う作物作り(ごま、小豆) (5)伊那の名物に携わる人々との交流 (6)伊那の名物の歌作り、劇作り (7)屋台「節屋」で、名物をプレゼント	

3 学 年 (1995年度)

月	題 材 名 ()は組名	ね ら い	内 容	核となる学力 意欲にかかわる学力
4 3	山組のりんご園(山)	りんごの成長を観察しながら、自分たちの力でりんご作りをし、収穫する喜びや食べる楽しさを味わう。	(1)花粉とりと受粉(人工授粉とハチによる受粉) (2)摘果と有袋無袋の比較実験 (3)収穫に向けての準備(葉つみ・玉まわし等) (4)山組りんごの収穫、収穫祭の計画・実施 (5)りんごを使った料理、ジャム作り (6)お礼のせん定、りんごの木とのお別れ会 (7)りんご作りの記録のまとめ、歌作り	<p>○ものやことや人にかかわる中で心を動かし、具体的な活動のめあてを持つ力。</p> <p>○そのめあてを実現するための方法を考え、「この方法でやればよさそうだ。」と選択する力。</p> <p>○めあてに照らしながら活動を見返したり、友だちの考えを聞いて修正したりしながら、ねばり強く実践する力。</p> <p>◎活動の成就した喜びを味わい、また「もつとこうすればよかった。」と今までのあり方をふり返り、さらに新しい活動へ立ち向かうとする力。</p>
4 3	音楽劇作りと公演(川)	自分たちで音楽劇を作り、公演することを通して、表現力を培い、劇を楽しく見てもらうことの喜びを味わう。	(1)今年1年間の音楽劇作りと公演の計画 (2)よりよく伝えるための台本の見直し (3)作り直した台本にそっての劇の工夫、練習 (4)クラスで飼育しているウサギとチャボをテーマにした音楽劇作りと音楽会での発表 (5)スイミーⅡを更に手直しし、総合祭で発表 (6)「希望の家」での公演計画を立て、実施	
4 3	森組のチャボさん(森)	チャボとかかわり、ヒナの誕生を喜んだり、一緒に遊んだり、歌を作ったりするなかで、チャボへの愛情を深めていく。	(1)毎日の世話(エサやり・水やり・観察・清掃) (2)ヒナの誕生・世話 (3)チャボさんの食べやすいエサ箱作り (4)チャボさんと遊ぼう(エサ作り・遊び場作り) (5)私の「チャボさんの歌」作り (6)チャボさんとお別れ(歌作り・お別れ会)	
4 3	泉組のイチゴ(泉)	真っ赤なおいしいイチゴを食べたいとねがい、ハウスのなかでイチゴを育て、食べる喜びを味わう。	(1)イチゴ(女蜂)の作り方調べ(生産者探し) (2)女蜂の苗植え(土作り・うね作り) (3)女蜂の日々の世話(水やり・虫退治・観察) (4)女蜂の受粉 (5)寒冷対策(暖房の仕方) (6)イチゴの収穫・イチゴを使った料理	

4 学 年 (1995年度)

月	題 材 名 ()は組名	ね ら い	内 容	核となる学力 意欲にかかわる学力
4 5 3	春組の牛さん —子牛とお別れ、 新しい生命の誕生— (春)	子牛との別れ、 新しい命の誕生 お乳を搾って飲 むことなどを通 して、牛への愛 情を深めていく。	(1)野辺山の高見沢さんに、ジュニア君をひきとつ てくれるようにバスに乗ってお願いに行く (2)ジュニア君とお別れ (3)新しい命、ぼっち君の誕生 (4)お乳搾り、お乳を使ってできるもの (5)3度めの種つけに挑戦 (お別れにむけて)	<p>◎ものやことや人にかかわるなかで心を動かす、具体的な活動のめあてをもつ力。</p> <p>◎そのめあてに合った方法を考え出し、「この方法でやってみよう」と決め出す力。</p> <p>◎めあてにたどり着きながら活動を見返したり、友の考えを聞いて修正したりしながら、ねばり強く実践する力。</p> <p>◎熱中して活動したり、やり遂げたよろこびを味わったりするなかで、今までのあり方をふり返り、新たな活動へ立ち向かおうとする力。</p>
4 5 3	夏組 小麦作り(夏)	自分たちの育て た小麦粉を使っ て小麦粉を利用 した色々な料理 を作っていくな かで調理の楽し さを味わう。	(1)麦の世話 (2)麦の刈りとり、脱穀 (3)麦の製粉 (4)麦を使つての料理調べ (5)小麦粉を使った料理作り (6)小麦粉料理クッキングブック作り (7)小麦との思い出を絵や文で表す	
8 5 3	秋組 手作り楽器で 演奏しよう(秋)	手作り楽器を作 り演奏する活動 を通して、楽器 の楽しさを味わ うとともに、友 だちと演奏する 良さを感じる。	(1)身近にある材料で楽器作り (2)手作りの楽器で音楽に合わせる (3)いろいろな楽器調べ (4)材料を探し、設計図を書く (5)いい音のする楽器作り (6)リズム作り、曲作り (7)みんなで演奏をする	
4 5 3	天組 ポニーと友だち(天)	ポニーのことを 考えて世話をし たり、他の馬と 触れ合ったりし て動物と共に学 習することの楽 しさを味わう。	(1)毎日の飼育(えさ作り・小屋そうじ・散歩) (2)柵の中への砂ひき・柵の拡張 (3)伊那まつりの馬を引く出し物への参加 (4)箕輪中部小のポニーとの交流会の計画・実施 (5)開田村の木曾馬見学 (6)ポニーの思い出の絵、木版画の製作 (7)ポニーとお別れ会	

各学級の本年度の実践例の要約

(1994年)

1 学 年

月	題材名 ()は組名	ね ら い	内 容	核となる学力 〔「意欲」に かかわる学力〕
6 } 3	忠組のヤギさん (忠)	ヤギを飼いたい と願い、迎える ための準備や、 毎日の世話をす ることを通して、 ヤギへの愛情を 深めていく。	(1)学校や家にいる動物探し (2)ヤギさんについての調べ活動(農場見学) (3)忠組のヤギさん探し(お願いの手紙) (4)ヤギさんの小屋・さく作り (5)えさ集め (6)毎日の世話(えさやり・掃除など) (7)ヤギさんの絵・文章・お話など	<p>○「これをやったらおもしろそうだ」と気づく力。 ○それをどういう手順でやったらよいか考え出す力。 ○自分の着想を友だちに教えたり、友だちのよいところを取り入れたりしながら、みんなと一緒に終わりまでやりとげていく力。 ◎やっていることや、やったことを見返して感想がもてたり、「こうやればもっとおもしろくなりそうだ」と考え出したりする力。</p>
5 } 3	孝組のチャボさん (孝)	早く仲良しになり たいと、チャ ボを飼育してい くなかで、チャ ボへの愛情を深 めていく。	(1)毎日の世話(当番活動) (2)チャボさんのえさ調べ (3)チャボさんの詩・歌・話作り (4)遊び場・さく作り (5)チャボさんの小屋作り (6)冬を越すための準備	
6 } 3	文組の小麦さん (文)	自分たちで作っ た小麦粉で、パ ンを作りたいと 願い、小麦の成 長を観察し、大 きく育つ喜びを 味わう。	(1)小麦の育て方調べ (2)種まきの準備(畑おこし・畝作り) (3)種まき (4)観察(背丈・葉の数・形) (5)麦踏み・土寄せ (6)小麦さんのお話・歌作り (7)収穫に向けての準備	
5 } 3	節組のひょうたんさん (節)	ひょうたんを育 てていくなかで、 成長過程での驚 きや喜びを知り、 それを歌やお話・ 劇で表現する楽 しさを味わう。	(1)苗植え・水やり・支柱立て・ネットはり (2)背の高さ、葉や花の数、形調べ (3)収穫・水漬け・種出し・種の数調べ (4)ひょうたんさんへのお手紙・絵 (5)ひょうたんさんのお話・歌・劇作り (6)ひょうたんさんの加工 (7)ひょうたんおじいちゃんとの交流	

2 学 年 (1994年度)

月	題材名 ()は組名	ね ら い	内 容	核となる学力 〔「意欲」に かかわる学力〕
10 \n3	山組りんごたんけん(山)	りんご園での体験や調べ活動をもとに、自分たちの力でりんご作りをしていく喜びを味わう。	(1)りんご園の見学とりんご収穫の体験 (2)りんご調べ(形・大きさ・種類・木の形) (3)りんごを使った料理 (4)りんごができるまで(成長と世話調べ) (5)冬のりんごの木の世話(枝のせん定・肥料) (6)りんごの木の芽ぶきの様子と春先の世話	<p>○「これをやったらよさそうだ、おもしろそうだ。」と気付く力。</p> <p>○それを自分なりに受けとめ、「こうすればよさそうだ。」と考え出す力。</p> <p>○自分の気づきを友だちに教えたり、友だちのよいところを取り入れたりしながら、一緒になってそれを終わりまでやりとげていく力。</p> <p>◎やっていることや、やりとげたことの喜びを味わい、自分の活動を見返し、さらによくする方法を考え出す力。</p>
8 \n3	音楽げき作り(川)	心に残る音楽劇にしていくなかで、友と力を合わせ、お話作り、台本作り、歌作りをする楽しさや喜びを味わう。	(1)『スイミー』の台詞や歌での表現活動 (2)『スイミー』で使う小道具作り (3)ともがき発表に向けての歌作りと小道具作り (4)『スイミーII』の参考にするお話探し (5)『ぼく・わたしのスイミーII』のお話作り (6)『スイミーII』の台本作り (7)『スイミーII』の歌作り	
4 \n3	森組のチャボさん(森)	チャボの結婚、ヒナの誕生を喜び、一緒に遊んだり、歌を作ったりするなかで、チャボへの愛情を深めていく。	(1)毎日の世話 (2)チャッピーの結婚(およめさんさがし) (3)ヒナの誕生(巣箱作り) (4)チャボさんと遊ぼう(遊び場作り) (5)チャボさんに喜んでもらおう(料理作り) (6)「チャボさんのうた」作り (7)「森のチャボさん」オペレッタ作り	
9 \n3	月組ゆうびんきょく(月)	自分たちの郵便局を開局することにより、友だちと考えを出し合い、困難を乗り越える喜びを味わう。	(1)転校していった友だちからのお手紙 (2)手作りのはがきでの返事 (3)はがきのひみつ調べ (4)ポストのひみつ調べ (5)伊那郵便局の見学 (6)月組ゆうびんきょくの開局 (7)全校へむけての開局	

<付 記>

「生活科」を総合学習的視点で捉えている学校は幾つかある。例えば、和光小学校・和光鶴川小学校では、「せいかつべんきょう」という名称の教科として、低学年で週あたり6時間で実践されている。

また、奈良女子大学文学部附属小学校では、戦前の木下竹次の実践伝統を受け継ぎ、重松鷹泰主事のもと、教育課程の再編を昭和20年代中期に行ったが(『奈良プラン』)、その中には現在の「生活科」の趣旨と合致するものも含まれている。『奈良プラン』は、「しごと・けいこ・なかよし」の3領域から成り、現在に至るまで実践が続けられている。「けいこ」は、人間形成の実質的内容となる基本的な能力を生活の手段として確実に習得させるところに主眼があり、特定の目標に応じた分科的な学習形態をとり、「なかよし」は、学校内において、自分の所属する有意義な集団をつくり、その生活に適応しながら成員の友愛と協同によって集団生活をし、また新たに建設していくことを主眼とし、学年や学級を解体した小集団による実践的な学習形態を中心としている(相部, 1995)。

「生活科」と関係の深い「しごと」は、自然、人間、社会の真実のすがたを求めて、その知見と視野を拡げ、身近な現実の問題を追究して新しい社会生活のあり方を洞察させ、それに向かって自己の生活態度ならびに生活環境をつくりかえていく意欲と実践力を育てることを主眼としている(相部, 1995)。この「しごと」学習は、低学年では「ものを見る目・気付く力を育てる」ことを、中学年では「ものごとを関係的にとらえる力を育てる」ことを、高学年では「自らの見方や考え方をつくる力を育てる」ことをねらいとしている(廣岡, 1995)。低学年の「しごと」学習の具体例では、「学校探検」や「秋の色見つけ・音しらべ」などがあり、現行の「生活科」の実践とかなり共通性がある。筆者は、奈良女子大学文学部附属小学校の学校公開には参加したことがなく、また、年間指導計画も入手していないので、本論でのこれ以上の言及はしないことにする。しかしながら、奈良女子大学文学部附属小学校の「しごと」学習については、十分に検討する必要性と意義を認めるものである。

[文 献]

- 相部芳徳 1995 子どもの主体性の発現－附属小学校における「しごと学習」を中心に－ 子どもの主体性の発現と展開（奈良女子大学・附属学校園間共同研究紀要），1，123-134.
- 福岡教育大学附属小倉小学校 1991 本校生活科 年間指導計画の見直しと改善 子どもに学ぶ，19，12-50.
- 福岡教育大学附属小倉小学校 1992 本校生活科 年間指導計画の見直しと改善（第二学年） 子どもに学ぶ，20，56-83.
- 廣岡正昭 1995 児童の主体性の発現と授業設計－追究する主体を育てる「しごと学習」の授業設計－ 子どもの主体性の発現と展開（奈良女子大学・附属学校園間共同研究紀要），1，135-161.
- 児島邦宏・東京学芸大学附属大泉小学校（編） 1995 学習をつくる 生活をつくる 自分をつくる 豊かな学力をどう育てるか ぎょうせい
- 九戸村立伊保内小学校 1992 平成4年度 伊小の生活科
- 盛岡市立仙北小学校 1995a ティームティーチングによる学びと力の育成 日常化を目指して 研究集録 第27号
- 盛岡市立仙北小学校 1995b 各教科年間指導計画・単元TT計画書（第1次）
- 長野県伊那市立伊那小学校 1994 公開学習指導研究会研究紀要 内から育つ－材とのかかわりを深めていくなかで，目を輝かせて追究し，自らを高めていく子ども－
- 長野県伊那市立伊那小学校 1995 公開学習指導研究会研究紀要 内から育つ－その子らしさを発揮して生き生きと追究し，自らを高めていく子ども－
- 東京学芸大学附属大泉小学校 1995a 研究紀要 豊かな学力の育成－『国際』『環境』『人間』総合単元の創造－
- 東京学芸大学附属大泉小学校 1995b 平成7年度 豊かな学力をめざした教育課程試案
- 横浜市立星川小学校 1992 平成4年度版 教育課程 生活科

〔研究7〕 「生活科」の授業づくり -楽しくて学力のつく「生活科」をめざして-

1. 目的

筆者はこれまで約3年間にわたり、各地の「生活科」の授業を参観し、検討してきた。特に、岩手県内の2つの小学校（九戸郡大野村向田小学校、同郡九戸村伊保内小学校）では数回にわたり、継続的に参観してきた。数多くの「生活科」の授業記録なども参考にしながら、授業実践を通して得た「生活科」の授業づくりと指導の在り方についてまとめることにしたい。

2. はじめに

低学年児童の好きな教科・楽しい教科を尋ねると、「生活科」を多くの児童が選んでいる。しかし、選択の理由を尋ねると、必ずしも満足できるものではない。理由の一例を挙げてみよう。「国語や算数と違って宿題がないから」「お祭や遊びが多くて楽しいから」「何をしても先生から文句を言われないから」etc.。ここで問われるのは「生活科」の“楽しさ”の質である。また、保護者からは「生活科」の勉強は何をやっているのか分からない、このままでは学力が低下するのではないか、などといった疑問の声も出ている。「生活科」がめざす学力とは何か-学力の質も問われている。本論では、望ましい「生活科」の授業をどの様につくるのか、問題のある授業と対比させながら論じていくことにしたい。

3. 価値ある体験・活動をすることの重要性

「生活科」の教科目標は、具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせることである。しかしながら、体験や活動を通して何を学ばせたいのか曖昧のまま、細切れの疑似体験を次から次へと行っている実践をよく見かける。教科書に取り上げられた課題を吟味せず、ただひたすら「やらせ」しているために、児童の学習意欲は高まらず、教師の指導方針も一貫せず、児童も教師も不満足なまま授業が終了してしまうのである。かつて批判された「生活単元学習」における“這い回る経験主義”の再来になってはいけない。教材を精選し、本当に価値ある体験・活動ができるように（註）、教師は工夫を凝らす必要がある。そのためには、系統性を持った教材編成が重要である。

註：有田(1994)は、図3のような体験活動を中心に据えた「生活科」の授業構想を提起している。活動意欲や疑問を活かした体験活動や実感・体得すべき内容についての提起は、「生活科」の授業論を考える際に、示唆を与えてくれよう。

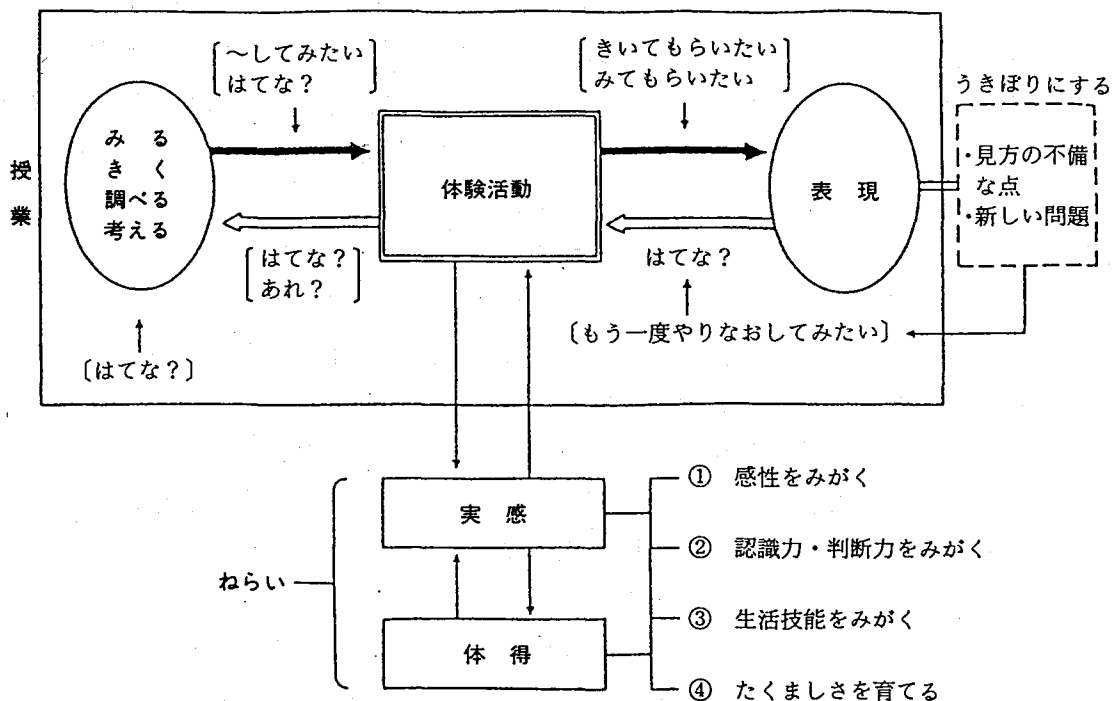


図3 「生活科」の授業の構想 (有田, 1994)

4. 五感を大切にした授業

「生活科」の授業は、一斉授業の占める割合が低下し、活動場面が多くなる。単に見て調べるだけではなく、視覚以外の感覚も活かせるような活動がよい。「学校探検」の単元の授業では、かつての「社会科」でみられたように、教師が児童を統導して、学校内の施設を紹介する形態よりも、数名のグループが自らの計画・希望に従い、自由に探検するのが望ましい。保健室の探検では、消毒液の臭い・白衣を着た養護教諭・設置されたベッドを通して、病院との類似点・相違点を発見させ、保健室の機能と養護教諭の職務内容が理解できるように援助する。また、給食室の探検では、調理の匂いや調理器具の大きさ、大量の食品の観察を通して、家庭での調理との比較を行わせたい。

「地域探検」の授業で「川」を取り上げる場合、初春の雪解けの水の冷たさや初夏の心地よい水の感触を、実際に児童が川の水に足をつけることによって感じ取らせたい。「公園」や「森」を取り上げる場合では、植物の観察だけに留まらず、虫や鳥の鳴き声の四季折々の変化にも目を向けさせたい。

5. 認識形成を重視した授業

「生活科」の誕生に際して、低学年児童の思考は未分化であるために、「理科」「社会科」で育成される自然認識や社会認識の形成は、「生活科」の授業では求めるべきではないという議論がなされたことがあった。確かに、低学年児童は中学年児童よりも思考や認識の発達段階は低いレベルにあるが、教材の提示の仕方や指導の仕方によっては、十分に認識の形成がなされるのである（例えば、仮説実験授業による自然認識の形成）。教材内容や指導方法の検討ぬきに、一般論として思考の未分化性を強調するのは、昨今の発達心理学・認知心理学の到達点から考えても問題がある。思考の未分化性を強調するが故に、擬人化になったり、遊び・イベント中心主義や心情主義に陥り、生活実感からかけ離れた授業になってしまうのである。

「生活科」では自然認識・社会認識の芽を養うと共に、自分とのかかわりという自己認識も念頭に置く必要がある（この点が「理科」と「社会科」の単なる合科ではない理由の1つである）。しかし、自己認識は時には主観的になりすぎるので、教師の適切な指導が必要となってくるのである。

「生活科」の教科目標に「自立への基礎を養う」という記載がある。自立への基礎をきわめて矮小化して捉えてしまうと、「生活科」は「しつけ科」「第2道徳科」になってしまう。「自立への基礎を養う」ことは、「生活科」以外の教科でも、また教科外活動でも養う必要性があり、認識形成とかけ離れてなされるべきではない。

「生活科」での遊びは、幼稚園での遊びとは質的に違う。“ごっこ遊び”の例として、買い物ごっこを考えてみよう。「生活科」の買い物遊びは、地域探検で学習した商店の仕事を遊びを通して体験する。漫然と遊ぶのではなく、商品の流通のメカニズムの理解や貨幣の役割などを理解させる必要がある。買い物ごっこは、社会認識の形成と切り離してはいけなく、幼稚園での遊びよりも、体系的・組織的で、深化されたものでなくてはならない。遊びっぱなしではなく、必要に応じて教師の指導・援助が入り込むべきであろう。

3つの認識（自然認識・社会認識・自己認識）の形成が価値ある体験とうまくリンクしてこそ、真の意味での自立への基礎が養われ、知育も徳育もなされるのではないだろうか。

6. 「生活科」における指導とは

「生活科」は「理科」や「社会科」とは違う教科であることを強調するあまり、教師は指導してはいけないとの主張を時に耳にする。しかし、ここで用いられている“指導”という言葉の概念は、「教え込み」「知識注入」といったきわめて狭い概念である。教育心理学で用いられる“指導”は、この様な狭い捉え方をしてはいない。例えば、「生き方」「在り方」の指導と呼ばれる今日の進路指導では、生徒の自己理

解を促進させ、職業観を身につけさせる支援が中心となっている。“暖かく見守る”ことも、“ほめる”ことも、広義の意味での“指導”に含まれる。

教師の指導を否定した「生活科」の授業は、活動しっぱなしの放任主義に陥ってしまう。当然、指導の観点がなかったり、希薄になったりして、一貫性もなく、児童にとっても困惑するであろう。

では、「生活科」における指導とはどういうものであろうか。「生活科」では一斉指導の占める割合が低下し、多様な活動が中心になる。結果を教えるから活動するのではなく、児童が自主的に活動できるよう教師の指導性が発揮されなければならない。前述の「学校探検」の授業の場合、うまく活動に参加できない児童に対して、探検の仕方をアドバイスしたり（教職員に対する質問の仕方、校舎の位置の確認など）、全体のまとめを行う時に、子どもの発言を引き出すための指導が求められる。「夏を見つけよう」という単元で、ボーッとして何も見つけることができなかつた児童を放置していた授業があったが（助言者は、その子なりに夏を見つけていたのだから、指導をする必要がないとコメント）、やはり活動に参加できぬ児童や誤った活動をしている児童には、教師が積極的に介入し、指導をする必要性がある。

子どもの様々な疑問を取り上げることは大切である。その場合、正解や結論をすぐ提示するのではなく、課題解決のヒントや手だてを提示し、活動の方向性を定めるのが、「生活科」における適切な指導である。活動中の児童の反応を観察しながら、価値ある重要な発見を行った児童を見つけ出し、活動を振り返るまとめの時間で、学級全体に成果を共有できるようにすべきである。

無藤(1990)は、「生活科」の授業を4段階に分けて、各々の段階における教師の果たす役割を検討しているので紹介しよう。第1段階では、事前に子どもの実態や学習の目標等を考えることであり、①子どもの生活実態の把握、②子ども一人一人の個性の把握、③教育目標の分析 ― が該当する。第2段階では、「生活科」における単元の活動を計画することであり、①子どもの実態と個性を踏まえる、②地域の特性や季節的な移り変わりの在り方の考慮、③子どもの学習と発達の進展の度合いの考慮、④各活動での起こりうる原則的な気付きの見通し、⑤活動の柔軟性の組み込み ― が活動のポイントとなる。第3段階では、実際に活動を実施し児童を導くことであり、①活動の設定、②一緒に活動し遊ぶ、③子どもから離れて見守る、④子どもの興味・関心・気付きに目を止めるだけでなく、共感し子ども自身に伝える、⑤計画の維持と変更を柔軟に行う ― を重要点として挙げている。第4段階では、活動と関連しながら児童の表現活動を導くことであり、①教師が子どもを思い起こすことを手助けする、②表現活動のモデルを教師がある程度示す、③子どもの表現に共感する、④子ども自身の気付きを捉え、それを一般化する試みを行う ― が活動のポイントとなる。

近年、教育において“待つ”ことの重要性が指摘されているが、「生活科」ではこ

の“待つ”ことが大きな役割を演じる。“待つ”ことと放任主義とは、大きな違いがあることを改めて認識しておきたい。

7. 合科・総合学習的視点にたった授業

「生活科」は従来の低学年「理科」「社会科」を中心に、多くの教科を合科して、或いは総合学習的視点にたった授業として取り組むのがよいだろう。見学や観察した事柄を絵や作品で表現する時には「図画工作」として扱い、文章で表現する時には「国語」として扱える。収穫した野菜や果実の調理や、ダンゴづくりを行うこともあるが、「家庭科」のように分量や調理方法を厳密に設定するのではなく、ある程度児童に任せた形で行えばよい（失敗を通して新たな学びが始まる）。

合科・総合学習的視点にたった授業の展開例を述べてみよう。「子ども郵便局をひらこう」という単位では、従来の「社会科」のように郵便局見学から始めるのではなく、牛乳の紙パックで葉書づくりを行うことから開始したい。葉書づくりは、リサイクルを通して、環境教育とも結び付けることができる。自分が作った葉書を用いて文章を書くことは、自我関与が高まり、強い動機づけになる。手紙・葉書文の書き方は、「国語」の授業と関連づけられる。ポストに投函した後、どのような経路を経て受取人に届くのか、児童に考えさせ、疑問点を明確にさせながら、郵便局見学へつなげていく。疑問点や郵便の仕組みを教師が解説するのではなく、郵便局員に児童が尋ねるように仕向けていきたい。郵便局見学後、校内で「子ども郵便局」を開設し、郵便のシステムを活動を通して理解させていく。学級内での郵便屋さんごっこに留まらず、上級学年の児童や学校内の教職員へ手紙や葉書を出せるように教師は対処し、学校全体に交流・コミュニケーションの輪を拡げられるように努めたい。大量の郵便物を仕分けるためには、郵便番号が役立っていることが理解できれば望ましい。さらに、電話や新聞・テレビなどの通信・伝達手段も取り上げて、比較・検討することも望みたい。

「パン工場の見学」は、従来は「社会科」の単位として取り扱ったが、「理科」の「小麦の栽培」と結び付けて、合科的な指導にすることも「生活科」では可能である。小麦の種から発芽し、成長していく様子を観察し続け、結実まで追いつけていきたい。春に植える植物と秋に植え越冬する植物との違いや「麦ふみ」の果たす役割 — アサガオや大豆では茎や葉を踏んではいけないのに、何故麦は踏む必要があるのかという疑問を子どもたちは抱く — を理解させていきたい。収穫後、脱穀・製粉して小麦粉を作らせ、可能であればパンを作る場を設ける。そして、パン工場の見学へとつなげていく。パンは小麦粉だけではなく、牛乳やバター、卵、砂糖など多くの食糧で作られ、農家だけではなく、酪農家とのかかわりもあることを理解させたい。

「生活科」の場合、児童が活動に集中し、“のっている”状態の時は、単位時間内に終了しないことが多い。児童の思い・願いを活かすためには、時間配分を柔軟に考

え、合科的扱いをすることがよいだろう。

8. 失敗から学ぶ

アサガオなどの植物栽培において、枯れたり、開花・結実しなかった時や、昆虫や小動物の飼育において、死んでしまった時など、失敗に終わった活動も、何故そうなったのか、考えさせる機会になる。成長した日向のアサガオと枯れてしまった日陰のアサガオの発育の違いなどを比較させ、植物の成長には太陽の光が必要であることを体験を通して理解させたい。成功事例だけではなく、失敗事例も取り上げ、両者の比較を通して認識が深まるよう工夫を凝らしたい。

9. 3年での「理科」「社会科」との接続性を持ったカリキュラム編成

「生活科」は「理科」と「社会科」を合科したものではなく、全く新しい教科であるとされている。従前は、低学年から自然認識や社会認識の基礎を確立させるために、「理科」と「社会科」が設定されていた。しかし、これらは3年へと後退した。動物を例にとっても、2年生までは“自分とのかかわり”を重視し、感性の育成を強調した指導がなされたのに対して、3年生になると、科学的認識の形成をめざした指導がなされるようになる。教師にとっても児童にとっても、ギャップや戸惑いを感じるであろう。このような事態を避けるためにも、2年生の後半からは、自然認識・社会認識の形成にウェイトを置いたカリキュラム編成・指導を行い、3年生でのスムーズな「理科」・「社会科」の導入学習が行えるようにすべきである。〔研究4〕の調査結果にも見られるように、「生活科」の校内研修・研究体制は、多くの学校では低学年担当教師のみで研究部会を構成している。しかし、3年での「理科」「社会科」との接続性を持った「生活科」のカリキュラム編成や授業づくりを推進するためには、低学年担当教師だけではなく、「理科」「社会科」の研究委員や3年生担当教師も加えて研究を行うことが大切である。

10. 「生活科」の評価

最後に、「生活科」の評価について触れておこう。「生活科」に限らないが、「指導と評価の一体化」は重要なことだからである。授業における評価でも、通知表の評価でも、指導要録の3つの観点をそのまま用いている学校は多い。授業における評価では、指導そっちのけで、チェックリストや観察表の記載を行っている教師が目につくが、極言すると、評価のための指導（実際には指導すら行えない）になってしまう危険性がある。長いスパンで児童の活動を観察し続けながら、評価を行いたい。一単位時間で指導要録の3つの観点を全て評価することは、無理ではないだろうか。「関心・意欲・態度」のような情意的領域の評価や思考力・判断力の評価などは、長期的

・継続的に評価すること、そして多面的な視点で評価することが求められる。〔研究4〕の調査結果でも、子どもの発言や作品、自己評価、観察など多面的な評価方法を採用していることが見いだされている。

通知表の観点別評価の観点は、指導要録の観点をそのまま用いる必要性や義務はない。「生活科」の趣旨から考えると、やはりその学校らしさの現れた、地域に根ざした教育活動を反映した評価項目を設定するのが望ましいと言えよう。

認知的領域（自然認識・社会認識に関わるもの、指導要録の“気付き”に該当）は到達目標を設定して評価する「観点別評価」（他教科と異なり、2段階評価でもかまわない）を採用し、他の領域（指導要録の“思考・表現”と“関心・意欲・態度”に該当）の評価は「自由記述」を採用すればよいだろう。児童の“よさ”や変容の過程などは、「自由記述」欄で文章表現すれば、保護者の理解も得られやすい。

11. おわりに

「生活科」は週あたり3時間で、総学習時間に占める割合も多くない。だからといって、手を抜いたり、お茶を濁すようなお粗末な実践は避けたい。「生活科」は自己教育力の育成にふさわしい教科でもある。問題解決能力、認識能力や表現力を発達させることも大いに可能である。また、「生活科」の導入に伴って、家庭や地域の教育力が高まってきたとの報告も多い。このような能力を高めるためには、教師のTPOをわきまえた適切な指導が必要である。「生活科」が小学校の教育改革の起爆剤となるか、学力低下の原因となるかは、教師の力量（教材開発と指導の仕方）にかかっているとと言えるだろう。

[文 献]

有田和正 1994 大学における「生活科の授業」はどうあればよいか せいかつか
（日本生活科教育学会学会誌），1，16-21.

無藤 隆 1992 生活科の心理学 初教出版

[付 記]

〔研究7〕は、拙著『学力・能力・適性の評価と指導—学校心理学視点から—』（京都法政出版，1994年）の第15章を加筆・修正したものである。

[全体的まとめ]

「生活科」の授業づくりと評価のあり方について、授業実践の分析と調査を基に、教育心理学の視点から明らかにした。得られた知見の概要は以下の通りである。

- ① 文部省の研究指定校などの「生活科」の先進校を対象とした調査では、通知表の「生活科」の評価は観点別評価が中心であることや指導要録の観点の内、「気付き」や「関心・意欲・態度」が評価に際して困難であること、授業における教科書の活用度は低く、地域に根ざした教材の開発が行われていることなどが見いだされた。
- ② 現行の「生活科」の教科書の内容分析を行い、タイプ別に事例検討を行った。
- ③ 本格的実施後、4年を経過した時点で、一般の小学校の「生活科」担当教師を対象とした調査では、「生活科」を履修している現在の低学年児童は、「生活科」がなかった時の当該児童よりも「行動力」「表現力」「創造力」「企画力」「協調性」などが少し優れているが、「落ち着き」が少し劣っていること、指導や評価に際しての問題点としては「通知表・指導要録での評価」や「個に応じた指導の仕方」などが多く指摘されていた、「生活科」の授業での評価は多様な手法が用いられているが、ペーパーテストの活用度は低いこと、チーム・ティーチングの導入は2割程度と少なく、校内の「生活科」の研修体制も多くの学校では低学年の教師のみで実施されている — を見いだした。
- ④ ③と同様に、3年生担当教師にも調査を行ったところ、「生活科」を履修した3年生は未履修者の当該児童と比べて、「行動力」「企画力」「創造力」「表現力」などが少し優れ、「落ち着き」が少し劣っていること、3年生の「理科」「社会」の指導についての問題点としては、自然認識・社会認識の基礎が身につけていないことや系統性の欠如（「理科」）、観察・資料を読み取る力が十分に身につけていないこと（「社会」）などが少し感じられており、「生活科」の授業に対する要望では、これらのことを含めて多岐にわたっていた、「総合学習」「合科学習」はほとんど実施されていない、「生活科」的なものを中学年以降にも設けることについての賛否は、反対・不要派の方が多いが、意見は多様であること — を見いだした。
- ⑤ 「生活科」「総合学習」の年間指導計画について、6校の事例を検討した。
- ⑥ 最後に、上述の知見を踏まえ、「生活科」の授業づくりについて提言を行った。
最後に、残された課題について述べよう。「生活科」はその教科目標も指導方法も他の教科とはかなり違っている。「新学力観」の最も反映された教科であるとも言える。本研究では、具体的な教材分析とそれに伴う指導方法の検討にまで踏み込むことができなかった。この点の解明が今後の課題として残されている。さらに、次の教育課程の改訂では、教科の統合・再編が想定されるが、「総合学習」「合科学習」の視点からの「生活科」の捉え直しとカリキュラム開発、そして中学年以降への導入の是非なども検討すべきであると思われる。

【補足資料】

◎〈研究1〉の〔1〕 到達度評価型の通知表の事例

第2学期

学 習 の よ う す				
教 科	各教科の学習のめあて	評 定		
		よ く で き た	で き た	も う 少 し
国 語	分かりやすく文章を書くことができる			
	分かりやすく話をするができる			
	聞き手に、よく分かるように読むことができる			
	文章を正しく読みとることができる			
	内容を、正しく聞きとることができる			
	発音・文字・文法などの基礎的なことが分かる			
	文字を正しく、ていねいに書くことができる			
算 数	くり上がりのある3位数のたし算ができる			
	くり下がりのある3位数のひき算ができる			
	正方形・長方形・直角三角形が分かる			
	九九がわかる			
	文章題を解くことができる			
生 活	工夫して買い物ができる			
	バスの働きがわかり、安全に利用できる			
	おもちゃを作り、工夫して遊ぶことができる			
	野菜の成長に関心を持ち、世話ができる			
音 楽	音楽に親しみ、進んで音楽活動に参加できる			
	自分の歌声に気をつけて歌うことができる			
	鍵盤ハーモニカで簡単な曲をひくことができる			
	曲の気分を感じとって聴くことができる			
図 画 工 作	自分の思いをもって、進んで造形活動を楽しむことができる			
	想像力を働かせて、表し方やつくり方などを工夫することができる			
	思いのままに手や感覚などを働かせることができる			
	お互いの作品を楽しく見ることができる			
体 育	進んで楽しく運動することができる			
	きまりを守り協力して運動することができる			
	運動のしかたを理解し、よくできる			




◇ 学習の記録




No. 児童名

1 学期		評価項目	評価
国語	○	進んで表現したり、いろいろな読み物を読んだりしようとする。	
	○	場面の様子や順序を示す言葉に気をつけて、内容を読み取ることができる。	
	○	自分の生活の中から題材を選び、順序を整理して書くことができる。	
	○	片仮名を文章の中で適切に使うことができる。	
	○	新しく学習した漢字を正しく読み書きできる。	
	○	漢字の「とめ」「はね」「はらい」に気をつけて字形を整えて書くことができる。	
算数	○	進んで問題を解いたり、計算したりしようとする。	
	○	2位数のくり上がり、くり下がりのあるたし算、ひき算ができる。	
	○	千までの数の表し方、大小、順序が分かる。	
	○	長さの表し方が分かり、簡単な測定ができる。	
	○	分単位の時刻の読み方や時間の単位関係などが分かる。	
	○	かさの表し方や単位関係が分かり、簡単な測定や計算ができる。	
生活	○	身近な自然や社会及び自分自身に関心を持ち、それらと積極的にかかわりながら、楽しく学習する。	
	○	春の高田公園で自然や人々にはたらきかけながら、春を楽しむ。	
	○	成長や収穫を楽しみにして、一生懸命野菜を育てる。	
	○	水生動物を楽しんで採集し、自分なりに工夫して世話する。	
	○	川へ出かけて、自然に親しみながら遊び、夏を楽しむ。	
	○	進んで歌ったり演奏したりして、音楽を楽しもうとする。	
音楽	○	♪ や ♪ のリズムを組み合わせて自分で楽しくリズムをつくることができる。	
	○	自分の歌声に気をつけて「そうさんとこりす」などを歌うことができる。	
	○	リズムに合わせて、「ともだちのうた」などを鍵盤ハーモニカで演奏することができる。	
	○	ふしに合わせて体を動かしながら、「あかちゃんぞうのこうしん」などの曲を聴くことができる。	
	○	自分の思いで、進んで造形活動を楽しもうとする。	
	○	経験したことを気持ちや様子が伝わるように絵に描くことができる。	
工芸	○	材料を生かして、わくわくスリッパを作ることができる。	
	○	形を工夫してお店やさんや動物の親子を粘土で作ることができる。	

学 習 の 記 録 (3学期) 2年生

教科	3学期に学習した主な内容	よく できる	で きる	も う す こ し
国 語	・事柄を正しく表現したり、易しい読み物を進んで読んだりしようとする。			
	・まちがいを直したり、くわしく書き直したりしてよくわかる文章を書く。			
	・話の内容を正しく聞きとり、分からないことは聞き返す。			
	・出てくる人の気持ちや、場面の様子を想像しながら読みとる。			
	・学習した漢字や片仮名を文や文章の中で進んで使う。			
	・点画の接し方、交わり方、方向などに注意して文字を正しく書く。			
算 数	・「はこ」の工作を楽しむ。長さの単位(m、cm)を使って測定し、生活の中で用いようとする。			
	・箱の形の性質を見つけ簡単な展開図を作る。			
	・1000までの数を表わしたり読んだりする。			
	・和が4けたの数のたし算、4けたの数から1～3けたの数を引く計算をする。			
生 活	・地域の冬の行事を調べたり、冬の遊びを工夫し、楽しく遊ぶ。			
	・手紙を出す時や電話をかける時の決まりを調べ、必要なことを進んで伝える。			
	・誕生から現在までの自分の成長の様子を資料を集めたりして調べ、自分をふり返ることができる。			
	・自分の成長を支えてくれた人々に感謝し、これからの生活の目当てをもつ。 ・活動したことや、自分の気持ちを言葉や絵、動作などで表現する。			
音 楽	・音楽に興味や関心をもち、喜んで音楽活動に参加しようとする。			
	・曲の感じに合わせて、体を動かしたり、歌声や楽器で表現する。			
	・階名で模唱したり、暗唱したりする。			
	・自分の歌声を大切にし、気持ちをこめて歌う。			
	・互いの音をよく聴き合いながら楽しく演奏する。			
	・リズムや旋律、速さの特徴をとらえ、曲の気分を感じ取って聴く。			
図 工	・思いのままに進んで造形活動を楽しもうとする。			
	・想像力を働かせて自分の思いを自由に絵や版等で表す。			
	・身近な材料の特徴を生かして作ったり、場を工夫した遊びをする。			
	・かいたり作ったりしたものを、楽しくみたり大切にしたりする。			
体 育	・進んで体育の学習に参加している。			
	・動物や乗物になりきって体の動きによって模倣する。			
	・楽しくスキー遊びをする。			
	・運動後、手や顔を洗ったり、汗をふいたりうがいをしたりする。			

教科	評 価 の 観 点			
国 語	習った漢字の読み書きができる。			
	句読点に気をつけて音読できる。			
	したことを思い出して順序よく書ける。			
	文章の内容を読みとれる。			
算 数	くり上がりのある2けたのたし算ができる。			
	くり下がりのある2けたのひき算ができる。			
	長さ (cm, mm) の単位と、その関係がわかる。			
	かさ (l, dl) の単位と、その関係がわかる。			
生 活	野菜の育て方を調べたり、花や実のつき方を観察することができる。			
	野菜を育てるには水や肥料が必要なことがわかり、実は花のあとにできることが理解できる。			
	水にすむ生き物の飼い方を調べたり、生き物のようすを観察することができる。			
	生き物にはそれぞれの特徴に合った食べ物やすみかが必要なことがわかる。			
音 楽	伴奏に合わせて歌うことができる。			
	鍵盤ハーモニカで音符の長さに気をつけて演奏できる。			
	曲に合わせてリズム打ちができる。			
図 工	したこと、思ったことを絵で楽しく表現できる。			
	粘土を使って立体感のあるものが作れる。			
	のりやはさみを使い、しっかりした作品が作れる。			
体 育	鉄棒で足ぬきまわりや逆上がりなどができる。			
	きまりを守って力いっぱいボール遊びができる。			
	マットで、後転・開脚前転・開脚後転などができる。			

	学習した事が わかっています。		わからない ところがあ ります。		わからないところが たくさんあります。 がんばりましょう。
---	--------------------	---	------------------------	---	-------------------------------------

「千原の子」の見方

- 1 学期における各教科の学習目標の達成状況について、観点ごとに評価しました。
「特別活動のようす」、「生活のようす」についても、評価してあります。
◎は、十分に達成している。 ○は、おおむね達成している。
△は、達成が不十分である。
- 2 自己評価(自分)を取り入れました。
- 3 評価は示していません。

2 学 期

教科	評 価 の 観 点	自分	先生
国 語	国語に対する関心を持ち、進んで読書することができる。		
	伝えたいことが、聞き手によくわかるように、順序を考え整理して話すことができる。		
	場面の様子を思いうかべながら、音読することができる。		
	主語・述語・修飾語の使い方に気をつけ、順序がよくわかるように書くことができる。		
	話し手の伝えようとする内容を、正しく聞き取ることができる。		
	説明されている事柄を正しく読み取り、整理することができる。		
	片仮名や漢字を正しく使うことができ、音声・語句・言葉遣いなどがわかる。		
	点画の接し方・交わり方・方向に注意して文字を正しく書くことができる。		
算 数	簡単な数量に親しみを持ち、それらの知識や技能を用いようとする。		
	式を用いて簡潔に表したり、十や百を単位として数の大きさをとらえたりすることができる。(大きな数のひき算、たし算とひき算)		
	簡単な計算ができ、量の測定をしたりすることができる。(大きな数のひき算、たし算とひき算、かけ算①②、長さ②)		
	数や計算の意味や性質、量の測定の意味などがわかる。(かけ算①②、長さ②)		
生 活	身近な昆虫に興味を持ち、観察したり育てたりすることができる。		
	植物を育てる活動を通して、自然に親しみを持つことができる。		
	バスによって目的地まで行くことができる。		
	秋の自然とかかわる中でおもちゃを作り、それを使って楽しく工夫して遊ぶことができる。		
	秋から初冬にかけての学校周辺および地域の自然や人々、建物などを自分の生活を通して、進んで見たり調べたりし季節の変化に気付くことができる。		
	附小郵便局を開き、仕事に携わる人々の努力や工夫に気付くと共に、必要に応じてハガキや手紙を出したり、電話をしたりすることができる。		
音 楽	すすんで楽しく音楽活動をしようとする。		
	旋律に簡単なふしを重ねて歌うことができる。		
	けんばんハーモニカや打楽器で簡単な合奏ができる。		
	即興で簡単なリズム打ちができる。		
	様子を思いうかべながら楽しく曲や歌を聴くことができる。		
図 画 工 作	自分の思いで進んで造形活動を楽しもうとする。		
	感じたことなどをもとに、造形遊びを工夫したり、表し方やつくり方などを考える。		
	感じたことや考えたことを作ったり描いたりすることができる。		
	描いたりつくったりしたものなどを楽しく見るすることができる。		
体 育	リレーあそび	みんなと仲よく、進んで楽しくしようとする。	
	フットベースボール	運動が楽しくできるように仕方を考えたり、工夫することができる。	
	とび箱あそび	各種の運動が楽しくできる。	

◎〈研究1〉の〔2〕 指導要録の評価の困難な観点について－困難さの理由についての自由記述（文体は全て常体で統一し、一部の仮名を漢字に直した以外は原則として原文のままとした。紙幅の都合上、一部を割愛した。）

(1) 生活への関心・意欲・態度

文部省協力校

- ・評価が主観的になりやすい。
- ・生活科の授業以外での生活への関心が強いが、一人一人の児童のチェックに片寄りが見られる（静かな子は見落としがち）。どうしても表現力が豊かな児童が目についてしまう。
- ・単元によってその子の好きなものとあまり好きでないものがある。それによって、関心・意欲・態度は変わってくる。このことを1年間まとめた評価として記入するのは難しい。
- ・表面には出てこない関心・意欲・態度の高まりを教師がどの様に把握していくのか、決定的な具体策がないため、評価が難しい。
- ・非常に見えない部分である。少なくとも子ども達は、働きかける自然・事物に興味を持てば、必ず飛びついてくる。それをあえて評価するのはおかし。
- ・校外へ学習に出かけると子どもの興味・関心がばらばらになり、深まりに欠けることがある。教師の指導意図からかけ離れたものに興味・関心がいき、ハブニングなども多い。教室内はなんとか自分のめあてをもって学習できる。
- ・個人内でも内容によって意欲的に取り組む単元もあれば、あまり関心を示さない単元もあつたりするので、一まとめに「生活への関心・意欲・態度」といっても難しい。個人差があるので、関心・意欲を外に表す子は評価しやすいが、関心・意欲があってもあまり外に表さない子の評価はしづらい（子どもの見取りの難しさ）。
- ・常時、観察による評価が必要になる。

実践校

- ・何を見てどう評価すべきなのかよく分からない。教師側から見ると意欲がないような活動状況でも、本人はやる気を持って取り組んでいたことが、後で作文を見て分かったことがあった。
- ・児童の内的な部分の評価であるため、客観的に捉えにくい。
- ・子どもの表情に表れない時の意欲はどう評価するのか。
- ・表情や言語などで表現できない（しない）子の内面はつかみにくいことがある。

- ・生活科の評価はその子どもの個性を重視し、その子どもなりの関心・意欲・態度を評価するが、指導要録は絶対評価で記入するため、教師の思いが生かされない場面が多い。
- ・一人一人の内面にまで迫るまでの見取りができにくい。表現の乏しさのある子をどう見るか（本質の見きわめ方）。
- ・教師の観察による評価が多くなり、授業者の主観的な評価になりやすい。

(2) 活動や体験についての思考・表現

* 文部省協力校 *

- ・思考があつての気づきであるが、思考の程度を把握することは難しい。評価項目を決め、評価しているが、評価の項目が適正か検討を要する。
- ・思考や表現はその子の中での基準で活動しているため、指導者側の基準で見るわけにはいかない。そこを評価するのであるから、難しい。
- ・子どものよさを見つけようと長い目で見つめようとしているが、子どもの内面の気づきや思考をどれだけ捉えきれているだろうかと疑問を持っている（指導する側の姿勢、子どもの捉え方で変わる点）。
- ・思考の流れは活動を注意深く見ていないと分からない。
- ・何らかの形で表現ができるということは、つまり気付いているというように、「思考・表現」と「気づき」をはっきりと区別できない時がある。

* 実践校 *

- ・思考・表現を評価する際、生活科の教科の性質上、他教科の総合的な力が吹き出る為、国語力、図工・体育等その他の表現力も併せて評価することになる場合がある。
- ・作文力とか、絵の表現力の問題になる時がある。
- ・どの様な場面で評価したらよいか。

(3) 身近な環境や自分についての気づき

* 文部省協力校 *

- ・その子なりの気づきを見取るため、話したり、書かせたりしているが、表現力を伴わないため、見取りが難しいことがある。
- ・作品や結果に表れないこともあるので、過程を十分観察していく必要がある。

- ・自己表現力の不得手な子の内面の気付き（認識の芽生えとしての）を見取るためには、作品分析以外に方法がない（面談もあるが、時間的に難しい）。
- ・気付きの内容を明確にしておかねばならないし、気付いていてもそれを表現しなければこちらは分からない。難しさがある。
- ・その子なりの気付きというものが、どの程度認めてあげられるものか判断が難しい。
- ・どの程度気付けばよいのかははっきりしない。A君ならこの程度気付いて欲しい、B君ならこの程度と、今までの生活体験によって差があるものだから。
- ・その子なりの気付きをそのこの言動で見えていくべきだと思うので、教師は常に個々に関わる必要を強く感じる。一人一人の変容ぶりを確かに捉える教師の力量が問われるので難しい。

実践校

- ・気付くべき内容は統一されたものではないはずで、個々の気付きの内容を大切にすべきだと思うが、教師の主観的要素が強くなってしまう。
- ・関心・意欲・態度の項とダブってしまい、この項についてのみの評価は行いにくい。
- ・個人差が大きく、表出する部分が少ないために捉えにくい。
- ・学習中での発言や記述に表れたり、行動に出てきたりする場合は捉えやすいが、それだけではないように思う。
- ・日常的に子どもをよく見取って活動中のつぶやきを十分把握しておかないと、クラス全員の子どもの評価するのは難しいと思う。自己評価カードにかなり頼っているが、意思表示の苦手な子どもの把握が難しい。
- ・自分についての気付きの評価（自己評価、教師の観察等、作文やカード）が豊富でないと難しい。
- ・自分についての気付き（よさや成長）が低学年の子どもにとっては難しい。
- ・気付いているのかははっきりしない。

(4) 3つの観点に共通した困難さの理由

文部省協力校

- ・単元毎に見ていって、それを総合的に評価する時に、難しさを感じる。

実践校

- ・指導要録の観点別評価は付ける意味がない。なぜなら、生活科はその子のよさを評価すべきものであるので、A・B・Cを付けられない。

◎〈研究1〉の〔3〕 「生活科」の評価全般に関しての問題点や意見についての自由記述（文体は全て常体で統一し、一部の仮名を漢字に直した以外は原則として原文のままとした。紙幅の都合上、一部を割愛した。）

文部省協力校

- ・いつ、どこで、何を、どの様に評価するのか、単元、単位、学期レベルで大きく見取るのは理解できるが、実践段階で無理がある。
- ・教師自身の子どもを見る目の変革が自分ながら驚いている。教えることより育てること、子どもを見取ることがいかに大変か、しかし大切かを痛感している。そして、子どもがすばらしい力（能力）の持ち主であることに感動している。
- ・個々の子どもを大切にしているというならば、個人内評価を進める必要がある。その場合の「基準値」（規準ではない）の設定の仕方は、困難を伴う。また、個人な意評価は教科・単元のねらいとの整合性も考えていく必要がある。いずれにしても、評価は教師が児童を見取るために行うと同時に、指導のチェックとしての教師自身の自己評価としてもしていかなければならない。この後半の議論が欠落しているように思えてならない。
- ・学校行事に追われ、つい生活科にしわよせがくる。時間数のことで悩んでいる。
- ・生活科は子どもの意欲を最も大切に、その意欲が持続し、高まっていけるためには、支援する教師の力量にかかる点も多いと感じている。先生自身の体験が乏しいと安易な評価になりやすいと感じる。
- ・本音のところ、これらの評価方法がはたとて定着していくのか疑問に思っている。
- ・生活科は活動が中心の教科なので、学期毎に観点別に評価するのではなく、活動毎に頑張ったところを認めてやれるような評価ができたらと思う。
- ・絶対評価よりも個人内評価にすべき。
- ・児童個人に対する評価は最小限のものでよいと思う。個人差を認めた上での学習なので、同じ規準で評価するのはあまり意味がないのではないか。授業そのものの評価は大切。
- ・個人の伸びを認めることのできる評価（個人内評価）が大切なことは分かるのだが、それを実際の授業の中に組み込んでいくことがたいへん難しいと感じている。
- ・初め（導入）の意欲づけが大切であると感じてはいるが、どの子にも意欲が持てる様にするのが難しい。一人一人計画などを聞いていると時間もかなりとってしまう。
- ・自己教育力をつけるという点から、自己評価は大切であると考え。自己評価の積み重ねによって一人一人の変容を期待したい。評価にあまりとらわれず子どもと共に生活科を楽しもうといつも心がけている。評価は友達も保護者も含め、広い視野でいろんな人の目からも行われるべきだ。

実践校

- ・生活科の評価を試行錯誤する中で、子どものよさの見方、捉え方が少しずつ分かってきたように思う。
- ・指導要録で評価の観点を3つに分けていることに疑問を感じる。学習内容からみて、3つは相互に関連しているはずで、別々に切り離すとトータルな子どもの姿とはかけ離れた評価になるのではないか。
- ・本校ではペーパーテストを行っていないので、評価の方法としては教師の観察によるところが多い。そのため一人一人の実態をしっかりと把握しておかないと子どもがどう変容していったのかが分からない。また、教師の主観が入ってくるおそれがある。
- ・指導に生かす評価についてどの様に考えたらよいか。必要最小限の評価活動をしたいが…難しい。
- ・評価にあたって教師が小さな部分（例えば、アサガオの支柱が立てられたかどうかなど）にしばられず、長い時間的スパンを大切にしていくことを肝に銘じていくことが大切である。大切なことは、2年間の生活科の経験が子ども達をどう成長させたか（どんな力が培われたか）ということだと思う。
- ・本当に子どもの活動している様子が、要録に生かされていないと思う（絶対評価のため）。通知表の所見で評価するのがやっとなのである。
- ・相互評価や自己評価の場を時間の中に見つけ、子どもが伸びるための評価の場を見つけなければならない。形成的評価をするべきで、個性伸長を図らなければならない。
- ・一人で40人近い子どもの細かい点までは目が届かない。抽出児を決めて評価する場合もあるが、その時間に思いがけない良い活動をしている子がいたりするので、抽出児を評価する方法はあまり好まない。一学年一学級の場合、その様な点で困ることがある。
- ・一人一人の児童に対して、教師側から支援をしながら評価していく、つまり、指導と評価の一体化をめざして日夜取り組んでいるつもりである。
- ・一人一人を把握する手立てを研究する必要がある。
- ・評価そのものよりも評価したことをどう生かしていくかを今後明らかにしていくことが必要であると考え。勿論多様な評価方法についても。
- ・生活科だけでなく、全教科・領域で学力観・評価観の見直しが必要だと思う。より総合的な学習への発展が大切だと思う。
- ・その単元毎の評価は必要と思う。子どもにフィードバックし、教師の授業態度や単元構成を再考する上では不可欠と思うが、評定する必要は半分位ないと思う。

- ・具体的な活動や体験のさせっぱなしの授業（はい回りの授業）でいいのか、疑問が残る。もし、それを防ぐ必要があるとすれば、教師はそのためにどうすればよいのかが問題である。
- ・単元によって大切にしたいと思う子と・育てたい力があるし、子ども一人一人についてもその子なりの意欲や活動、表現のよさを認めていってやりたいが、今の通知表ではなかなかうまく評価できない。記述と単元別の評価があればと思う。
- ・生活科を活かした他教科への取り組みをどうしたらよいか？ 中・高学年へのつなげ方はどうあるべきか？
- ・評価を考える前に、まず一人一人の子どものよさをしっかりと捉える必要がある。このよさとは、その子の長所というものではなく、その子らしさ、個性といったもので、つまりは、その子自身ということになる。したがって授業では、その子らしいよさをどの様にしたら、どうなっていくかを予想しながら、支援していくことが大切になってくる。評価を考える前に、子どものよさの把握の仕方などをもう少し考えていかなければと考えている。それが評価にいちばん大切なことではないかと思う。
- ・評価も大切と考えているが、本校では、子どもにとって興味や関心のわくもの、また、未体験の素材など地域の特性を生かした教材の開発の研究・実践を重点的に進めている。この素材の開発そのものが、子どもを育てることに直接的につながると考えている。つまり、評価とは、あくまでも題材がより子どもに機能するための補助と考えている。
- ・3段階評価は難しい。生活科こそ「-」がつく児童の良い点をほめて励ましたい。だから、記述式が望ましい。

◎〈研究2〉の〔2〕教科書の問題点についての自由記述（本文で紹介した記述は割愛した。また、紙幅の都合上、若干の記述も割愛した。）

文部省協力校

- ・地域の実態に即していない。
- ・学校独自のカリキュラムなので教科書を使用していない。
- ・望ましい活動だけではなく、問題のある場面なども入れてよいのではないか。
- ・独自の年間計画と合わない（2校）。
- ・教科書の必要性もないので、問題点もない（2校）。
- ・東北地方のため、季節がずれている。
- ・活動のアイデアブックとして使用しているが、子ども達の夢をふくらませたり、活動をふくらませるような内容にやや欠ける。
- ・内容が多く、全部学習するのは時間的に不可能（参考書として取り扱う分にはよいが）。自然に関する分野が多く、社会や自分自身に関する分野がやや色薄く感じる。
- ・「地域を学ぶ生活科・環境を学ぶ生活科」において、全国一律の地域実状になじまない教科書はふさわしくない。もっとも子ども達は、図書の本を見るように何らかの活動のヒントを得るため、活用しているときも目にする。
- ・地域そのものを教材として捉えているので、現在の教科書の記述内容は学習に生かすにくい。植物の名を調べたり、生き物の育て方を調べるなど、もっと図鑑的な要素が強く出てきて欲しい。

実践校

- ・生活科の単元（配列も含めて）が、学校独自であるため、教科書と合わないことが多い。教科書では1年の内容であっても、本校では2年で行うものもある。
- ・教科書自体は大変良くできていると思うが、本校独自の年間計画があるので、教科書にそって学習を展開してはいない。子どもが必要と感じた時に開いている。
- ・単元や展開の仕方が合わないなので、おもちゃを作る場合などに、子どもの考え方を広げるために使用している。
- ・教科書で取り上げている活動は、自分達の学校のある地域の実態によって異なってくるのは当然であるが、これらを授業の中で活用する方法があるのだろうか。活動や体験を重視する生活科に教科書は必要ないと思う。
- ・単元が限定される。もっと絵本的・アットランダムな内容にして欲しい。根本的に必要ないと思う。

- ・教科書を使って云々という質の教科ではないので、理科・社会科型の教科書を作っても意味がないと思う。新しい教科，新学力観を考えた時，旧態依然とした教科書に対する考え方も変えるべきだと思う。
- ・教科書は一般的な実践例であり，その学級・地域にそぐわないことが多い。逆に教科書に頼ると子どもの意識を無視した，教える生活科に落ち込みやすい。
- ・単元構成が画一的。低学年の他の教科書に比べて，内容が簡単すぎる。資料として説明不足。
- ・少々単元の終わりが発表会形式に偏っているように思うが，特に問題点ということはない。
- ・参考書なのでそれなりの利用であり，多くの期待はしていない。
- ・本校は山間僻地校（児童17名，1・2年4名）であり，教科書の内容と地域の実態が合わない単元もあり，活動へのさそいかけ，活動の場面づくり，教師の支援の仕方などの参考書として使用することが多くなっている。

<謝 辞>

〔研究3〕〔研究4〕〔研究5〕の調査を行うに際しては、岩手県二戸市教育委員会指導主事漆原一三先生，神奈川県大和市立柳橋小学校前校長保坂治男先生からご高配を賜りました。厚く感謝いたします。また，「生活科」の授業を参観させていただいた各地の学校および授業を担当された先生方，そして質問紙調査に快くご回答いただいた先生方にも厚く感謝いたします。

平成5～平成7年度文部省科学研究費補助金（一般研究C） 研究成果報告書

「生活科」の教育心理学的研究

— 「生活科」の授業づくりと評価を中心として —

1996（平成8）年3月

編 集 藤岡 秀樹 岩手大学教育学部学校教育講座 助教授

印刷・発行 岩手大学教育学部学校教育講座教育心理学研究室

〒020 盛岡市上田3-18-33

製 本 笹氣出版印刷株式会社